

博士論文

工業高校の進路指導における生徒の  
職業に対する自己効力感の形成要因と役割

2018

兵庫教育大学大学院  
連合学校教育学研究科

山 尾 英 一

工業高校の進路指導における生徒の  
職業に対する自己効力感の形成要因と役割

兵庫教育大学大学院  
連合学校教育学研究科

山 尾 英 一

# 学 位 論 文 要 旨

氏 名 山 尾 英 一

## 題 目 工業高校の進路指導における生徒の職業に対する自己効力感の形成要因と役割

本研究の目的は、工業高校の進路指導における適切な教育的支援の実践に向けて、工業高校生（以下、生徒）の職業に対する自己効力感の構造を把握し、その形成要因と役割を明らかにすることである。

本論文は緒論と結論を含め全10章で構成されている。第1章では、工業高校の現状及び自己効力感に関する先行研究を整理し、①近年、工業高校を卒業した後、関連する業種に就職しない生徒や職業生活を適切に営めない生徒が増えつつあること、②この問題の背景として、生徒が様々な学習経験を自己のキャリア形成と適切に結びつけられず、将来の職業生活に対する見通しや自信、展望などをもてないことを進路指導における実践課題として指摘した。その上で、生徒の職業に対する自己効力感を「工業高校生が将来の自己の職業を適切に営めそうであると感じる遂行可能性の認知」と定義し、上述した実践課題の解決に向けて、1) 生徒の職業に対する自己効力感の構造的な把握、2) 生徒の職業に対する自己効力感の形成要因の検討、3) 生徒の職業に対する自己効力感が果たす役割の検討という3つの研究課題に対処する必要があることを示した（以下、研究課題1～3）。これらの研究課題に対し本研究では、第2章から第10章において、以下のように対処した。

研究課題1に対しては、まず第2章において生徒の職業に対する自己効力感を因子分析的に把握した。その結果、生徒の職業に対する自己効力感が、①職務や職場などの社会的環境に適応するために必要とされる基礎的な資質を形成したことによってもたらされる効力感である「適応資質効力感因子」、②特定の産業分野に関連する領域固有性の高い専門的な知識や技能・資格などを修得したことによってもたらされる効力感である「専門性効力感因子」の2因子（以下、職業自己効力感構成因子群）により構成されていることを明らかにした。第3章では、得られた職業自己効力感構成因子群の進路指導上の妥当性を検討するために、企業が新規入職者に求める基礎的・汎用的能力及び社会人基礎力の形成期待との関連性を検討した。企業の人事担当者を対象とした調査の結果、関連・非関連業種共に、工業高校生の職業自己効力構成因子群への形成期待の高い人事担当者の方が、基礎的・汎用的能力、社会人基礎力への形成期待も高く、これらを進路指導において高めることの重要性が確認された。

次に、研究課題2に対しては、第4～5章において工業高校生の職業に対する自己効力感の形成要因を検討した。第4章では、職業自己効力感構成因子群とキャリア成熟との関連性を検討した。その結果、1学年ではキャリア関心性が、2学年ではキャリア計画性が、3学年ではキャリア自律性が、「適応資質効力感因子」の形成に寄与していることを明らかにした。

しかし、「専門性効力感因子」は、2学年においてキャリア計画性からの影響を受けるものの、1・3学年では有意な影響力は認められなかった。第5章では、3学年進級時(5月)の生徒を対象に、自己概念形成が職業自己効力感構成因子群に及ぼす影響について検討した。その結果、「自律志向性」が「専門性効力感因子」の形成度に、「社会的価値志向性」が「適応資質効力感因子」の形成度に影響するなど、両者の関連性が把握された。しかし、「キャリア志向性」、「自己モニタ志向性」については、その影響力は弱く、進路指導啓発期の段階では、生徒の自己像に基づくキャリアへの展望が将来の職業に対する自信と適切に結びつけられていない傾向が課題として把握された。

研究課題3に対しては、第6章から第7章において、生徒の進路実現に果たす職業自己効力感構成因子群の役割について検討した。第6章では、過去・現在・未来という時間的な連続性の中での将来展望の形成との関わりに着目し、1～3学年の生徒を対象に時間的展望体験との関連性を検討した。その結果、時間的展望の形成に対しては、すべての学年において「適応資質効力感因子」が広範な影響力を有していることが明らかとなった。しかし、「専門性効力感因子」は2学年でのみ影響力が認められたものの、進路実現に直面する3学年においてその影響力が消失することに課題が見られた。第7章では、進路実現のプロセスにおける不決断状況との関わりに着目し、3学年を対象に進路不決断に及ぼす影響を縦断的(5, 7, 10, 2月)に検討した。その結果、「職業決定不安」、「職業障害不安」、「職業情報不足」などの進路不決断状態の回避には、職業自己効力感構成因子群の水準の高さが重要な役割を果たすことが明らかとなった。

以上の結果を踏まえ第8, 9章では、0市内公立A工業高校の具体的な進路指導の中でのアクション・リサーチを実施した。その際、これまでに得られた知見に基づき、①3学年全体を通してキャリアへの関心性、計画性、自律性の向上を図るように進路指導全体を構成し、②「専門性効力感」の因果関係が確認された2学年において関連業種の企業が求める人材像の講話を、③3学年では「キャリア自律性」や「自律志向性」など、進路実現に対する生徒の自律性を高めるために「面接模擬」や「卒業生を囲む会」などの取り組みを取り入れた。その結果、3学年の進路に対する意識が、具体的な進路を決定する10月前後に水準の低下するV字型で推移したものの、「面接模擬」や「卒業生を囲む会」などの取り組みによって「適応資質効力感因子」、「専門性効力感因子」両因子の形成を図ることができた。第9章ではさらに、卒業・就職後の職業に対する自己効力感の変容について追跡調査として質問紙調査及び半構造化面接を行った。その結果、関連業種就職群では、「適応資質効力感因子」が在籍時の水準を維持すると共に「専門性効力感因子」がさらに向上する傾向が認められた。また、非関連業種就職群では、職業自己効力感構成因子群が共に向上する傾向が認められた。しかし、「専門性効力感因子」の向上要因は群間で異なり、前者は主に工業高校在籍時に習得した専門的な知識・技能の直接的な活用経験が、後者は主に実践的な学習経験による自律性などの汎用的な職務能力を発揮した経験がそれぞれ重要な役割を果たしていた。

第10章では、各章で得られた知見を整理すると共に、生徒の職業に対する自己効力感の形成要因とその役割を踏まえた教育的支援のあり方を考察すると共に、生徒が自ら適切な進路選択を、行い自己実現を果たし得る進路指導の実践の方向性を展望した。

## 目 次

<b>第1章 緒論</b>	<b>1</b>
1. 本研究の目的	1
2. 研究の背景及び問題	1
3. 先行研究の整理	3
3.1 職業指導・進路指導及びキャリア教育に関する先行研究	3
(1) 職業指導・進路指導及びキャリア教育の史的展開	3
(2) 今後の目指すべきキャリア教育の方向性	5
3.2 職業に対する自己効力感に関する先行研究	7
(1) 概念の整理	7
(2) 進路選択における自己効力に関する先行研究	12
(3) 工業高校生の進路指導に関する研究	17
4. 研究課題の整理	18
4.1 工業高校生の職業に対する自己効力感の構造把握(研究課題1)	18
4.2 工業高校生の職業に対する自己効力感の形成要因に関する検討(研究課題2)	19
4.3 工業高校生の職業に対する自己効力感が果たす役割(研究課題3)	19
5. 研究のアプローチと論文の構成	20
5.1 研究のアプローチ	20
5.2 論文の構成	22
 <b>第2章 工業高校生の職業に対する自己効力感の構造把握</b>	 <b>26</b>
1. 目的	26
2. 方法	26
2.1 予備調査	26
2.2 本調査	27
3. 結果と考察	29
3.1 調査対象者の状況	29
3.2 職業に対する自己効力感の因子構造	29
3.3 職業に対する自己効力感尺度の再編と妥当性の検討	30
3.4 授業及び学校生活に対する意識と自己効力感との関連性	33
4. 本章のまとめ	34
 <b>第3章 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力、社会人基礎力と 職業に対する自己効力感の形成期待との関連性</b>	 <b>35</b>

1. 目的	35
2. 方法	35
2.1 調査対象	35
2.2 測定尺度	36
(1) 関連企業と非関連企業を把握する項目	36
(2) 普通科高校生，工業高校生のどちらを採用したいかを把握する項目	36
(3) 職業に対する自己効力感形成期待度を把握する項目	36
(4) 「基礎的・汎用的能力」に対する意識を把握する項目	38
(5) 「社会人基礎力」に対する意識を把握する項目	38
2.3 調査の手続き	39
3. 結果及び考察	39
3.1 対象企業の状況	39
(1) 工業高校生の採用意欲の状況	38
(2) 企業が工業高校生に求める職業に対する自己効力感形成への期待	39
(3) 優先して採用したい高校生における職業自己効力感構成因子群の検討	40
(4) 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力の状況	41
(5) 企業が工業高校生に求める社会人基礎力の状況	41
3.2 「適応資質効力感」因子の形成期待の妥当性の検討	42
(1) 基礎的・汎用的能力との関連性	42
(2) 社会人基礎力との関連性	43
3.3 「専門性効力感」因子の形成期待の妥当性の検討	44
(1) 基礎的・汎用的能力との関連性	44
(2) 社会人基礎力との関連性	45
4. 本章のまとめ	46

## 第4章 工業高校生のキャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響 48

1. 目的	48
2. 方法	48
2.1 調査対象	48
2.2 測定尺度	48
2.3 手続き	49
3. 結果及び考察	50
3.1 調査対象者の状況	50
(1) 進路に対する意識の状況	50
(2) キャリア成熟及び職業に対する自己効力感の状況	50
3.2 進路に対する意識とキャリア成熟及び職業に対する自己効力感との関連性	51
3.3 キャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響力	52

4. 本章のまとめ	55
-----------	----

## 第5章 工業高校生の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響

1. 目的	56
2. 方法	56
2.1 調査対象	56
2.2 測定尺度	56
2.3 手続き	58
3. 結果及び考察	58
3.1 工業高校生の自己概念と職業に対する自己効力感との関連性の探索	58
3.2 工業高校生の自己概念と職業に対する自己効力感との因果関係	60
(1) 「適応資質効力感」因子に対する影響力	60
(2) 「専門性効力感」因子に対する影響力	60
(3) 自己概念と職業に対する自己効力感との因果関係	61
3.3 調査結果に対する対象校教員のインタビュー	61
(1) 「自律志向性」因子及び「専門的能力志向性」因子の影響力の強さに関するコメント	62
(2) 「キャリア志向性」因子及び「自己モニタ志向性」因子の影響力の弱さに関するコメント	62
4. 本章のまとめ	62

## 第6章 工業高校生の職業に対する自己効力感と時間的展望体験との関連性

1. 目的	64
2. 方法	64
2.1 調査対象	64
2.2 測定尺度	64
2.3 手続き	66
3. 結果及び考察	66
3.1 調査対象者の状況	66
(1) 学校生活に対する意識の状況	66
(2) 職業に対する自己効力感の状況	66
(3) 時間的展望体験の状況	67
(4) 学校生活に対する意識と職業に対する自己効力感及び時間的展望体験との関連性	68
3.2 職業に対する自己効力感と時間的展望体験に及ぼす影響	69
4. 本章のまとめ	72

## 第7章 工業高校3年時における生徒の職業に対する自己効力感が進路不決断

に及ぼす影響	73
1. 目的	73
2. 方法	73
2.1 調査対象	73
2.2 調査時期	73
2.3 測定尺度	73
2.4 調査の手続き	75
3. 結果及び考察	75
3.1 調査対象者の状況	75
(1) 年度当初の進路に対する意識の状況	75
(2) 最終的な進路選択の状況	76
3.2 進路指導のプロセスにおける進路不決断の状況	76
(1) 進路不決断の推移	76
(2) 最終的な進路と進路不決断との関連性	77
(3) 職業に対する自己効力感と進路不決断との関連性	78
4. 本章のまとめ	80
 第8章 工業高校生の職業に対する自己効力感に着目した進路指導の実践	82
1. 目的	82
2. 方法	82
2.1 調査対象	82
2.2 進路指導のデザイン	83
(1) 3 学年全体を通してキャリアへの関心性, 計画性, 自律性の向上を図る進路指導の構成	83
(2) 関連業種の企業が求める人材像を生徒に把握させる進路指導の取り組み	84
(3) 3 学年における「自律指向性」を促す進路指導の取り組み	85
2.3 測定尺度	85
(1) 学校に対する意識に関する項目	85
(2) 進路指導の取り組みに対する意識の項目	87
2.4 手続き	87
3. 結果及び考察	87
3.1 学校に対する意識について	87
(1) 進路に対する意識の変容	88
(2) 職業に対する自己効力感の変容	89
3.2 最終的な進路の状況	90
(1) 最終的な進路状況別に見た「適応資質効力感」の推移	90
(2) 最終的な進路状況別に見た「専門性効力感」の推移	91



3.3 進路指導の取り組みが職業自己効力感構成因子群に及ぼす影響	91
4. 本章のまとめ	92

## 第9章 実践校における職業に対する自己効力感の就職後の変容に関する事例 検討

1. 目的	94
2. 方法	94
2.1 調査対象	94
2.2 質問紙による調査項目	94
2.3 手続き	95
2.4 半構造化面接の手続き	95
3. 結果及び考察	96
3.1 調査対象者の状況	96
(1) 3年間の高校生活に対する意識	96
(2) 職業自己効力感因子群の状況	97
(3) 関連業種就職群と非関連業種就職群の差異	97
3.2 職業に対する自己効力感に関するコメントの検討	98
(1) 在籍時の自己効力感の維持、向上要因の検討	98
(2) 就職後に職業に対する自己効力感の変容をもたらした経験	100
(3) 就職後から見た工業高校での学習経験への期待	101
3.3 考察	102
4. 本章のまとめ	103

## 第10 結論及び今後の課題

1. 本研究で得られた知見の整理	104
1.1 工業高校生の職業に対する自己効力感の構造把握	105
1.2 企業が工業高校生に求める職業に対する自己効力感形成期待と基礎的・汎用的能力、 社会人基礎力との関連性	105
1.3 工業高校生のキャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響	105
1.4 工業高校生の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響	105
1.5 工業高校3年時の進路指導における生徒の職業に対する自己効力感の変容	106
1.6 工業高校生の職業に対する自己効力感と時間的展望体験との関連性	106
1.7 工業高校3年時における生徒の職業に対する自己効力感が進路不決断に及ぼす影 響	107
1.8 実践校における職業に対する自己効力感の就職後の変容に関する事例検討	107
2. 結論	107
3. 教育実践への示唆	109

3.1 学年の進行に応じた進路指導のあり方	109
3.2 進路指導における指導のポイント	110
3.3 進路指導と教科指導の連携による授業構成の強化	110
3.4 進路指導における多様なコミュニケーションの重要性	111
4. 今後の課題	112
<b>参考文献</b>	<b>114</b>

## 第1章 緒論

### 1. 研究の目的

本研究の目的は、工業高校の進路指導における適切な教育的支援の実践に向けて、工業高校の生徒（以下、工業高校生）の職業に対する自己効力感の構造を把握し、その形成要因と役割を明らかにすることである。

### 2. 研究の背景及び問題

2009年（平成21年）告示の高等学校学習指導要領<sup>1)</sup>では、高校教育の目的として、生徒が社会人として一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得し、個性に応じて将来の進路を決定し、その実現に向けて自らを向上させる力、職業を選択する力を養うことが標榜されている。このうち、工業に関する科目（以下、工業科）を主に学科群として構成している高校（以下、工業高校）では、工業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、現代社会における工業の意義や役割を理解させるとともに、環境及びエネルギーに配慮しつつ、工業技術の諸問題を主体的、合理的に、かつ倫理観をもって解決し、工業と社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てることをねらいとしている。

同学習指導要領に関する高等学校新教育課程説明会資料<sup>2)</sup>では、「工業に関する学科においては、これまでも工業科に関する各教科の履修を通して工業に関する基礎的・基本的な知識・技術を身に付けることにとどまらず、実験・実習という実際の・体験的な学習を重視してそれらの知識・技術を実際に活用できる実践力の育成に努めてきている」と述べている。また、同資料では、「現代の工業技術の進展に伴い、産業界において必要とされる専門知識や技術・技能は、一層高度化かつ総合化するとともに、国境を越えた国際的な分業や国際競争の激化が一層進んでいる」とした上で、「このため、将来のスペシャリストとして必要な専門性の基礎・基本を一層重視させ、将来の職業生活を通して自己実現が図れるよう個性や能力を伸長し、生涯にわたって継続的に学習する意欲や態度を身に付けさせることが重要である」と述べている。

その後、2017-2018年の教育改革においては、中央教育審議会教育課程企画特別部会の論点整理<sup>3)</sup>において、工業を含む専門学科の改訂の方向性について次のように述べている。「主として専門学科において開設される各教科・科目については、専門分野ごとに求められる資質・能力を、産業界や関係団体等との間で共有化しながら三つの柱を踏まえ整理した上で、その中での各教科・科目の位置付けの明確化等や、各教科・科目ごとに身に付けるべき資質・能力の三つの柱に沿った明確化を図っていくことが求められる。特に、職業に関する各教科・科目については、将来のスペシャリストの育成という観点から専門分野の基礎的・基本的な知識、技術及び技能を身

に付けるための教育とともに、社会に生き、社会的責任を担う職業人としての規範意識や倫理観を醸成し、豊かな人間性の涵養等にも配慮した教育の充実が図られてきたところである。一方で、職業の多様化や職業人として求められる知識、技術及び技能の高度化に対応した実践的な教育を充実させるため、スーパー・プロフェッショナル・ハイスクールなどの先進的な取組に関する検証も踏まえつつ、地域や産業界、大学教育や専修学校教育等との連携を一層深めながら、社会の変化や産業の動向等に応じた教育内容の見直しを図ることが求められる。また、急速に変化する社会のニーズとの間にギャップが生じることを防ぐため、専門教科・科目と各職業分野との関連性を強化する取組を更に進めるとともに、地域・産業界等との連携・交流を通じた実践的な学習活動等の充実を図ることも必要である」と述べている。

この指摘を受け、2018年(平成30年)公示の高等学校学習指導要領<sup>4)</sup>では、工業科の目標は、「工業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、ものづくりを通じ、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す」とされた。具体的には、知識・技能として、①工業の各分野について体系的・系統的に理解するとともに、関連する技術を身に付けるようにすること、思考・判断・表現力として、②工業に関する課題を発見し、職業人に求められる倫理観を踏まえ合理的かつ創造的に解決する力を養うこと、学びに向かう力、人間性等として、③職業人として必要な豊かな人間性を育み、よりよい社会の構築を目指して自ら学び、工業の発展に主体的かつ協働的に取り組む態度を養うことである。このように、工業科の教育目標は、これからの産業社会において工業分野の職業人の育成に重点が置かれたものとなっている。

工業科の歴史は、1951年(昭和26年)の高等学校学習指導要領の試案<sup>5)</sup>にまで遡ることができる。同試案で示された高校における工業教育の目標では、「高等学校における工業教育は、将来、日本の工業の建設発展の根幹である中堅技術工員となるべきものに必要な、技能・知識・態度を養成するものである」と述べられており、工業の基礎的な技能を習得し、さらに、工業技術の科学的根拠を理解し、これらを高めるために必要な知識を習得することが求められてきた。その後、1956年(昭和31年)に実施された高等学校学習指導要領<sup>6)</sup>においても「高等学校における工業教育は、中学校教育の基礎の上にたち、将来我が国工業界の進歩発展の実質的な推進力となる技術員の育成を目的とし、現場技術にその基礎において、基礎的な知識・技能・態度を習得させ、工業人としての正しい自覚をもたせることを目指すものである」とされてきた。1960年(昭和35年)及び1970年(昭和45年)の高等学校学習指導要領<sup>7)</sup>における目標においても、「工業の各分野における中堅の技術者に必要な知識と技術を習得させる」と述べている。

しかし、1978年(昭和53年)以降の高等学校学習指導要領<sup>9)</sup>の改定内容では、工業科の目標から「中堅技術者」の養成という文言が削除され、工業科の専門科目の最低履修単位数が35単位

から30単位に削減されてきている。その後、1999年（平成11年）3月告示（2003年一部改定）高等学校学習指導要領<sup>10)</sup>では、工業科の専門科目の最低履修単位数がさらに30単位から25単位にまで削減されてきた。また、卒業単位数に触れても1951年（昭和26年）の試案では、85単位以上となっていたが、1978年（昭和53年）に80単位に削減され、それ以降の現行では74単位以上となった。

このように、上記の資料が指摘する「将来のスペシャリスト」の育成とは裏腹に、十分な専門性を身につけられないまま、卒業していく生徒が増加している。このような状況の中で、近年、工業高校卒業後、関連する職業に就職しない生徒、就職しても定着せずに早期に離職する生徒、フリーターや無業者の増加、就職せずに進路を先延ばしするモラトリアム化する生徒の増加が見られる。そして、それに加え地道な職業を嫌う製造業離れなど多くの問題が発生している<sup>11)</sup>。したがって、工業高校では、3年間の学習指導の集大成として、就職や進学など個々の生徒の進路を実現させる進路指導は極めて重要である。そのため、工業高校の進路指導では、様々な啓発動機と共に具体的な進路の選択、実現に向けた多様な支援が行われている。このような進路指導のプロセスを通して、生徒に自らの適性、資質、能力を見つめさせ、キャリア形成に向けた指導を図りつつ、適切な進路を切り開かせていかなければならない。

### 3. 先行研究の整理

#### 3.1 職業指導・進路指導及びキャリア教育に関する先行研究

##### (1) 職業指導・進路指導及びキャリア教育の史的展開

我が国のキャリア教育の成り立ちについては、1915年（大正4年）、入沢宗壽が著書の「現今の教育」で米国における Vocational guidance を初めて「職業指導」と訳し紹介された<sup>12)</sup>。1919年（大正8年）に、職業行政が中心に青少年に対する公立施設として、初めて大阪市立児童相談所で満20歳未満を児童として扱い、職業指導として学校選択、職業紹介、紹介所の指導を業務として行ったことが職業指導の始まりである。その後、学校教育への職業指導の導入が見られ、1925年（大正14年）、内務省、文部省連盟による通牒「少年職業書紹介二関スル件」が職業紹介所と小学校との連携による職業紹介を求めたことで学校教育へ拡大した<sup>12)</sup>。また、我が国における職業指導の定義については、1947年（昭和22年）に交付された職業安定法5条<sup>13)</sup>によれば、「職業に就こうというものに対し、その者に適当な職業の選択を容易にさせ及びその職業に対する適応性を大ならしめるために必要な実習、指示、助言その他の指導を行うことをいう」と標記されている。また、文部省1955年（昭和30年）の定義<sup>14)</sup>については、「学校における職業指導は、個人資料、職業学校情報、啓発的経験及び相談を通じて生徒自らが将来の進路の選択、計画をし、就職又は進学して、さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸張するよう

に、教師が教育の一環として、組織的、継続的に援助する過程である」と説明された。そして、学習指導要領では、職業指導 (Vocational guidance) から進路指導 (Career guidance) に文言が変更しており、「進路指導とは、生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験及び相談を通じて生徒自らが、将来の進路の選択、計画をし、就職または進学をして、さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸張するように、教師が組織的、継続的に指導、援助する過程をいう」<sup>15)</sup>と定義している。1983年(昭和58年)に改定された内容については、「進路指導は生徒の一人ひとりが、自分の生き方への関心を深め、自分の能力・適性の発見に努め、進路の世界への知見を広くかつ深いものとし、やがて自分の将来の展望を持ち、進路選択・計画をし、卒業の生活によりよく適応し、社会的・職業的自己実現を達成していくことに必要な生徒の自己指導力の伸長を目指す、教師の計画的、組織的、継続的な指導・援助の過程と言い換えることもできる」と明示している<sup>16)</sup>。

一方、日本進路指導学会(2005年に日本キャリア教育学会と名称変更)は、1987年(昭和62年)に進路指導の総合的な定義<sup>17)</sup>を「進路指導は、個人の生涯にわたる職業生活の各段階、各場面において、自己と職業の世界へ知見を広め、進路に関する発達課題を主体的に達成する能力、態度等を養い、それによって、個人、社会の双方にとってもっとも望ましいキャリアの形成と職業的自己実現を図ることができるよう、教育的・社会機関ならびに産業における専門的立場の援助者が体系的・継続的に指導援助する過程である」と示している。その後、文部科学省は、1999年(平成11年)に中央教育審議会の答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」<sup>18)</sup>のなかで、「キャリア教育」という文言を初めて使用している。それは、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技術を身につけるとともに、自己の個性を理解し主体的に進路を選択する能力、態度を育てる教育であるとともに、小学校段階からの発達段階に応じたの実施や家庭や地域などの連携のもと、体系的な学習を重視すると共に、学校ごとの目標設定や教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある」と明示している。そして、文部科学省2004年(平成16年)による進路指導とは、「生徒が自らの生き方を考え、将来に対する目的意識を持ち、自らの意思と責任で進路を選択決定する能力、態度を身につけることができるよう指導援助することである」<sup>19)</sup>と述べており、「進路選択が間近に控えた時期となつてからの指導・援助や斡旋だけではなく、入学から卒業までにとどまらず、卒業後の追指導までも包含した計画的・組織的な教育活動である」と説明している。

さらに、文部科学省2004年(平成16年)は、キャリア教育を「児童生徒一人ひとりのキャリア発達を、それにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と捉え、「児童生徒一人ひとりの勤労観・職業観を育てる教育」<sup>20)</sup>とされている。また、2年後の2006年(平成18年)に60年ぶりとなる教育基本法が改正され、その翌年には、学校教育

法も改正された。そして、2009年（平成21年）告示の「中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会報告書」<sup>21)</sup>には、「勤労観・職業観や社会・職業的自立を図るための能力等を義務教育から高等教育に至るまで体系的に身に付けさせるため、キャリア教育の視点に立ち社会・職業とのかかわりを重視しつつ教育の改善充実を図ることが重要である」と報告している。このように、「職業指導」、「進路指導」、「キャリア教育」と今日に至るまでに文言は変更されてきているが、学校教育における生徒の自己実現に向けた将来設計において、在籍時のみならず、卒業後に至る教育支援に変わりないことは言うまでもない。

### (2) 今後の目指すべきキャリア教育の方向性

文部科学省委託研究（国立教育政策研究所生徒指導研究センター）2011年（平成23年）による「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」<sup>22)</sup>のなかで、これまで、日本の進路指導は継続的・組織的な取組を目指してきたが、「キャリア発達を促す観点から生徒の能力を育てる」という考え方が十分ではなかったことを報告している。それらは、これまで、進路指導の構造化モデルの開発として、欧米諸国のキャリア発達支援モデルを中心に研究の対象とされてきたが、「社会環境、教育体系など学校教育と子どもの成育環境などの背景が日本とは異なるために導入することは意味がないもの」と示された。「しかし、どのプログラムにも『育てるべき能力（Competencies）』として共通する点があることから、具体的能力を決定する過程において参考になる」とされ、2002年（平成14年）に同研究センターが提示した「4領域8能力」は、その先行する研究の成果を引き継いで開発されたものである。それは、1996年（平成8年）から2年間にわたって実施されたもので、『進路指導部会』（小学校、中学校、高等学校、大学教員及び企業の代表者からなる部会委員）は、海外のモデルで取り上げた能力等を参考に『将来、自分の職業観・勤労観を形成・確立して、自立的に社会の中で生きていくために、発達的に育てなければならない能力、態度とは何か』について議論された上で、日本の学校で児童生徒のために実践できることを検討した成果である」とものと報告している。「4領域8能力」とは、「人間関係形成能力（自他の理解能力、コミュニケーション能力）」、「情報活用能力（情報収集・探索能力、職業理解能力）」、「将来設計能力（役割・把握・認識能力、計画実行能力）」、「意思決定能力（選択能力、課題解決能力）」である。また、「進路指導部会」では「『Competency-based（育成する能力を基盤とした）』を理念として、小学校から高校の12年間に及ぶ進路指導の構造化を提案するにいたった」と示している。

それらは、「能力（Competency）」について、「一般には能力と訳されるが、『ある課題への対処能力のことで、訓練によって習熟するもの』という意味を内包し、この言葉の背景には、『できるかどうか』、『可能性があるかどうか』という個人の現能力を重視する姿勢ではなく、『訓練で習熟させられる』、『一緒に努力すればできるようになる』という『育成』の姿勢である。また、

Competent とは『自信をもてる』ことであり、児童生徒が『やればできると感じ、自信がもてるようになる』ことが Competency-based の効果である」と示している。

しかし、これら「4 領域 8 能力」については、①高等学校までの想定にとどまっているため、生涯を通じて育成される能力という観点が薄く、社会人として実際に求められる能力との共通言語となっていない、②提示されている能力は例示にもかかわらず、学校現場では固定的にとらえている場合が多い、③領域や能力の説明について十分な理解がなされないまま、能力などの名称の語感や印象に依拠した実践が散見されるなどの課題が指摘されてきている。

これに対して、キャリア発達は生涯に渡って育成されるべき能力であり、より一層現実在即して社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力として再編された。それは、今後目指すべきキャリア教育として、中央教育審議会 2011 年（平成 23 年）の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」<sup>23)</sup>において、「社会的・職業的自立，学校から社会・職業への円滑な移行に必要な要素」が提言されている。それは、「分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力」として「基礎的・汎用的能力」と示されており、「人間関係形成・社会形成能力」，「課題対応能力」，「自己理解・自己管理能力」，「キャリアプランニング能力」という 4 つの資質・能力の必要性を指摘している。これは、一人ひとりのキャリア発達を支援し、個々に相応しいキャリア形成をしていくために、必要な能力や態度を育てることを目指したものである。

また、経済産業省(2006)<sup>24)</sup>では、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を「社会人基礎力」と提唱しており、3 能力 12 要素の必要性を指摘している。一つ目の能力とされる「前に踏み出す力（一步前に踏み出し，失敗しても粘り強く取り組む力）」は，3 要素で構成されており「主体性（物事に進んで取り組む力）」，「働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）」，「実行力（目的を設定し確実に行動する力）」を示している。また，二つ目の能力とされる「考え抜く力（疑問を持ち，考え抜く力）」も，3 要素で構成されており「課題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）」，「計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力）」，「創造力（新しい価値を生み出す力）」を示している。そして，三つ目の能力とされる「チームで働く力（チームワーク）」は，6 要素で構成されており「発信力（自分の意見を分かりやすく伝える力）」，「傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）」，「柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）」，「状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）」，「規律力（社会のルールや人との約束を守る力）」，「ストレスコントロール力（ストレスの発生源に対応する力）」を示している。今後，社会の変化は早くなり，企業に必要なとされる労働者の働き方にも変化が生じると考えられるが，どのような働き方であっても将来的な計画を生徒に持たせ，職業意識を高めさせなければならない。



このことから、職業を中心とする就職志望者の多い工業高校においては、特定の産業分野に関連する専門性を学んできた自己の学習経験をどのように将来の職業生活と関連づけて、個々の生徒の肯定感や自信などから、職業観・勤労観を形成・確立させ、自立的に社会の中で生きるために必要な能力、態度を育てることは極めて重要と考えられる。

しかし、先述したように特定の産業分野に関連する専門性を学んできた工業高校生であっても、自分に自信があまり持てず卒業後に向けて、関連する職業に就職する意識が低い生徒、進路意志決定ができない生徒、職業生活を適切に営めない生徒、就職してもミスマッチによる早期に離職する生徒、就職せずにモラトリアム化する生徒の増加が見られる。依田(2005)<sup>25)</sup>は、工業高校の教育実践において生徒の自信喪失の現実とその回復の必要性が指摘されていると述べ、生徒の自信を育てることは教育活動の重要なねらいのひとつであるとして、教育的価値概念として深められるべきものであると述べている。

以上を踏まえ、工業高校生に工業高校での学習経験に対する肯定感や自信から将来の職業を展望する感覚を持たせ、主体的に学習に取り組む姿勢を養うことが重要な課題となる。このような、肯定感や自信から将来を展望する感覚は一般に自己効力感と呼ばれている。この課題の対処として換言すれば、現在の工業高校における実践上における教育支援の在り方を提案するためには、専門性を学ぶ工業高校生が学校生活の様々な場面や機会において、どのように将来の職業に対する自己効力感を形成・変容しうるかに焦点を当てなければならない。その際、工業高校における進路指導や学習指導の方法など、工業高校における教育課程とキャリア発達との関連を視野に入れ検討することが重要であると考えられる。ここに、工業高校の進路指導における生徒の職業に対する自己効力感研究の必要性を指摘することができる。

### 3.2 職業に対する自己効力感に関する先行研究

#### (1) 概念の整理

##### ①自己効力感の概念

自己効力感 (Self-efficacy) という概念は、1977 年に”Psychological Review” 誌に掲載された “Self-efficacy toward a unifying theory of behavioral change” という Bandura の論文から用いられた用語である<sup>26)</sup>。Bandura によると自己効力感とは、特定の行動に対する遂行可能性の認知であり、自分は適切な行動をうまくやり遂げることができると感じることであり、自己効力感が高いと行動に直接的に影響を与えると仮定されており、自己効力感が高ければ課題に積極的に取り組むことができ、得られる結果のレベルが高くなる。逆に、自己効力感が低いと課題への取り組みも消極的になり、得られる結果のレベルも低下すると考えられている<sup>26)</sup>。

そして、自己効力というものは、自然発生的に生じるものではなく、四つの情報源に基づいて

獲得されると指摘している。まず、一つ目の情報源である個人的達成 (Performance accomplishments) とは、自ら行動して達成経験することであり、自己効力情報源の中で、最も強力かつ有効な要因とされている。二つ目の情報源である代理学習 (Vicarious learning) 効果とは、自分で行動しなくても社会的モデルの成功過程を観察することで、自分にもできそうだと効力予期を形成することである。三つ目の情報源である言語的説得 (Verbal persuasion) とは、他者からの示唆・勧告を受け、自己効力が上昇することである。四つ目の情報源である情緒的喚起 (Emotional arousal) とは、生理的反応によって効力予期が影響を受けることであると述べている<sup>27) 28)</sup>。また、Bandura(1985)<sup>29)</sup>は、人間の行動を決定する要因として、先行要因・結果要因・認知的要因 (予期機能) の三つを示しており、個人の認知的要因が行動変容に果たしうる役割について検討している。その結果から、ある行動がどのような結果を生み出すかという予期を結果予期 (Outcome expectancy)、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまくできるかという予期を効力予期 (Efficacy expectancy) と呼び、主体がどの程度の効力予期をもっているかを認知したときに、その主体には自己効力があるものと説明している。

このように自己効力感は、学習者と課題との相互作用を通して形成・変容されうる認知であり、短期的・長期的に課題解決に向けた展望や見通しをもたらすものである。本研究では、工業高校生の将来の職業に対する自己効力感を、Bandura の考え方にに基づき、「工業高校生が将来の自己の職業生活を適切に営めそうであると感じる遂行可能性の認知」と定義し、工業高校での学習経験に対する肯定感から将来の職業を展望する感覚と捉えることにする。

## ②キャリア発達の概念

一方、高校での進路指導においては、生徒が社会との関わりの中で将来の自己像を見つめ、その実現に向けて努力しようとする意識を高めていくことが重要である。このような個人と社会との相互作用は、キャリア (Career) という言葉を用いて説明される。キャリアとは、一般的には経歴、履歴またはその人の専門職業、仕事などの意味に使われることが多いが、使用する人や研究者によってさまざまに定義されている。渡辺(2007)<sup>30)</sup>は、「日本においてキャリア (Career) という用語は、職務 (Job)、職種 (Occupation) とほとんど同義語的に用いられている現実もあり、職業生活での昇進、昇格という意味を内包させていたりする。」と述べている。また、『キャリア』という言葉には、『職業との関わりにおける個人の行動』、あるいは『個人が、具体的な職業や職場などの選択・決定を通して創造していく個人側のプロセス』という意味が含まれており、仕事を経験している『個人』『個人の内面』の意味が内包されている」と述べている。

そしてまた、Raynor & Entin(1982)<sup>31)</sup> は、キャリアの概念について「現象学的な概念であると同時に、行動に関わる概念である」とした上で、「個々人が行う事と、その人の自己についての見方とを結びつける概念」とし、キャリアが「長期間にわたって抱く自己についての感覚から成って

おり、それは個人の行為とその結果を通して明確化される。キャリアは、人が自分の社会環境の文脈の中で自己の捉え方を規定する」と説明している。これらの考え方を踏まえ木村(1997)<sup>32)</sup>は、キャリアを①何らかの意味で上昇的な要素を含む仕事（職業的）移動、②個人の生涯にわたって継続するもの、③その中心となるものは個人にふさわしい人間的成長や自己実現であることの3点が含意されていると指摘している。

このようなキャリアの持つ人間的成長や自己概念の要素には、その発達過程を捉える視点が含まれている。ここでいう自己概念とは、Super(1963)<sup>33)</sup>によると「個人が主観的に形成してきた自己についての概念」である主観的自己と「他者からの客観的なフィード・バックに基づき自己によって形成された自己についての概念」である客観的自己の両者が、個人の経験を通して統合され、構築されていくものと示している。また、自己概念は、個人が自分の価値、興味、能力をどのように捉えているかについての多様な側面を持つものであり、その中でキャリアに関する側面に関わる自己概念はキャリア自己概念（Career Self-concept）と呼ばれており、キャリア自己概念を発達させ実現していくプロセスはキャリア発達と呼ばれている。

例えば、Gysbers(2005)<sup>34)</sup>は、生涯にわたるキャリア発達を「一人の人間の人生における役割、そして出来事を統合することによって、生涯を通じてなされる自己発達」と定義としている。このことについて Super (1957)<sup>35)</sup>は、キャリア発達の過程を自己概念の成熟、発達という観点から「成長期」、「探索期」、「確立期」、「維持期」、「移行期」に分類し、生涯にわたる人間のキャリアを時間で表現するライフキャリアレインボーを図示している。

また、Super(1963)<sup>33)</sup>は、青年期の職業に対する興味・関心・考え方や職業選択等を通じて、職業的自己概念が形成されることを指摘しており、浦上(1996)<sup>36)</sup>は、「進路選択過程に対する自己効力感が高いことは、進路探索意図や進路探索行動を促進するものである」と述べている。そして、これらの意識と自己概念との間には、密接な関連性があることも指摘している。これらのことから、工業高校において形成される自己概念と職業に対する自己効力感の間には、浦上が述べるように何らかの関連性があるものと予測できる。そして、Super(1984)<sup>37)</sup>は、キャリア発達課題へ取り組もうとする個人の態度的・認知的レディネスとしてキャリア成熟（Career maturity）という概念を提唱している。キャリア成熟は、心理社会的構成概念であり、それは成長から解放までのライフ・ステージの一連の職業的成熟の程度を意味するものである。

我が国では、坂柳(1999)<sup>38)</sup>が「成人が自分のこれからの人生や生き方、職業生活、余暇生活について、どの程度成熟した考えを持っているかを表す概念」として成人キャリア成熟という概念を定義し、「成人キャリア成熟尺度」を構成している。この尺度は、自己のキャリアに対して、積極的な関心をもっているかという「キャリア関心性」、自己のキャリアへ対して、将来展望を持ち、計画的であるかという「キャリア計画性」、自己のキャリアへの取り組み姿勢が、自律的であるかと

いう「キャリア自律性」の3因子で構成されている。浦上(1993)<sup>39)</sup>は、高校生を対象に坂柳・竹内(1986)<sup>40)</sup>の教育的進路成熟(主に進学に関するもの)と職業的進路成熟の2側面を分けて測定する進路成熟態度尺度を用いて進路成熟と進路選択に対する自己効力感との関連について検討している。その結果、職業的進路成熟と進路選択に対する自己効力感との間に関連性があることを指摘している。

このように、キャリアの概念は発達的な観点から整理され、工業高校のみならず、あらゆる学校段階における進路指導の中心的な概念となっている。しかし、工業高校においては特に、教育課程の持つ専門性と産業との繋がりを背景とするため、生徒にそれぞれの自己実現に向けて将来の職業に対する自信や展望を適切に持たせることが重要と考えられる。

### ③進路不決断に関する研究

工業高校では、3年間の学習指導の集大成として、就職や進学など個々の生徒の進路を実現させる進路指導は極めて重要である。そのため、工業高校の進路指導では、様々な啓発活動と共に具体的な進路の選択、実現に向けた多様な支援が行われている。このような進路指導のプロセスを通して、生徒に自らの適性や資質、能力を見つめさせ、キャリア形成に向けた指導を図りつつ、適切な進路を切り開かせていかなければならない。しかし、特定の産業分野に関連する専門性を学んできた工業高校生であっても、就職を目前に、適切に進路意志決定ができない生徒が少なからず見受けられる。このような生徒は、自らの進路に葛藤し、決定する決断を下すことができない状態にあるのではないかと考えられる。このような、生徒が自らの進路を決断できない状態は、キャリア心理学の分野において、進路不決断 (Career indecision) と呼ばれている (Osipow, Carney & Barak 1976)<sup>41)</sup>。進路不決断について清水(1990)<sup>42)</sup>は、どのような原因で不決断が生じているのかを因子分析し、進路不決断尺度を構成している。この尺度は、「将来の職業の意志決定」に関する8因子で構成されている。第1因子は、職業を決めることの必要性は認識していても、決定するということに不安を抱いていることを意味する「職業決定不安」因子である。第2因子は、職業について考えすぎて決まらない、いろいろと興味があるので決まらないなど、接近-接近の葛藤状態を意味する「職業選択葛藤」因子である。第3因子は、職業について誰かと相談したいという要求の程度を測定する「職業相談希求」因子である。第4因子は、親の反対や社会の変化など、外的な職業の選択に対する阻害因の存在を訴えていることを意味する「職業障害不安」因子である。第5因子は、運や偶然など生徒の能力や努力とは関係しない要因の存在により、職業の決定ができないことを意味する「職業外的統制」因子である。第6因子は、自己の興味、関心、能力、適性、そして職業についての情報がよくわからないので、意思決定ができないとの訴えなどを意味する「職業情報不足」因子である。第7因子は、職業のことをあまり考えたことがない、考えることよりも好きなことをしたい、などのように決定を先に延ばす、あるいは回避する

ことを意味する「職業モラトリウム」因子である。そして、第8因子は、希望は明確にあっても、就職試験やそのための準備に不安があることを意味する「職業準備不安」因子である。なお、本尺度は、中学生を対象として作成された尺度であるが、奥井・大里(2004)<sup>43)</sup>によって、若年労働者への適用においても利用可能であることが検証されており、この尺度を用いて大学生を対象とした萩原・櫻井(2008)<sup>44)</sup>や粕川・木村(2009)<sup>45)</sup>の研究などが行われている。このことから、本尺度は、将来の職業に関係する特定の産業分野への就職を中心とする工業高校生への適用も可能であると考えられる。また、進路不決断と自己効力感との関連について浦上(1995)<sup>46)</sup>は、これまでの進路不決断研究の成果がより直接的な介入に反映させるためのものであり、自信の無さという概念を、不決断を訴える者への介入の視座から、自己効力感という観点から捉え直したものであると述べている。さらに、自分の進路を決められないでいることを示す進路不決断と自己効力感との関連について今後の研究が極めて重要であると指摘している。

このことから、工業高校で学ぶ自己の学習経験から進路を決定しなければならない工業高校3学年が、進路指導のプロセスにおいて、どの程度の進路不決断の様相を呈し、それがどの時期に解消されていくのかを把握することは、今後の工業高校における進路指導のあり方を検討する上で、基礎的な資料となると考えられる。

#### ④キャリア発達と自己効力感との関連性

職業に対する自己効力感のように、生徒の進路選択やキャリア形成における自己効力感（進路に対する自己効力感, Career Self-efficacy）の概念を初めて用いたのは, Hackett & Betz(1981)<sup>47)</sup>である。彼らは、Bandura の提唱した社会的学習理論を職業選択の領域に応用し、社会的認知理論 (Social cognitive theory) を構築している。さらに、Betz & Hackett(1981)<sup>48)</sup>は、職業に対する興味と職業に関する自己効力感との間に関連性がみられており、効力の信念が強いほど、所定の職業分野に興味をより多く示し、職業に関する自己効力感が、職業興味を高めていくことを示している。そして、Taylor & Betz (1983)<sup>49)</sup>は、「進路選択に対する自己効力の強い者は、進路選択行動を活発に行い、努力をする一方、自己効力の弱い者は、進路選択行動を避けたり、不十分な活動に終始してしまう」と述べている。特に、Lent, Larkin & Brown(1989)<sup>50)</sup>は、職業に関する自己効力感と職業に対する興味が結びついて生徒が自己の職業選択を予測すると指摘している。

また、Lapan & Jingleleski(1992)<sup>51)</sup>は、「職業に関する自己効力と職業に対する興味、職業に対する希望達成の期待が相互に強く関連している」と述べている。さらに、Hackett & Lent(1992)<sup>52)</sup>によると、現在の職業に関する自己効力は、結果的に興味を通して直接的・間接的に将来の仕事の遂行と選択に影響を与えることが指摘されている。

このような将来への展望と現在の行動とを関連づける心理的要因について、Lewin(1954)<sup>53)</sup>は時間的展望体験という概念を提唱している。ここでいう時間的展望体験とは、「ある一定の時点に

における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」である。このことから、富安(1997b)<sup>54)</sup>は、自己効力が将来の行動遂行の確信度を意味することから考えると、自己効力と将来に対する見通し、つまり未来に対する時間的展望との間に密接な関連があると考え、進路決定自己効力と時間的展望との関連について、大学3年生を対象とした研究が見られる。この尺度は、日本の大学生の様々な進路を想定し、卒業前と卒業後の進路決定行動に必要であると考えられる質問項目として、Taylor & Betz(1983)<sup>49)</sup>、Crites(1965)<sup>55)</sup>、中西(1976)<sup>56)</sup>、竹内・坂柳(1982)<sup>57)</sup>及び下山(1986)<sup>58)</sup>の各尺度を参考に構成したものを用いて調査している。また、白井(1994)<sup>59)</sup>は、時間的展望体験の構成因子として将来の目標があるか、そのために何を準備しているかという「目標指向性」因子、自分の将来に希望が持てるか、将来を切り開く自信があるかという「希望」因子、現在の生活が充実しているか、現在の生活に満足しているかという「現在の充実感」因子、過去を受け入れることができるか、過去の出来事にこだわっていないかという「過去受容」因子の4因子を抽出している。この尺度を用いて大石・岡本(2009)<sup>60)</sup>は、青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連について検討している。その他にも、白井の尺度を用いた研究には、奥田(2008)<sup>61)</sup>による大学生の時間的展望の構造に関する研究や當山(2010)<sup>62)</sup>による普通科高校生の学習に対する動機づけと将来展望に関する研究などが見られる。

渡辺ら(2007)<sup>63)</sup>が「キャリアが『時間的な経過』を内包する言葉であるということは、たとえば、『いま』と一時点を、過去および未来という時間軸のなかの通過時点という側面から捉えるという意味である。いまを経験していることを、過去と未来という時間帯のなかで経験として理解するという意味である」と述べているように、工業高校での進路指導においても、生徒のキャリア発達を適切に支援するためには、キャリアの持つ時間的連続性の視点を重視することが重要である。

## (2) 進路選択における自己効力に関する先行研究

### ① 進路選択自己効力の測定尺度研究

Taylor & Betz(1983)<sup>49)</sup>の大学生を対象とした「Career Decision-Making Self-Efficacy Scale(CDMSE)」を参考に開発された自己効力測定尺度研究が見られる。富永(2008)<sup>64)</sup>は、Taylor & Betz によって提唱された CDMSE の訳語が「進路選択自己効力」であることを示し、Betz(2001)<sup>65)</sup>は、進路選択自己効力を個人が進路を選択・決定するにあたって必要な課題を成功裡に収めることができるという信念であることを示している。また、富永は、これまでの進路選択自己効力に関する研究について、発達的な視点からアプローチされた研究は数が少ないことを主張している。さらに、これまでの研究の多くは大学生を対象としたもので、発達的な視点からそのメカニズムを検討した研究などほとんど見られなかったことから、今後は少なくとも小学校段階から大学段階に至るまでの進路選択自己効力の形成過程の検討の必要性を指摘している。

そして、富永(2008)<sup>64)</sup>は、これまでの進路選択自己効力に関する研究を整理し、内容的に大きく「進路選択自己効力の評価・測定尺度研究」、「進路選択自己効力と進路選択に関わる要因との関連を検討した研究」、「進路選択自己効力を高める方法についての研究」の3分類にまとめている。以下に、我が国の進路選択自己効力に関する研究を示すことにする。

## ②進路選択自己効力の評価・測定尺度研究

これまで我が国でも、(CDMSE: 進路選択自己効力尺度)を参考にした進路選択自己効力を測定するための尺度開発の研究が見られる。まず、大学生を対象者とした自己効力尺度については、浦上(1995)<sup>46)</sup>の「大学生の進路選択に対する自己効力尺度」が最も我が国で使用されている尺度であると認められている。この尺度は一因子構造が妥当とされており、その後、研究者による因子分析が行われた研究でも支持されている。一方、浦上(1995)<sup>46)</sup>以降の研究では、古市(1995)<sup>66)</sup>の「進路決定効力感測定尺度」は、「自己適性評価」因子、「計画立案」因子、「職業情報収集」因子、「困難解決」因子の4因子で構成された自己効力尺度を作成している。富安(1997a)<sup>67)</sup>の「大学生用進路決定自己効力尺度(日本語版)」は、CDMSEを翻訳・修正後に、中西(1976)<sup>56)</sup>の「進路発達検査」、竹内・坂柳(1982)<sup>57)</sup>の「進路成熟態度尺度」及び下山(1986)<sup>58)</sup>の「進路未決定尺度」を参照している。その因子構造は、「進路選択」因子、「情報収集」因子、「自己評価」因子、「計画立案」因子、「問題解決」因子の5因子で構成された自己効力尺度を作成している。また、富永(2000)<sup>68)</sup>は、富安(1997a)<sup>67)</sup>と浦上(1995)<sup>46)</sup>を参考にした「進路選択過程における自己効力尺度」を作成している。その因子構造は、「将来展望と計画立案」因子、「基礎情報収集」因子、「強い意志」因子、「興味・関心」因子、「職業情報収集」因子、「職業意義の明確さ」因子、「他者への相談」因子、「就職における自己把握」因子、「問題解決」因子、「挑戦指向」因子、「キャリア計画」因子の11因子で構成された自己効力尺度である。その他にも、安達(2001a)<sup>69)</sup>の「進路選択に対する自己効力感尺度」では、Taylor & Betz(1983)<sup>49)</sup>、浦上(1995)<sup>46)</sup>、古市(1995)<sup>66)</sup>及び富安(1997a)<sup>67)</sup>を参照にしたが、5因子構造ではなく1因子が妥当であることを確認している。長岡・松井・山田(2001)<sup>70)</sup>の「進路選択に対する自己効力尺度」では、浦上(1995)<sup>46)</sup>や古市(1995)<sup>66)</sup>及び富安(1997a)<sup>67)</sup>、長岡・松井(1999)<sup>71)</sup>を参考にしており、「自己評価」因子、「情報収集」因子、「目標選択」因子、「計画立案」因子、「問題解決」因子の5因子で構成されている。

高校生を対象とした評価・測定尺度研究については、浦上(1991)<sup>72)</sup>の「高校生の進路決定に対する自己効力を測定する尺度」、高須(1997)<sup>73)</sup>の「進路意志決定自己効力感尺度」がある。また、大濱・古川(1999)<sup>74)</sup>は、浦上(1995)<sup>46)</sup>及び富安(1997a)<sup>67)</sup>を参考に就職と進学に対応できる「進路選択に対する自己効力測定尺度」を作成している。この尺度は、「進路選択」因子、「情報収集と計画立案」因子、「他者からのアドバイス」因子、「進路変更の柔軟性」因子、「意志の強さ」因子の5因子で構成されている。永作・新井(2002)<sup>75)</sup>の「高校生用進路決定自己効力尺度」は、永作・

新井(2001)<sup>76)</sup>の再検討後、因子妥当性の検討がされ、「進路決定の意志」因子、「情報収集能力」因子、「興味理想決定」因子の3因子が妥当であることを示している。大谷(2003)<sup>77)</sup>は、大濱・古川(1999)<sup>74)</sup>の尺度を使用し、「進路の明確さ」因子、「進路変更の柔軟性」因子、「意志の強さ」因子の3因子を抽出し、学科・学年で進路選択自己効力に差があることを確認している。

また、中学生を対象者とした尺度では、長谷川(1995)<sup>78)</sup>の「中学生用進路決定に対する自己効力尺度」が見られ、その後、松井・奈良井(2001)<sup>79)</sup>、宮崎・西川(2004)<sup>80)</sup>は、尺度作成で長谷川の尺度を参考にしている。

富永は、これらの先行研究には発達の視点が欠如していると指摘した上で、富永(2006)<sup>81)</sup>の「高校生のための進路選択自己効力(HCDMSE)尺度」では、CDMSEと高校生を対象とした既存尺度の全項目の比較検討を行っている。その結果、「職業情報収集」因子、「課題解決」因子の2領域で、特に大学生と高校生の項目内容の違いを示し、高校生独自の尺度の必要性を明らかにしている。さらに、発達段階を考慮した上で、対象者が進路を選択・決定するために必要な行動が、個々の具体的な課題として設定された項目からなる「進路選択自己効力尺度」が求められることを指摘している。

### ③進路選択自己効力と進路選択に関わる要因との関連を検討した研究

③については、進路選択自己効力と進路未決定、進路成熟など進路選択行動との関連についての研究を示している。まず、大学生を対象者とした研究では、富永(2000)<sup>68)</sup>が、女子大学生を対象とした「進路選択自己効力」と実際の進路選択行動(時期・内容)との関連を検討している。その結果、「職業情報収集」因子、「基礎情報収集」因子と早期からの積極的な進路選択行動との間に強い関連が認められている。安達(2001a)<sup>69)</sup>は、社会・認知進路理論(Lent et al,1994)<sup>82)</sup>で設定されている進路発達プロセスについて検証しており、進路選択自己効力と結果期待は、いずれも就業動機を媒介して探索意図に肯定的な影響を及ぼしたことを明らかにしている。また、安達(2001b)<sup>83)</sup>は、CDMSEと古市(1995)<sup>66)</sup>の尺度を参照し、「自己評価と職業情報の収集に対する効力尺度」を作成し、2つの進路選択自己効力から就業動機、そして職業未決定へと至る因果関係について検討している。その結果、「自己評価」因子から就業動機に正のパスが認められている。また、職業未決定への影響には学年差が認められ、1学年は「職業情報収集」因子が、2学年は「自己評価」因子が職業未決定を規定することを示している。長岡・松井・山田(2001)<sup>70)</sup>は、教育実習前後における進路選択自己効力と進路成熟との因果関係を検討している。その結果、教育実習前後における進路選択自己効力から実習後の進路成熟へのパスは有意でなく、実習前の進路選択自己効力は実習前への進路成熟を介して、間接的に実習後の進路成熟を高めていることを示唆している。児玉・松田・戸塚(2002)<sup>84)</sup>は、浦上(1995)<sup>46)</sup>の尺度を用いて大学生の情報収集行動に及ぼす進路選択自己効力及び職業的アイデンティティの影響を検討している。その結果、進路



選択自己効力は、友人等からの身近な情報や目上の人からの情報の活用に影響を与えたことを明らかにしている。高校生を対象とした研究では、大谷・久保田(2000)<sup>85)</sup>が、大濱・古川(1999)<sup>74)</sup>の尺度を使用し、進路選択自己効力(特に「実現性」と「意志」)を高めることにより、生徒の無気力を低減させ、現在の生活への適応を促進する可能性を示している。大谷(2003)<sup>77)</sup>は、進路選択自己効力が高いほど、内的統制感が高く、内的統制感が高いほど、学校適応感も高いことを明らかにしている。

また、松井・奈良井(2001)<sup>79)</sup>は、中学生を対象に、長谷川(1995)<sup>78)</sup>の尺度を文言などの修正を用いて、坂柳(1992)<sup>86)</sup>の「学校適応と進路成熟」と進路選択自己効力との関連を検討している。その結果、1・2学年では、他人から承認を得ている者が進路選択自己効力が高いものの、3学年ではその影響が明確でないことを明らかにしている。また、女子の方が男子よりも進路選択自己効力が高いことも明らかにしている。

### ④進路選択自己効力を高める方法についての研究

④については、進路選択自己効力を高めることによって進路選択者が抱える問題が改善される可能性が高いと考えられることを示している。まず、大学生を対象者とした研究では、川崎(1999)<sup>87)</sup>が浦上(1995)<sup>46)</sup>の尺度を使用し、職業情報検索による進路選択自己効力の変化を検討している。その結果、情報検索の効果は認められなかった。実験群・統制群とも2回目の自己効力が有意に高まったことを示している。下村(2000)<sup>88)</sup>は、浦上(1995)<sup>46)</sup>の尺度を使用し、職業レディネス高群の方が進路選択自己効力が高い。自己分析課題は、進路選択自己効力にあまり影響を与えず、部分的文系ではやや自己効力は高まるが、理系では低まる傾向を指摘している。また、コンピュータによる情報検索そのものが進路選択自己効力に影響を与える可能性も指摘している。三村・白石(2001)<sup>89)</sup>は、富安(1997a)<sup>67)</sup>の尺度を使用し、進路に関する8回の授業の前後で、「情報収集」因子、「計画立案」因子及び「問題解決」因子に有意差が見られ、授業の効果を確認している。高良・金城(2001)<sup>90)</sup>は、浦上(1995)<sup>46)</sup>の尺度を使用し、インターンシップ経験による進路選択自己効力及び職業レディネスの変化は認められなかったが、インターンシップに対する満足度が高い群は、両得点が有意に高まることを明らかにしている。田澤(2002)<sup>91)</sup>は、浦上(1995)<sup>46)</sup>の尺度を使用し、就職活動中開始から終了まで約1ヶ月ごとに縦断調査により、就職活動を行う最中に、大学生の進路選択自己効力は変容することが、質問紙及び面接調査によって明らかにしている。また、その変容には、個人の捉え直しが伴うことを示している。安住・足立(2004)<sup>92)</sup>は、浦上(1995)<sup>46)</sup>の尺度を使用し、学生相談室で行うキャリアグループの効果を検証している。その結果、進路選択自己効力は3学年時よりも4学年時に有意に上昇したが、C、G.参加群・否参加群で有意差は確認されず、C、G.参加者の自己効力は時間の経過とともに(参加前<参加直後<1年後)有意に高まったことを明らかにしている。

高校生を対象としたものは、大濱・古川(1999)<sup>74)</sup>が、進路先訪問との先輩の体験談の効果を検討している。その結果、どちらも進路選択自己効力の変化は有意ではないことを示している。笹谷・小川(2002)<sup>93)</sup>は、自己紹介のためのプレゼンに取り組む授業によって、「計画に対する心構え」因子のみ実験群でプラスの変化が見られ、授業への参加不参加に関わらず、「進路選択とその計画性」因子と「対人情報収集能力」因子は一ヶ月後の再調査時の方が有意に進路選択自己効力は高い結果が見られている。中野・鈴木(2002)<sup>94)</sup>は、浦上(1995)<sup>46)</sup>の尺度を使用し、特性的効力感と進路選択自己効力は正の相関であることを確認し、GSE 上位群は学年とともに進路選択自己効力は下降し、GSE 下位群は学年とともに進路選択自己効力が上昇することを示している。宮下(2003)<sup>95)</sup>は、浦上(1995)<sup>46)</sup>の尺度を使用し、AO 選抜入学者は、進路選択理由がアカデミック型で進路選択自己効力も高いが、AO 選抜の間（高校3年生の6月～11月）の個人内の自己効力には有意差はみられないことを示している。

中学生を対象としたものは、下村(2007)<sup>96)</sup>が、坂柳・清水(1990)<sup>97)</sup>の「進路課題自信尺度」を使用し、コンピュータを活用したキャリアガイダンスの効果について検討している。その結果、コンピュータ活用の仕方を3群（自由使用群・テスト先行群・職業リスト群）設定した実験の結果、コンピュータ使用後に進路選択自己効力は全て有意に高まり、進路成熟度自律度によって効果の違いがあることを示している。これら先行研究では、進路選択自己効力が進路選択者の抱える問題や、進路選択意識、態度との比較的強い関連があることを明らかにしている。この結果から、前述したように富永は、発達視点から検討すべき点について、進路選択能力の発達との相互の影響について、進路選択自己効力と進路選択能力を中心としたキャリア発達の諸側面との関連を明らかにしていく必要があると指摘している。そして富永は、進路選択能力領域について尺度構成を行った河崎(2003)<sup>98)</sup>の、「意志決定への自信」は中学生よりも高校生の得点が低いことから、河崎が、今日の教育事情の中、高校生は生き方を模索しつつも積極的な意思決定をあえて避ける傾向にあるという知見に着目している。富永は、このことから、能力の実態と進路選択自己効力を組み合わせたアセスメントが、より効果的なキャリア発達支援になるものと述べている。

これらを踏まえると、進路を選択・決定するにあたって必要な行動に対する自己効力であり、本研究では、対象者が工業高校生に限定されることを考慮し、廣瀬(1998)<sup>99)</sup>の特定の場面・状況ごとに特定の行動に影響を与えるものであるとの考えから、特定の産業分野を背景に持つ工業高校で習得する技術・技能・資格取得などの学習経験から、将来の職業に対する自己効力感を把握する尺度を新たに構成する必要があるものと考えられる。

以上のように、これまでの進路選択自己効力に関する先行研究から、進路選択自己効力の形成要因として、教科学習や進路成熟などがその影響対象として、キャリア発達や対人関係力等があげられる。これらの自己効力に関する先行研究に基づくと、Betz(2001)<sup>65)</sup>が提唱する進路選択自

己効力は、個人が進路を選択・決定するにあたって必要な課題を成功裡に収めることができると  
いう信念であるとの考えから、工業高校生が将来の自己の職業選択・決定するにあたって将来の  
職業を適切に営めそうであると感じる遂行可能性の認知と捉え、工業高校での学習経験に対する  
肯定感から将来の職業を展望することができる信念であると考えられる。

したがって、工業高校生の職業に対する自己効力感とその関連要因の構造を把握することは、  
今後の工業高校における進路指導と教科指導、生徒指導に向けて極めて基礎的な知見を提供する  
ことができると考えられる。

### (3) 工業高校生の進路指導に関する研究

#### ① 工業高校生の職業に対する意識

これまで工業高校生の職業に対する意識については、いくつかの先行研究が行われている。例  
えば、安田・高部(1986)<sup>100)</sup>が職業選択の経緯や職業的成熟度が入職後の職業適応と深い関係にあ  
り、十分な自己理解と進路情報、保護者や教師との進路相談が重要であることを指摘している。  
柿原・松浦(1996)<sup>101)</sup>は、職業高校生の勤労観に関する認知的な態度と行動的な態度との関連性  
について検討し、勤労観に関する行動的な態度の「目的をもって向上する態度」は、新入生の方が  
在校生より高い傾向にあること、勤労観に関する認知的な態度と行動的な態度を測る尺度間に相  
関があり、両尺度の対応する構成因子間に有意差があることなどを明らかにしている。また、島  
田・森山(2013)<sup>102)</sup>は、工業高校生の自己概念について構造的に分析し、その構成因子として「自  
律志向性」因子、「キャリア志向性」因子、「専門的能力志向性」因子、「社会的価値志向性」因子、  
「自己モニタ志向性」因子の 5 因子を抽出している。そして、学年の進行に応じて、「専門的能  
力志向性」因子が減衰する一方で、「自律志向性」因子と「キャリア志向性」因子が向上する傾向  
のあることを明らかにしている。一方、阿濱・東(2006)<sup>103)</sup>は工業高校生の職業に対する意識と進  
路意識について調査し、就きたい職業の有無が進路選択に対する自己効力や自己実現的態度に関  
連していることを示している。その他にも、逸見・森山(2011)<sup>104)</sup>は、工業科の教師が捉える生徒  
のセンスとして、「熟慮性」因子、「探究性」因子、「適応性」因子、「主体性」因子、「独自性」因  
子の 5 因子を抽出している。その 5 因子と学科、教職経験年数、指導意図との関連性の検討が見  
られている。その結果、「探究性」因子および「適応性」因子においては学科、教職経験年数、指  
導意図等の要因による差異は認められず、工業科の教師間に比較的安定した共通認識が形成され  
ていると推察している。

このように工業高校では、生徒に将来の職業に対する見通しや自信を持たせ、その展望のもと  
に日々の学校生活を主体的に営ませるよう、様々な支援を展開することが重要な実践課題となっ  
ている。

#### ② 学卒就職者の状況

厚生労働省の統計資料によると、2014年(平成26年)3月に高校を卒業し、就職した者のうち、3年目までの離職率は40.8%に及んでいる<sup>105)</sup>。このことから、高校での生活から職業生活へと環境が変化すれば、在籍時に生徒の形成した将来展望や自信がそのまま維持されるとは考えにくく、その他の多様な要因とも連動して、職業的な不適応に陥ってしまうことが危惧される。これらの学卒就職者の早期離職率の上昇問題については、早期離職者数の統計など、マクロデータに基づいて職業意識の問題として取り上げられることが多い<sup>106)</sup>。

工業高校卒業生に関する研究では、赤木ら(1958)<sup>107)</sup>が、「勤労青年教育に関する基礎的研究」として、大阪府立すべての工業高校の電気科と機械科の卒業生を対象に、郵送による調査を行っている。また、長谷川・佐藤(2002)<sup>108)</sup>による「高校工業教育に対する工業に従事している卒業生による評価」では、大阪市立都島工業高校の卒業生の事例が検討されている。その内容から、職業生活に営む卒業生らに「高校の専門科目の何が役立っていると考えられるか」に対する質問項目については、専門教育の有用性が概ね支持される結果が得られ、特に専門科目で学ぶ「理論の基礎」、「実際の技術的知識」が認められている。また、関連業種に就職した卒業生による学科別では、工業化学科に次いで、土木科、機械科、建築科、電気科の順に評価が高く示されている。その内訳として、「実験・実習で習得する技能」、「実験・実習で習得する段取り(仕事の見通しを付けること)」とする回答が工業化学科の卒業生で高い結果を示している。このように、工業高校生を対象とした先行研究では、マクロデータに基づく知見、事例検討に基づく知見が得られている。

しかし、これらはいずれも工業高校の教育課程に対する学習者の評価という観点から行われたものであり、学習経験の有効性が示されている一方、前述した生徒の職業に対する自己効力感という観点からは十分に検討されているとは言えないのが現状である。

#### 4. 研究課題の整理

以上の先行研究の整理から、本研究では工業高校生の職業に対する自己効力感を「工業高校生が将来の自己の職業生活を適切に営めそうであると感じる遂行可能性の認知」と捉え、工業高校における生徒の自己実現に向けて、将来の職業に対する自信や展望を適切に持たせることの重要性を指摘した。また、そのために工業高校における進路指導では、生徒のキャリア発達を適切に支援する上で、キャリアの持つ時間的連続性の視点を重視することが重要であることを指摘した。

しかし、このような観点から工業高校生の職業に対する自己効力感について検討した先行研究は十分でなかった。したがって、本研究の目的である工業高校生の職業に対する自己効力感の実態とその形成要因、影響を把握するためには、少なくとも次の3つの問題が挙げられる。

##### 4.1 工業高校生の職業に対する自己効力感の構造的な把握(研究課題1)

第一に、工業高校における教育活動の実態を踏まえつつ、将来の職業に対する自己効力感を把握しうる適切な測定尺度が存在しないことである。これまで進路選択に関連する自己効力感を把握する測定尺度については、例えば、前述した浦上による大学生・短大生向けの「進路に対する自己効力尺度」、富永による高校生向けの「進路選択自己効力尺度」など、それぞれ作成している。前述した阿濱・東の研究<sup>103)</sup>では、浦上の作成した尺度が自己効力測定に使用されている。しかし、廣瀬(1998)<sup>99)</sup>は「自己効力が特定の場面・状況ごとに特定の行動に影響を与えるものである」との考え方から、個々の研究ごとに目的に合わせた尺度を構成する必要があると述べている。また、浦上や富永の作成した尺度は、進路を選択・決定するにあたって必要な行動に対する自己効力である「進路選択自己効力」を構成概念としているため、本研究で取り上げる工業高校生の将来の職業に対する自己効力感を把握するには適していないと考えられる。したがって本研究では、工業高校生の職業に対する自己効力感を適切に把握しうる測定尺度を構成する必要がある。

また、進路指導上の妥当性を検討するために、企業が新規入職者に求める基礎的・汎用的能力及び社会人基礎力の形成期待との関連性を検討する必要がある。これが第一の研究課題である。

### 4.2 工業高校生の職業に対する自己効力感の形成要因に関する検討（研究課題2）

第二に、工業高校生の職業に対する自己効力感の形成要因を明らかにする必要性である。前述したように、自己効力感に関する先行研究から、自己効力感の形成要因としてこれまで、特定の産業分野に関連する専門性の学習経験を取りあげることができる。工業高校では、教育課程の専門性が産業との繋がりを背景に持つことから、職業に対する自己効力感をキャリア形成の視点から捉えなおす必要があることである。前述したように、工業高校の卒業に向けては、生徒に自己のこれからの人生や生き方についてある程度、成熟した考え方を持たせ、将来の職業生活に向けた心構えを持たせることが重要である。また、浦上が述べるように、キャリア成熟と進路選択に対する自己効力感との関連性を指摘していることから、本研究で取り上げる工業高校生の職業に対する自己効力感についても、キャリア成熟との間に一定の関連性を想定することができるものと考えられる。

したがって、本研究では特に、生徒の専門性の形成とキャリアに対する意識及び先述したSuper(1963)<sup>33)</sup>や浦上(1996)<sup>36)</sup>の考えを関連付け、工業高校で形成された自己概念が、将来の職業に対する自己効力感にどのような影響を及ぼしうるかについて検討することが重要な課題となる。また、進路実現に直面する3学年時の進路指導が生徒の職業に対する自己効力感にどのような影響を及ぼしうるのかを知る必要が考えられる。これが第二の研究課題である。

### 4.3 工業高校生の職業に対する自己効力感が進路指導に果たす役割（研究課題3）

第三に、工業高校の生徒が将来の職業に対する自己効力感を形成した場合、それが現在の学校生活に対する積極性や前向きさにどの程度、フィード・バックされうるかという点である。一般に、将来への肯定的な展望は、その逆算によって現在の自分の生活状況に一定の積極性や前向きさを与えるものであることは、前述した時間的展望体験という概念で説明することができる。生徒の進路に対する自己効力感を検討する教育的意義は、このような現在の行動や生活を将来展望のもとに適切に調整できるように支援することにある。しかし、前述した白井らの先行研究は、大学生や普通科高校生を対象としたものが中心であり、工業高校の生徒を対象とした検討は十分には行われていない。また、工業高校生を対象に進路不決断と将来の職業に対する自己効力感との関連性について検討した研究は、これまでのところ知る限り行われていないのが現状である。

このような現状に対する今後の進路指導の改善に資するために、本研究では、工業高校の生活の中で形成されうる生徒の職業に対する自己効力感が、就職を目前に控える工業高校3学年にどのような役割を果たすものなのか、その上で進路指導のプロセスにおいて、どの程度の進路不決断の様相を呈し、それがどの時期に解消されていくのかを把握することは、今後の工業高校における進路指導のあり方を検討する上で、基礎的な資料になると考えられる。

さらに、具体的な進路指導の中でのアクション・リサーチを実施すると共に、工業高校在籍時の職業に対する自己効力感が卒業・就職後にどのような影響要因によって変容していくものなのか、専門分野の関連業種就職者及び非関連業種就職者の群別に考察する。なお、本研究では、半構造化面接による質的な事例検討とともに、群の傾向を捉えるために、在籍時（高校3学年の3月）に第2章で構成された「職業に対する自己効力感尺度」を用いた調査に参加させることにする。その上で、前述した先行研究における長谷川・佐藤(2002)<sup>108)</sup>の検討により、就職後に自らの学習経験を有用と捉えやすい工業化学科の生徒を対象に、職業に対する自己効力感の卒業後の変容という観点から検討することとする。その際、卒業後の半構造化面接を実施し、インタビューに先立って同様の尺度項目に回答させ、回答の比較を行うこととする。その上で、社会変化と共に企業に求められている働き方も変化してきていると考えられるため、工業高校生の持つ将来の職業に対する自己効力感が、社会や企業が求める人材像と合致するものかどうかを検討することとする。これが第三の研究課題である。

## 5. 研究のアプローチと論文の構成

### 5.1 研究のアプローチ

以上のように第1章では本研究の目的を明確にし、工業高校の目的と役割及び自己効力感に関する研究、工業高校生の意識に関する先行研究等を概観し、3つの研究課題を抽出した。これらの研究課題に即して、本研究では第2章以降を次のように構成する（図I-1）。

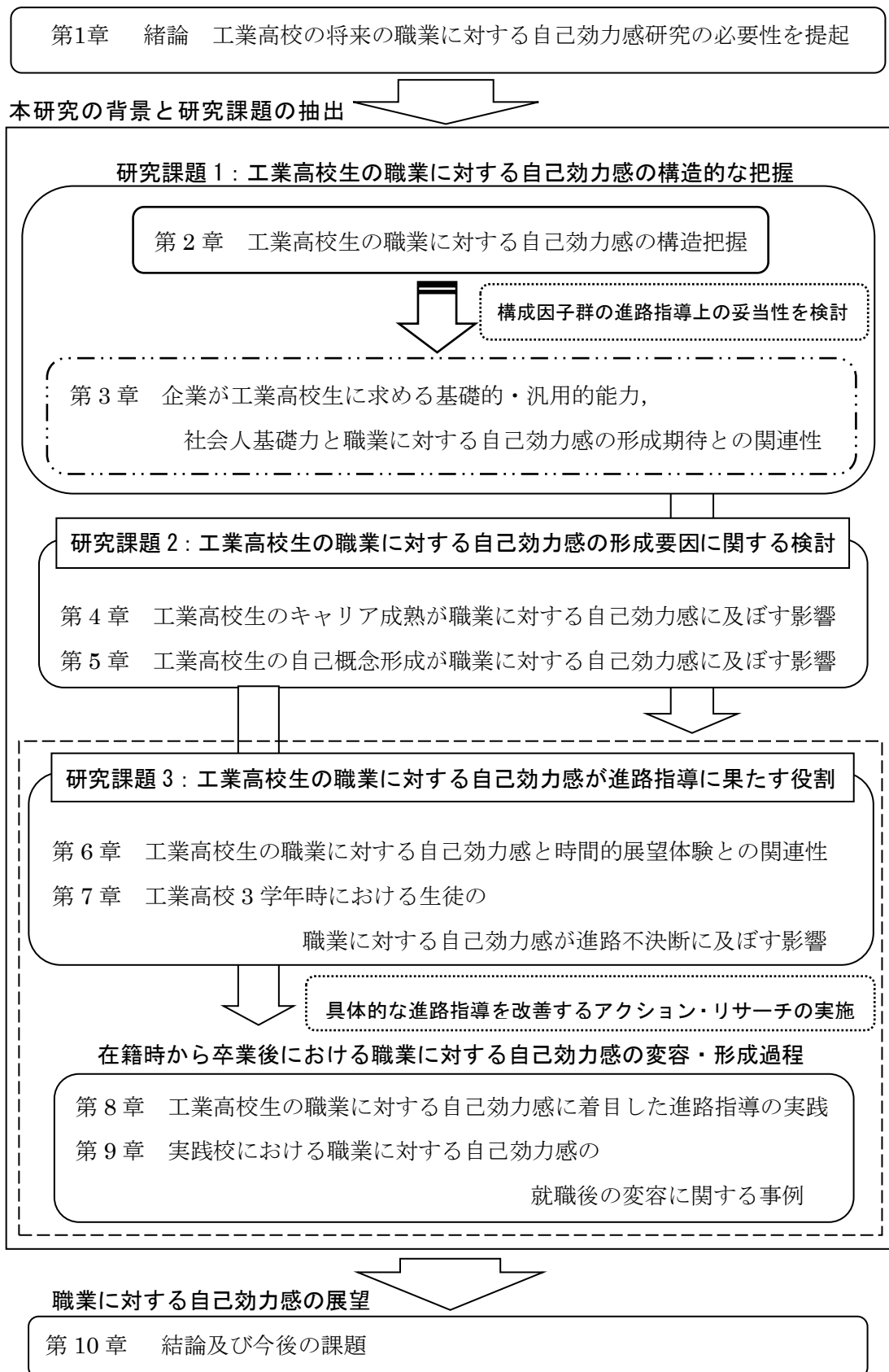


図 I-1 本研究の構造

## 5.2 論文の構成

まず、研究課題1に対しては、第2章において先行研究で用いられている尺度を参考にしつつ、工業高校生を対象に、将来の職業生活に対する自己効力感の実態を把握し、測定尺度の構成を試みる。具体的には、工業高校の生徒を対象に自由記述調査を行った後、得られたコメントから予備尺度を構成し、因子分析を用いて職業に対する自己効力感の構成因子を抽出することにする。しかし、工業高校生の持つ職業に対する自己効力感が、企業の求める人材像と合致しなければ、学習指導や進路指導の成果を社会的活動に適切に結び付けることができない。そのため、第3章において第2章で抽出した因子の進路指導上の妥当性を検討するために、企業が新規入職者に求める基礎的・汎用的能力、社会人基礎力の形成期待との関連性を検討することとする。

次に、研究課題2に対しては、第4～5章において第2章で抽出した因子の形成要因を探索的に検討する。第4章では、先行研究により、キャリア成熟と自己効力感との関連性が指摘されていることから、工業高校生の職業に対する自己効力感についても、キャリア成熟との間に一定の関連性を想定することができる。本研究では、坂柳(1999)<sup>38)</sup>の作成したキャリア成熟尺度（「キャリア関心性」因子、「キャリア自律性」因子、「キャリア計画性」因子）を用いることにした。これは、この尺度が、目前の進路選択課題のように短期的な視野でのキャリア形成を扱ったものではなく、Super(1984)<sup>37)</sup>の考え方に基づいてライフ・ステージの一連の職業的成熟の程度を測定することができるためである。第5章では、工業高校における生徒の形成される自己概念と職業に対する自己効力感との関連性について検討する。島田・森山(2013)<sup>102)</sup>の作成した工業高校生の自己概念尺度（「自律志向性」因子、「キャリア志向性」因子、「専門的能力志向性」因子、「社会的価値志向性」因子、「自己モニタ志向性」因子）を用いる。これは、工業高校において自己が学ぶ専門性の延長として見える将来像と、日々の学校生活のなかにある現実の自己像との狭間で、Super(1963)<sup>33)</sup>の考え方に基づいた職業に対する興味・関心・考え方や職業選択などを通じて、職業的自己概念が形成されることを考えてのことである。また、先述した浦上(1996)<sup>36)</sup>の内容から、進路選択過程に対する自己効力感が高ければ、進路探索意図や進路探索行動を促進する意識と自己概念との間には密接な関連性があると考えられるからである。このことから、工業高校において形成される自己概念と職業に対する自己効力感の間には、関連性のあることと予測できる。

研究課題3に対しては、第6章から第7章において、過去・現在・未来という時間的な連続性の中で、将来展望の形成との関わりに着目した。具体的には、第6章では、白井(1994)<sup>59)</sup>の作成した時間的展望体験尺度（「目標指向性」因子、「希望」因子、「現在の充実感」因子、「過去受容」因子）を用い、職業に対する自己効力の高まりが、どのような形で現在の学習行動の生起に影響しうるかを学年間の推移傾向として捉えることを試みる。白井の尺度を用いるのは、本尺度が前述したように多くの先行研究で利用されているため、調査結果に妥当性が期待できるためである。



第7章では、進路指導のプロセスにおいて、どの程度の進路不決断の様相を呈し、どのように解消されていくかに着目した。清水(1990)<sup>42)</sup>の作成した進路不決断尺度(「職業決定不安」因子、「職業選択葛藤」因子、「職業相談希求」因子、「職業障害不安」因子、「職業外的統制」因子、「職業情報不足」因子、「職業モラトリアム」因子、「職業準備不安」因子)を用い、進路不決断に及ぼす影響をそれぞれ縦断的に検討する。清水の尺度を用いるのは、本尺度が前述したように、若年労働者への適用においても利用可能であることが検証されており、将来の職業に係る特定の産業分野への就職を中心とする工業高校生への適用も可能であると考えられるためである。

次に、これまでの知見を踏まえ、第8、9章では、工業高校の具体的な進路指導の中でのアクション・リサーチを実施する。工業高校の最終学年である3学年時には、1・2学年時の進路指導を基礎としつつ、より具体的に個々の生徒の進路実現を図るため、進路指導が強化され実施されている。第8章では、このような進路実現に直面する3学年時の進路指導が生徒の職業に対する自己効力感にどのような影響を及ぼしうるのかを試みる。第9章では、上記の各章で得られた知見を踏まえ、在籍時に形成された職業に対する自己効力感が高校を卒業・就職した後に、どのように変容しているかについて追跡調査の実施を試みる。最後に、第10章では、各章で得られた知見を整理し、今後の工業高校における教育的支援のあり方を考察すると共に、今後の研究課題について展望する。

これら各研究課題間の関連性と本研究の構成に基づき、本研究では、以上のアプローチに基づき、以下に研究内容を構想した。

### 第2章「工業高校生の職業に対する自己効力感の構造把握」

第2章では、工業高校における生徒の職業に対する自己効力感を把握するための尺度を構成し、その実態を明らかにすることを目的とする。具体的には、工業高校生を対象に、職業に対する自己効力感に関する自由記述調査によって予備尺度を作成する。次に予備尺度を用いた調査を実施し、因子分析を行う。その上で、学校生活や授業、進路に対する意識と得られた因子構造との関連性を検討する。

### 第3章「企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力、社会人基礎力と職業に対する自己効力感の形成期待との関連性」

第3章では、工業高校生にその形成を期待する職業に対する自己効力感と基礎的・汎用的能力、社会人基礎力の関連性について検討することを目的とする。具体的には、工業高校に求人を提供する企業の人事担当者を対象に、第2章で把握された工業高校生の職業に対する自己効力感とこれからの企業が求める基礎的・汎用的能力、社会人基礎力との関連性の調査を実施する。

### 第4章「工業高校生のキャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響」

第4章では、工業高校生における生徒のキャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、坂柳(1999)<sup>38)</sup>によるキャリア成熟尺度における「キャリア関心性」因子、「キャリア自律性」因子、「キャリア計画性」因子の各因子がそれぞれ、第2章で把握された自己効力感の構成因子に及ぼす影響力を、全体及び学年別に検討する。

### 第5章「工業高校生の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響」

第5章では、工業高校3学年を対象に、生徒の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、島田・森山(2013)<sup>102)</sup>による工業高校生の自己概念尺度における「自律志向性」因子、「キャリア志向性」因子、「専門的能力志向性」因子、「社会的価値志向性」因子、「自己モニタ志向性」因子の各因子がそれぞれ、第2章で把握された自己効力感の構成因子に及ぼす影響力について検討する。

### 第6章「工業高校生の職業に対する自己効力感と時間的展望体験との関連性」

第6章では、工業高校生の職業に対する自己効力感と時間的展望体験との関連性を明らかにすることを目的とする。具体的には、第2章で把握された自己効力感の構成因子が、白井(1994)<sup>59)</sup>の作成した時間的展望体験尺度における「目標指向性」因子、「希望」因子、「現在の充実感」因子、「過去受容」因子の各因子に及ぼす影響力を、全体及び学年別に検討する。

### 第7章「工業高校3学年時における生徒の職業に対する自己効力感が進路不決断に及ぼす影響」

第7章では、工業高校の3学年を対象に、進路指導のプロセスにおける生徒の職業に対する自己効力感(将来の職業生活に対する遂行可能感)と進路不決断(進路選択意志決定能力が不足している状態)との関連性を縦断的に検討することを目的とする。具体的には、第2章で把握された自己効力感の構成因子が、清水(1990)<sup>42)</sup>の作成した進路不決断尺度における「職業決定不安」因子、「職業選択葛藤」因子、「職業相談希求」因子、「職業障害不安」因子、「職業外的統制」因子、「職業情報不足」因子、「職業モラトリアム」因子、「職業準備不安」因子の各因子に及ぼす影響力について検討する。

### 第8章「工業高校生の職業に対する自己効力感に着目した進路指導の実践」

第8章では、工業高校の3学年時に実施される進路指導が生徒の職業に対する自己効力感の変容に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、3学年時に実施される具体的な進路指導が第2章で把握された、生徒の職業に対する自己効力感の構成因子に及ぼす影響につい

## 第 1 章 緒論

て縦断的に 3 学年時の進路指導の取り組み時期による、(啓発期) 4～5 月、(探索期) 6～7 月、(受験期) 9～10 月、(追指導期) 11 月以降に実施し検討する。

### 第 9 章「実践校における職業に対する自己効力感の就職後の変容に関する事例検討」

第 9 章では、工業高校生の在籍時における職業に対する自己効力感の就職後の変容について事例検討することを目的とする。具体的には、卒業目前となる 3 月から就職後 5 ヶ月以上経過した 8 月から 10 月に個別面談による半構造化面接及び第 2 章で把握された、工業高校生の職業に対する自己効力感尺度の調査を実施する。

### 第 10 章「結論及び今後の課題」

第 10 章では、各章で得られた知見を整理すると共に、生徒の職業に対する自己効力感形成の観点から、教育実践に与える示唆を考察すると共に、今後の課題を検討する。

## 第2章 工業高校生の職業に対する自己効力感の構造把握

### 1. 目的

本章の目的は、第1章で述べた研究課題1に対処するため、工業高校における生徒の職業に対する自己効力感を把握するための尺度を構成し、その実態を明らかにすることである。具体的には、工業高校生を対象に、①職業に対する自己効力感に関する自由記述調査(以下、予備調査とする)によって予備尺度を作成した後、②予備尺度を用いた調査(以下、本調査とする)を実施し、因子分析を行うこととした。その上で、③学校生活や授業、進路に対する意識と得られた因子構造との関連性についても検討を行うこととする。

### 2. 研究の方法

#### 2.1 予備調査

予備調査では、工業高校生の将来の仕事や職業に対する考え方を探索的に把握し、本調査で用いる予備尺度項目を作成した。

##### (1) 対象

調査は、H県内及びO市内の公立工業高校計3校の3学年、男子618名、女子24名、計642名(学科:機械系、電気系、化学系)を対象とした。有効回答数は573名(男子553名、女子20名)、有効回答率89.3%であった。

##### (2) 質問項目

自由記述形式で「あなたが、これまでに工業高校で学んだことのうち、将来の自分の仕事や職業をやっていく自信が持てたと感じた経験には、どんなものがありますか。」について、回答させた。

##### (3) 実施時期

2008年6月に実施した。

##### (4) 手続き

調査は、各高校のホームルーム(終礼)の時間を利用し、約15～20分程度で実施した。実施後、得られた回答を29項目に分類・整理し、予備尺度を作成した。この作業は、教職経験10年以上の工業科の教員4名で協議して行った。協議では、例えば「授業で専門的な資格を取ることができたから、自信がついた。」などの自由記述から、「専門的」、「資格取得」をキーワードに「専門分野の資格が取得できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。」という項目を作成した。同様に、「専門的な知識を幅広く修得できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。」、「周りの人とのコミュニケーション力や礼儀が身につい

たので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。」など計29項目を作成した(図Ⅱ-1)。

## 2.2. 本調査

本調査では、予備調査で作成した予備尺度を用いて、工業高校生の職業に対する自己効力感の実態を分析した。また、職業に対する自己効力感と授業に対する意識、学校生活に対する意識及び進路に対する意識との関連性をそれぞれ検討した。

### (1) 対象

調査は、O市内の公立工業高校4校の1～3学年、男子825名、女子21名、計846名(学科:機械系246名、電気系297名、化学系303名)を対象とした。有効回答数は725名(男子704名、女子21名)、有効回答率85.7%であった。

### (2) 質問項目

調査票には、①予備調査で作成した予備尺度29項目、②授業に対する意識2項目、③学校生活に対する意識3項目及び④進路に対する意識3項目を準備した(図Ⅱ-1)。

授業に対する意識では、「あなたは、工業の専門科目の授業が好きですか。」、「あなたは、工業の専門科目の授業が理解できますか。」の2項目を設定した。学校生活に対する意識では、「あなたは、現在の学校生活に満足していますか。」、「あなたの、部活動や生徒会などの課外活動は充実していますか。」、「あなたの、学校での友人関係は良好ですか。」の3項目を設定した。進路に対する意識では、「あなたは将来、工業高校の専門分野に関係する仕事に就きたいと思えますか。」、「あなたは将来、自分がつきたい職業や仕事をすでに決めていますか。」、「あなたは、高校卒業後の進路の実現に向けて、自分なりに努力していますか。」の3項目を設定した。

### (3) 実施時期

2008年9～10月に実施した。

### (4) 手続き

調査は、各高校のホームルーム(終礼)の時間を利用し約15～20分程度で、予備尺度29項目に対しては当てはまりの程度を5件法(5:とても思う, 4:少し思う, 3:どちらでもない, 2:あまり思わない, 1:まったく思わない)で回答させた。また、授業、学校生活、進路に対する意識計8項目に対しては、当てはまりの程度を4件法(4:とても思う, 3:少し思う, 2:あまり思わない, 1:まったく思わない)で回答させた。調査後、まず予備尺度のGP分析(上・下位群共に25%,  $n=180$ )を行い、項目の弁別性を確認した。次に弁別性の認められた項目に対して、主因子法及びプロマックス回転を用いた因子分析を行った。その後、各因子に該当する質問項目の因子負荷量に基づいて質問項目を再編成し、学年間での各因子の推移傾向や授業、学校生活、進路に対する意識との関連性を検討した。

## 第2章 工業高校生の職業に対する自己効力感の構造把握

### 工業高校生の職業に対する意識に関するアンケート

( ) 工業高校 ( ) 科 ( ) 年 男・女

このアンケートは、工業高校に学ぶ生徒の皆さんの「働くこと」に対する意識を調査するものです。  
次の質問にどのくらいあてはまるかを○をつけてください。このアンケートは、学校の成績とはまったく関係ありません。  
思ったとおりに回答してください。

1 次の質問に下の4段階であてはまるものに○をつけてください。

4. とても思う 3. 少し思う 2. あまり思わない 1. まったく思わない

- |                                       |         |
|---------------------------------------|---------|
| A あなたは、現在の学校生活に満足していますか。              | 4-3-2-1 |
| B あなたは、工業の専門科目の授業が好きですか。              | 4-3-2-1 |
| C あなたは、工業の専門科目の授業が理解できますか。            | 4-3-2-1 |
| D あなたの、部活動や生徒会などの課外活動は充実していますか。       | 4-3-2-1 |
| E あなたの、学校での友人関係は良好ですか。                | 4-3-2-1 |
| F あなたは将来、工業高校の専門分野に関係する仕事につきたいと思いますか。 | 4-3-2-1 |
| G あなたは将来、自分がつきたい職業や仕事をすでに決めていますか。     | 4-3-2-1 |
| H あなたは、高校卒業後の進路の実現に向けて、自分なりに努力していますか。 | 4-3-2-1 |

2 次の質問にどのくらいあてはまるか○をつけてください。

5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらでもない 2. あまり思わない 1. まったく思わない

- |  |           |
|--|-----------|
| 1 専門的な知識を幅広く修得できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。               | 5-4-3-2-1 |
| 2 専門的な技能を深められたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。                  | 5-4-3-2-1 |
| 3 専門分野に関する実験や実習の経験ができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。          | 5-4-3-2-1 |
| 4 専門分野に興味・関心が持てたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。                | 5-4-3-2-1 |
| 5 専門分野の資格が取得できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。                 | 5-4-3-2-1 |
| 6 周りの人とのコミュニケーション力や礼儀が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。     | 5-4-3-2-1 |
| 7 何事にも、忍耐力が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。                | 5-4-3-2-1 |
| 8 実習で工作する力を身につけることができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。          | 5-4-3-2-1 |
| 9 部活動で精神力を養えたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。                   | 5-4-3-2-1 |
| 10 授業や実習で、学び方を学ぶことができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。          | 5-4-3-2-1 |
| 11 プロのすばらしさを知り、目標をもつことができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。      | 5-4-3-2-1 |
| 12 職場体験・見学などで現場の様子を知ることができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。     | 5-4-3-2-1 |
| 13 ものづくりを通して、達成感のすばらしさを知ったので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。      | 5-4-3-2-1 |
| 14 何事にも、論理的に考える力が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。          | 5-4-3-2-1 |
| 15 仕事の楽しさや喜び、誇りが持てるようになったので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。       | 5-4-3-2-1 |
| 16 何事にも、計画的にすすめる力が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。         | 5-4-3-2-1 |
| 17 実習で危険な作業でも安全にやりとげることが身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。   | 5-4-3-2-1 |
| 18 アルバイトを経験して働くことのイメージがもてたので、将来の職業や仕事の自信が持てるようになった。      | 5-4-3-2-1 |
| 19 周りの人と協力して作業する協調性が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。       | 5-4-3-2-1 |
| 20 何事にも、目標を持ち努力する大切さがわかったので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。       | 5-4-3-2-1 |
| 21 友達から信頼されていると感じられるようになったので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。      | 5-4-3-2-1 |
| 22 実習で設計する力を身につけることができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。         | 5-4-3-2-1 |
| 23 何事にも、失敗する経験が逆に自分を成長させると実感できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。 | 5-4-3-2-1 |
| 24 自分のものづくりの技術が向上したと実感できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。       | 5-4-3-2-1 |
| 25 何事にも、整理・整頓する習慣がついたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。           | 5-4-3-2-1 |
| 26 何事にも、アイデアを発想する力が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。        | 5-4-3-2-1 |
| 27 何事に取り組む時も、集中力が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。          | 5-4-3-2-1 |
| 28 何事に取り組む時も、規律正しい行動が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。      | 5-4-3-2-1 |
| 29 授業や実習で、学んだことがすぐに仕事に使えると感じたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。   | 5-4-3-2-1 |

図Ⅱ-1 工業高校生の職業に対する自己効力感を把握するための予備尺度

### 3. 結果及び考察

#### 3.1 調査対象者の状況

まず、調査対象者の状況を把握するために、授業、学校生活、進路に対する意識の学年別平均値を求めた(表Ⅱ-1)。各項目の平均値の学年間の差異について1元配置分散分析を行った結果、授業に対する意識では学年の主効果が有意であった( $F_{(2,722)}=4.43, p<0.05$ )。LSD法による多重比較の結果、平均値が3学年>1学年 $\approx$ 2学年となった。また、進路に対する意識では学年の主効果が有意であった( $F_{(2,722)}=14.43, p<0.01$ )。LSD法による多重比較の結果、平均値に3学年>1学年>2学年の順序性が認められた。しかし、学校生活に対する意識では学年の主効果は有意ではなかった( $F_{(2,722)}=2.24, n.s.$ )。これらのことから、本調査対象者では、3学年で授業や進路に対する意識が高くなる傾向が見られた。しかし、進路に対する意識では2学年で中弛みの傾向が見られた。このような実態を持つ生徒の反応として以下の分析を進めた。

表Ⅱ-1 授業・学校・進路に対する意識の実態

		1学年 ( <i>n</i> =268)	2学年 ( <i>n</i> =247)	3学年 ( <i>n</i> =210)	学科間の差の検定
授業に対する意識	平均	2.52	2.48	2.69	$F_{(2,722)}=4.34$ * 3学年>1学年 $\approx$ 2学年
	<i>S. D.</i>	0.92	0.85	0.93	
学校生活に対する意識	平均	2.37	2.71	2.86	$F_{(2,722)}=2.24$ <i>n. s.</i>
	<i>S. D.</i>	0.95	1.00	0.92	
進路に対する意識	平均	2.69	2.49	2.87	$F_{(2,722)}=14.34$ ** 3学年>1学年>2学年
	<i>S. D.</i>	1.04	1.05	1.02	

\*\*:  $p<0.01$  \*:  $p<0.05$

#### 3.2 職業に対する自己効力感の因子構造

予備尺度に対するGP分析の結果、1項目を除いて尺度の弁別性が確認された。そこで弁別性の認められた28項目を対象に因子分析を行った。固有値1.0を基準に因子数を決定しプロマックス回転を実施したところ、最終解として2因子が抽出された(表Ⅱ-2)。

第1因子には、「何事に取り組む時も、集中力が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。」「何事にも、整理・整頓する習慣がついたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。」などの項目が含まれていた。これらの項目は、どのような職業に就いたとしても、その職務や職場などの社会的環境に適応するために必要とされる基礎的な資質を形成したことによってもたらされる効力感であると解釈できる。そこで第1因子を「適応資質効力感」因子と命名した。

第2因子は、「専門的な技能を深められたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。」「専門的な知識を幅広く修得できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。」「専門分野に関する実験や実習の経験ができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。」などの項目が含まれていた。これらの項目は、特定の産業分野に関連する領域

## 第2章 工業高校生の職業に対する自己効力感の構造把握

固有性の高い専門的な知識や技能・資格などを修得したことによってもたらされる効力感であると解釈できる。そこで第2因子を「専門性効力感」因子と命名した。

これらのことから、工業高校生の職業に対する自己効力感は、社会的環境に適応するために必要とされる基礎的な資質を形成したことによってもたらされる効力感と専門的な知識や技能・資格などを修得したことによってもたらされる効力感から構成されていることが明らかとなった。これらの因子の解釈に含まれている基礎的な資質の育成や専門的な知識や技能・資格などの修得は、1998年に理科教育及び産業教育審議会が発表した答申「今後の専門高校における教育の在り方等について」<sup>109)</sup>において指摘されている方向性とよく合致していることから、抽出された2つの因子に内容的妥当性のあることが確認された。

表Ⅱ-2 工業高校生の職業に対する自己効力感の因子分析

項目	F1	F2	共通性
27 何事に取り組む時も、集中力が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.733	0.011	0.547
25 何事にも、整理・整頓する習慣がついたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.714	-0.085	0.438
28 何事に取り組む時も、規律正しい行動が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.701	0.021	0.510
19 周りの人と協力して作業する協調性が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.671	-0.027	0.428
26 何事にも、アイデアを発想する力が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.618	-0.041	0.351
20 何事にも、目標を持ち努力する大切さがわかったので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.613	0.063	0.430
23 何事にも、失敗する経験が向上したと実感できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.570	0.107	0.416
21 友達から信頼されていると感じられるようになったので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.530	0.111	0.370
29 実習で設計する力を身につけることができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.481	0.223	0.457
22 授業や実習で、学んだことがすぐに仕事に使えると感じたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.476	0.262	0.420
16 何事にも、計画的にすすめる力が持てるようになったので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.455	0.381	0.577
15 仕事の楽しさや喜び、誇りが持てるようになったので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.438	0.380	0.553
24 自分のものづくりの技術が向上したと実感できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.421	0.331	0.468
2 専門的な技能を深められたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	-0.083	0.898	0.716
1 専門的な知識を幅広く修得できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	-0.075	0.875	0.685
3 専門分野に関する実験や実習の経験ができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	-0.050	0.812	0.610
4 専門分野に興味・関心が持てたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.001	0.737	0.544
5 専門分野の資格が取得できたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	-0.041	0.658	0.400
8 実習で工作する力が身につけることができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.203	0.559	0.501
10 授業や実習で、学び方を学ぶことができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.318	0.460	0.503
17 実習で危険な作業でも安全にやりとげることが身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.388	0.425	0.545
13 ものづくりを通して、達成感のすばらしさを知ったと思う	0.355	0.421	0.497
7 何事にも、忍耐力が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.253	0.419	0.378
11 プロのすばらしさを知り、目標をもつことができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.368	0.394	0.479
14 何事にも、論理的に考える力が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.399	0.390	0.513
12 職場体験・見学などで現場の様子を知ることができたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.239	0.363	0.357
6 周りの人とコミュニケーション力や礼儀が身についたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.336	0.355	0.394
9 部活動で精神力を養えたので、将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。	0.272	0.219	0.199

主因子法及びプロマックス回転  
因子間相関  $r=0.643$

### 3.3 職業に対する自己効力感尺度の再編と妥当性の検討

各因子に該当する質問項目の因子負荷量の絶対値の高い項目を選択し、予備尺度を再編した。その際、①因子負荷量の高い項目を選択できること、②項目数が適切に減少させられることの2点に留意し、便宜的に因子負荷量の絶対値0.6以上を基準として項目を選択した。その結果、「適応資質効力感」因子は13項目から6項目（採用した項目：No.19,20,25,26,27,28）に、「専



「門性効力感」因子は10項目から5項目（採用した項目：No.1,2,3,4,5）に、尺度全体では2因子計11項目に再編された（図Ⅱ-2）。各因子の再編前後間の相関係数、並びに $\alpha$ 係数を求めたところ、いずれも0.9以上の高い相関が得られ、再編後の内的整合性も妥当なものであった（表Ⅱ-3）。以下、再編後の2因子計11項目を「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」と呼ぶことにする。再編した尺度の妥当性を確認するために、因子別平均値の学年別推移傾向及び進路に対する意識との関連性を検討した。

工業高校生の職業に対する意識に関するアンケート	
( )工業高校 ( )科 ( )年 男・女	
このアンケートは、工業高校で学ぶ生徒の皆さんに「働くこと」に対する意識を調査するものです。次の質問にどのくらいはてはまるか○をつけてください。このアンケートは、学校の成績とはまったく関係ありません。思った通りに回答してください。	
5. とても思う 4. 少し思う 3. どちらともいえない 2. あまり思わない 1. まったく思わない	
1. 何事にも取り組む時も、集中力が身についたので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.
2. 周りの人と協力して作業する協調性を身についたので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.
3. 専門的な知識を幅広く修得できたので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.
4. 何事にも、アイデアを発想する力が身についたので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.
5. 専門分野に関する実験や実習の経験できたので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.
6. 何事にも、整理・する習慣がついたので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.
7. 専門的な技能を深められたので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.
8. 何事に取り組む時も、規律正しい行動を身につけてきたので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.
9. 専門分野に興味・関心が持てたので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.
10. 何事にも、目標を持ち努力する大切さがわかったので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.
11. 専門分野の資格が取得できたので、将来の職業や仕事に自信がもてるようになった。	5. 4. 3. 2. 1.

図Ⅱ-2 再編された工業高校生の職業に対する自己効力感尺度

まず、因子別平均値の学年別推移傾向では、進路を選択し決定する学年である3学年において職業に対する自己効力感が高まることが予測される。そこで、因子別に学年間の平均値に対する1元配置分散分析を行った(表Ⅱ-4)。その結果、両因子共に、学年の主効果が有意であった(「適応資質効力感」因子: ( $F_{(2,722)}=13.66, p<0.01$ ), 「専門性効力感」因子: ( $F_{(2,722)}=6.78, p<0.01$ )。LSD法を用いた多重比較の結果、予測した通り、両因子共に平均値が3学年>1学年 $\approx$ 2学年となった。

次に、進路に対する意識と職業に対する自己効力感の関連性について検討した。Taylor, K.M. & Betz, N.E.<sup>49)</sup>が指摘する通り、自己効力の強い者ほど進路意識も高いと考えられる。そこで、進路に対する意識の平均値2.50以上の生徒を上位群( $n=410$ )、2.50未満の生徒を下位群( $n=315$ )として、自己効力感2因子の平均値を比較した(表Ⅱ-5)。その結果、「適応資質効力感」因子( $t_{(713)}_{welch}=9.08, p<0.01$ ), 「専門性効力感」因子( $t_{(723)}=11.70, p<0.01$ )共に、予測通り上位群の水準が下位群に比べて有意に高くなった。

このように、各因子と学年別推移傾向との関連性、各因子と進路に対する意識との関連性において、いずれもほぼ予測した通りの結果が得られたことから、本尺度の構成概念妥当性が確認された。

表Ⅱ-3 再編前後での $\alpha$ 係数及び再編前後間の相関係数

再編前後での相関係数			再編前	再編後
「適応資質効力感」因子	$r=0.933$	「適応資質効力感」因子	$\alpha=0.910$	$\alpha=0.830$
「専門性効力感」因子	$r=0.943$	「専門性効力感」因子	$\alpha=0.910$	$\alpha=0.874$

表Ⅱ-4 職業に対する自己効力感の学年別平均

		1学年 ( $n=268$ )	2学年 ( $n=247$ )	3学年 ( $n=210$ )	学年間の差の検定
「適応資質効力感」因子	平均	3.20	3.20	3.52	$F_{(2,722)}=13.66$ ** 3学年>1学年 $\approx$ 2学年
	S.D.	0.75	0.73	0.78	
「専門性効力感」因子	平均	3.32	3.31	3.58	$F_{(2,722)}=6.78$ ** 3学年>1学年 $\approx$ 2学年
	S.D.	0.86	0.85	0.91	

\*\* :  $p<0.01$

表Ⅱ-5 進路に対する意識と職業に対する自己効力感との関連性

		進路に対する意識		群間の差の検定
		上位群( $n=410$ )	下位群( $n=315$ )	
「適応資質効力感」因子	平均	3.50	3.02	$t_{(713)}_{welch}=9.08$ **
	S.D.	0.77	0.66	
「専門性効力感」因子	平均	3.70	2.99	$t_{(723)}=11.70$ **
	S.D.	0.81	0.80	

\*\* :  $p<0.01$

## 3.4 授業及び学校生活に対する意識と自己効力感との関連性

授業に対する意識及び学校生活に対する意識と職業に対する自己効力感との関連性について「適応資質効力感」因子及び「専門性効力感」因子を基準変数，授業に対する意識と学校生活に対する意識を説明変数として重回帰分析を行った。

その結果，いずれの重回帰分析においても有意な重相関係数  $R=0.40\sim0.71$  が得られた（表Ⅱ-6，表Ⅱ-7）。そこで標準偏回帰係数に着目すると，「適応資質効力感」因子に対しては授業及び学校生活に対する意識の影響力が，学年の進行に伴って強くなる傾向を示した。一方，「専門性効力感」因子に対しては，逆にこれらの影響力が学年の進行に伴って弱くなる傾向を示した。

このことから，工業高校においては，生徒が授業や学校生活の中で様々な経験を経ることによって，「専門性効力感」因子よりも「適応資質効力感」因子の方が高まりやすくなることが示唆された。しかし，その一方で，「専門性効力感」因子の平均値が1・2学年よりも3学年の方が高いという前述の結果から，「専門性効力感」因子には授業や学校生活以外の形成要因が存在している可能性があると考えられる。

表Ⅱ-6 授業及び学校生活に対する意識が「適応資質効力感」因子に及ぼす影響

「適応資質効力感」因子	標準偏回帰係数		重相関係数	分散分析
	授業に対する意識	学校生活に対する意識		
1学年（ $n=268$ ）	0.15 *	0.42 **	$R=0.51$	$F_{(2,265)}=46.50$ **
2学年（ $n=247$ ）	0.21 **	0.45 **	$R=0.40$	$F_{(2,244)}=24.03$ **
3学年（ $n=210$ ）	0.31 **	0.61 **	$R=0.46$	$F_{(2,207)}=27.95$ **
全体（ $N=725$ ）	0.23 **	0.31 **	$R=0.46$	$F_{(2,722)}=95.27$ **

\*:  $p<0.05$  \*\*:  $p<0.01$ 

表Ⅱ-7 授業及び学校生活に対する意識が「専門性効力感」因子に及ぼす影響

「専門性効力感」因子	標準偏回帰係数		重相関係数	分散分析
	授業に対する意識	学校生活に対する意識		
1学年（ $n=268$ ）	0.45 **	0.27 **	$R=0.63$	$F_{(2,265)}=86.43$ **
2学年（ $n=247$ ）	0.28 **	0.26 **	$R=0.59$	$F_{(2,244)}=65.07$ **
3学年（ $n=210$ ）	0.25 **	0.20 **	$R=0.71$	$F_{(2,207)}=107.77$ **
全体（ $N=725$ ）	0.50 **	0.24 **	$R=0.64$	$F_{(2,722)}=247.46$ **

\*\*:  $p<0.01$

#### 4. 本章のまとめ

本章では、工業高校における生徒の職業に対する自己効力感の構造を把握することを試みた。その際、授業や進路、学校生活に対する意識との関連性についても把握した。その結果、本調査の条件下で、以下の知見が得られた。

- 1) 工業高校生の職業に対する自己効力感として、「適応資質効力感」因子、「専門性効力感」因子の2因子を抽出し、計11項目の測定尺度を構成することができた。
- 2) 工業高校生の職業に対する自己効力感は、1・2学年よりも3学年の方が「適応資質効力感」因子、「専門性効力感」因子共に高くなった。
- 3) また、「適応資質効力感」因子に対しては授業及び学校生活に対する意識の影響力が学年の進行に伴って強くなる傾向を示した。一方、「専門性効力感」因子に対しては、逆にこれらの影響力が学年の進行に伴って弱くなる傾向を示した。

以下、本章で得られた職業に対する自己効力感を構成する2因子をまとめて、職業自己効力感構成因子群と呼ぶことにする。次章では、職業自己効力感構成因子群との進路指導上の妥当性を検討するために、企業が新規入職者に求める資質・能力との関連性を検討することとする。

## 第3章 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力，社会人基礎力と職業に対する自己効力感の形成期待との関連性

### 1 目的

本章の目的は，第2章で抽出した職業自己効力感構成因子群の進路指導上の妥当性を検討するために，企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力，社会人基礎力とこれら2因子との関連性を確認することである。

具体的には，O市内の公立A工業高校に求人を提供する企業の人事担当者を対象に，求人において工業高校生に期待する基礎的・汎用的能力，社会人基礎力及び職業に対する自己効力感の形成期待度を調査する。基礎的・汎用的能力，社会人基礎力は，その概念から，一般的に多くの人事担当者が重視する資質・能力と捉えることができる。企業の求めるこれらの資質・能力を有する人材像と職業に対する自己効力感が合致する場合，両者に関連性が見いだされると予測される（基準関連妥当性）。しかし，工業高校への求人には，学科の専門性と関連性が強い企業（以下，関連業種）と，関連性の弱い企業（以下，非関連業種）の両者がある。そこで本章では，上記の関連性を関連・非関連業種のそれぞれについて検討し，職業に対する自己効力感が関連・非関連業種両者への就職を想定した進路指導においても妥当性を認めることができるかどうか，検討することとした。

### 2 研究の方法

#### 2.1 調査対象者

対象者は，O市内の公立A工業高校に求人提供のために来校した人事担当者181企業（指定校求人101，公開・非公開求人80），（関連業種123，非関連業種58）の人事担当者である。調査への協力に許諾の得られた有効回答数は，178企業（指定校求人101，公開・非公開求人77），（関連業種123，非関連業種55），有効回答率は98.3%であった（表Ⅲ-1）。関連業種は全体の69.1%（123企業）を占め，非関連業種は全体の30.9%（55企業）であった。

表Ⅲ-1 関連業種及び非関連業種の分類

関連業種(123企業)	非関連業種(55企業)
製造職(33)	物流業務(17)
技術職(32)	飲食調理(11)
技能職(21)	セールスドライバー(7)
機械工(11)	販売職（販売・レジ・受付）(6)
電気保安技術員(8)	営業・サービス(7)
機械整備工(7)	理容師(3)
自動車整備士(3)	警備員(3)
設備管理(8)	医療機関内でのリネン管理(1)

## 2.2 測定尺度

測定尺度には，①工業高校の専門分野と関連する職種内容かどうかを把握する項目（1項目2件法），②普通科高校生と工業高校生のどちらを優先に採用したいかを把握する項目（1項目3件法），③第2章で作成した「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」を企業の人事担当者用に文言修正を加えた工業高校生の職業に対する自己効力感の形成期待度を把握する項目（2因子計11項目，5件法），④文部科学省(2011)<sup>23)</sup>が定義づける「基礎的・汎用的能力」に対する意識を把握する項目（4能力計9項目，5件法），⑤経済産業省(2006)<sup>24)</sup>が提唱する「社会人基礎力」に対する意識を把握する項目（3能力計12要素，5件法）をそれぞれ設定した。質問項目を図Ⅲ-1に示す。

### (1) 関連業種と非関連業種を把握する項目

工業高校の専門分野と関連・非関連業種であるかどうかを把握する項目については，求人票の仕事内容が工業高校の専門分と関連している職種・業務内容であるかどうかを確認するために使用するためである。質問項目としては，「工業高校の専門分野と関連する職種・業務内容ですか。」を設定した。この項目に対して（イ：はい，ロ：いいえ）で回答してもらった。図Ⅲ-1の質問項目の1に示す。

### (2) 普通科高校生，工業高校生のどちらを採用したいかを把握する項目

新規入職者に求める高校生を把握する項目については，「普通科高校生と工業高校生とでは，どちらを優先して採用したいですか。」を設定した。この項目に対して（イ：普通科高校生，ロ：工業高校生，ハ：同じくらい，両方）で回答してもらった。図Ⅲ-1の質問項目2に示す。

### (3) 職業に対する自己効力感形成期待度を把握する項目

第2章で作成した「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」は，工業高校生を対象にしたものであり，企業の人事担当者が回答することができない。そこで，本研究では，質問11項目すべてにおいて，文言修正を加えた。例えば「何事にも，アイデアを発想する力を身につけたので，将来の職業や仕事に自信が持てるようになった。」といった質問項目を「何事にも，アイデアを発想する力を身につけた生徒を期待する。」という具合に企業の人事担当者が回答可能な文言を設定した。「適応資質効力感」因子6項目は，図Ⅲ-1の設問3における項目A，B，D，F，H及びJである。「専門性効力感」因子5項目は，図Ⅲ-1の設問3における項目C，E，G，I及びKである。これら計11項目に対しては，当てはまりの程度を5件法（5：とても期待する，4：少し期待する，3：どちらともいえない，2：どちらかといえば期待する，1：あまり期待しない）で回答してもらった。

第3章 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力，社会人基礎力と職業に対する自己効力感形成期待との関連性

本校求人番号	企業名( )
1. 工業高校の専門分野と関連する職種・業務内容ですか。	イ. はい      ロ. いいえ
2. 普通科高校と工業高校とでは、どちらを優先して採用したいですか。	イ. 普通科高校生      ロ. 工業高校生      ハ. 同じくらい（両方）
3. 入社する工業高校生に対して、生徒が在籍時に身につけたことでどの程度の期待をするかにご記入ください。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <b>5. とても期待する   4. 少し期待する   3. どちらともいえない   2. どちらかといえば期待する   1. あまり期待しない</b> </div>	
A. 何事にも、集中力を身につけてきている生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> B. 周りの人と協力して作業する協調性を身につけてきている生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> C. 専門的な知識を幅広く身につけてきている生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> D. 何事にも、アイデアを発想する力を身につけてきている生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> E. 専門分野に関する実験や実習の経験をしてきている生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> F. 何事にも、整理・整頓する習慣を身につけてきている生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> G. 専門的な技能を深めてきている生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> I. 何事に取り組む時も、規律正しい行動を身につけてきている生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> H. 専門分野に興味・関心を持ってきた生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> J. 何事にも、目標を持ち努力する大切さを知った生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> K. 専門分野の資格を取得してきた生徒を期待する。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b>	
<b>4. 企業がこれからの工業高校卒業生について入社後に求める能力(9項目)についてお答えください。</b>	
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <b>5. とても重要   4. 少し重要   3. どちらともいえない   2. どちらかといえば重要   1. あまり重要しない</b> </div>	
① それぞれに違う他人の考え方を理解し、相手の意見を聞き、自分の考えを正確に伝えることができる力を求めている。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> ② 自分がどのような状況にいるのかを把握し、自分の役割を果たす力を求めている。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> ③ 他人と協力・協働して積極的に社会に参画し、今後の社会を作っていく力をも求めている。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> ④ 仕事をする上でのさまざまな課題を発見してそれを分析し、適切な計画を立ててその課題を処理・解決する力を求めている。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> ⑤ 自分が「できること」、「意義を感じること」、「したいこと」について、ポジティブに理解し、主体的に行動できる力を行動できる力を求めている。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> ⑥ 自分の考えや感情をコントロールして、社会に参加できる力を求めている。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> ⑦ 進んで学ぼうとする力を求めている。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> ⑧ 「働くこと」の意義を理解し、自分が果たすべきさまざまな立場や役割とその意義を関連させる力を求めている。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b> ⑨ 多様な生き方に関するさまざまな情報を、適切に取捨選択・活用しながら、主体的に判断してキャリアを形成していく力を求めている。 . . . . . <b>5. 4. 3. 2. 1.</b>	

図Ⅲ-1 職業に対する自己効力感形成期待度を把握する質問項目

及び基礎的・汎用的能力の意識を把握する質問項目

第3章 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力，社会人基礎力と職業に対する自己効力感形成期待との関連性

本校求人番号 _____ 企業名 ( _____ )																								
1.企業がこれからの工業高校卒業生について入社後に求める能力(12項目)についてお答えください。																								
<b>5.とても重要する   4.少し重要する   3.どちらともいえない   2.どちらかといえば重要する   1.あまり重要しない</b>																								
<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">① 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>② やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>③ 言われた事をやるだけではなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む力を求め取り組む力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>④ 目標に向かって進むときに「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>⑤ 課題の解決に向けた複数の道筋を明らかにして「その中で最善のものは何か」を検討し、準備する力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>⑥ 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>⑦ 自分の意見を分かりやすく整理した上で、相手に理解できるような確に伝える力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>⑧ 相手の話しやすい環境を作り、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>⑨ 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>⑩ チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>⑪ 状況に応じて、社会のルールを守り、発言や行動を適切にコントロールできる力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> <tr> <td>⑫ ストレスを感じることがあっても、成長の機会だとポジティブにとらえ、肩の力を抜いて対応する力を求めている。</td> <td style="text-align: right; vertical-align: bottom;">5 . 4 . 3 . 2 . 1</td> </tr> </table>	① 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	② やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	③ 言われた事をやるだけではなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む力を求め取り組む力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	④ 目標に向かって進むときに「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	⑤ 課題の解決に向けた複数の道筋を明らかにして「その中で最善のものは何か」を検討し、準備する力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	⑥ 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	⑦ 自分の意見を分かりやすく整理した上で、相手に理解できるような確に伝える力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	⑧ 相手の話しやすい環境を作り、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	⑨ 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	⑩ チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	⑪ 状況に応じて、社会のルールを守り、発言や行動を適切にコントロールできる力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1	⑫ ストレスを感じることがあっても、成長の機会だとポジティブにとらえ、肩の力を抜いて対応する力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1
① 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
② やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
③ 言われた事をやるだけではなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む力を求め取り組む力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
④ 目標に向かって進むときに「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
⑤ 課題の解決に向けた複数の道筋を明らかにして「その中で最善のものは何か」を検討し、準備する力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
⑥ 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
⑦ 自分の意見を分かりやすく整理した上で、相手に理解できるような確に伝える力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
⑧ 相手の話しやすい環境を作り、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
⑨ 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
⑩ チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
⑪ 状況に応じて、社会のルールを守り、発言や行動を適切にコントロールできる力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							
⑫ ストレスを感じることがあっても、成長の機会だとポジティブにとらえ、肩の力を抜いて対応する力を求めている。	5 . 4 . 3 . 2 . 1																							

図Ⅲ-2 社会人基礎力の意識を把握する質問項目

(4)「基礎的・汎用的能力」に対する意識を把握する項目

文部科学省は、社会や企業が必要としている能力を「基礎的・汎用的能力」と定義づけており、その4能力を具体的な内容に整理したものを質問項目に設定した。その1つ目の能力とする「人間関係形成・社会形成能力」3項目は、図Ⅲ-1の設問4における項目①，②，③である。2つ目の能力とする「課題対応能力」1項目は、図Ⅲ-1の設問4における項目④である。そして、3つ目の能力とする「自己理解・自己管理能力」3項目は、図Ⅲ-1の設問4における項目⑤，⑥，⑦である。また、4つ目の能力とする「キャリアプランニング能力」2項目は、⑧，⑨である。これら計9項目に対しては、当てはまりの程度を5件法（5：とても重要である，4：少し重要である，3：どちらともいえない，2：どちらかといえば重要である，1：あまり重要しない）で回答してもらった。

(5)「社会人基礎力」に対する意識を把握する項目



### 第3章 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力，社会人基礎力と職業に対する自己効力感形成期待との関連性

経済産業省の提唱する「社会人基礎力」について3つの能力と12の要素に示す内容を質問項目として設定した。1つ目の能力である「前に踏み出す力」は、「主体性」，「働きか力」，「実行力」の3要素からなり，図1の設問4における項目①，②，③である。2つ目の能力は「考え抜く力」は、「課題発見力」，「計画力」，「創造力」の3要素からなり，図Ⅲ-2の設問4における項目④，⑤，⑥である。3つ目の能力である「チームで働く力」は、「発信力」，「傾聴力」，「柔軟性」，「状況把握」，「規律力」，「ストレスコントロール力」の6要素からなり，図Ⅲ-2の設問4における項目⑦，⑧，⑨，⑩，⑪，⑫である。これら計12項目に対しては，当てはまりの程度を5件法（5：とても重要である，4：少し重要である，3：どちらともいえない，2：どちらかといえば重要である，1：あまり重要でない）で回答してもらった。質問項目を図Ⅲ-2に示す。

## 2.3 調査の手続き

当該年度の求人受付解禁日の7月1日以降から就職受験解禁日の9月16日未満までの来校した企業の人事担当者を対象に調査を実施した。

## 3. 結果及び考察

### 3.1 調査対象者の状況

#### (1) 工業高校生の採用意欲の状況

まず，企業の人事担当者は，普通科高校生と工業高校生のどちらを優先に採用を考えているかについて集計した。その結果，普通科高校生を優先に採用したいと回答した企業の人事担当者は見られなかった。また，工業高校生を優先に採用したいと回答した企業の人事担当者は，全体の割合68.5%，122企業（関連業種107，非関連業種15）であった。そして，普通科高校生及び工業高校生に関係なくどちらも両方を採用したいと回答した企業の人事担当者は，全体の割合31.5%，56企業（関連業種20，非関連業種36）であった。このことから，本調査対象者となる専門分野と関連する殆どの企業の人事担当者は，工業高校の学習経験のある生徒を優先に，新規入職者として考えていることが確認された。

#### (2) 企業が工業高校生に求める職業に対する自己効力感形成への期待

職業自己効力感構成因子群の形成期待度の平均について規模別に集計した結果を表Ⅲ-2に，関連・非関連業種別に集計した結果を表Ⅲ-3に示す。職業自己効力感構成因子群への期待度を関連業種群と非関連業種群で比較した結果，「適応資質効力感」因子は，関連業種群の平均値（4.32）に対して，非関連業種群の平均値（4.24）との間に有意な差は見られなかった（ $t_{(81)Welch}=0.79$  *n.s.*）。しかし，「専門性効力感」因子については関連業種群の平均値（3.44）に対して，非関連業種群の平均値（2.97）との間に有意な差を示した（ $t_{(176)}=3.44$ ,  $p<0.01$ ）。

第3章 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力，社会人基礎力と職業に対する自己効力感形成期待との関連性

表Ⅲ-2 規模別による職業自己効力構成因子群の平均値

規模別		100人未満 ( <i>n</i> = 54)	100～500人未満 ( <i>n</i> = 68)	500～1000人未満 ( <i>n</i> = 10)	1000人以上 ( <i>n</i> = 46)
「適応資質効力感」因子	平均	4.24	4.23	4.42	4.42
	<i>S. D.</i>	0.69	0.48	0.45	0.49
「専門性効力感」因子	平均	3.18	3.27	3.64	3.39
	<i>S. D.</i>	0.73	0.73	0.82	0.84

表Ⅲ-3 関連・非関連業種における職業自己効力構成因子群形成への期待の検討

		「適資質効力感」因子	「専門性効力感」因子
関連業種 ( <i>n</i> =123)	平均	4.32	3.44
	<i>S. D.</i>	0.50	0.72
非関連業種 ( <i>n</i> =55)	平均	4.24	2.97
	<i>S. D.</i>	0.67	0.78
群間の検定		$t_{(81) Welch} = 0.79$ <i>n. s.</i>	$t_{(176)} = 3.92$ **

\*\* :  $p < 0.01$

(3) 優先して採用したい高校生における職業自己効力感構成因子群の検討

工業高校生を採用したいと回答した群 ( $n=122$ )，(関連業種 108，非関連業種 14) で，工業高校生と同じくらいに，普通科高校生のどちらも採用したいと回答した群 ( $n=56$ )，(関連業種 20，非関連業種 36) に分け，職業自己効力感構成因子群について比較した(表Ⅲ-3)。その結果，「適応資質効力感」因子は，工業高校生を採用したい群 (4.30) に対して，工業高校生と同じくらい，普通科高校生のどちらも採用したい群 (4.24) との群間に差異は見られなかった ( $t_{(82) Welch} = 0.30$ , *n.s.*)。しかし，「専門性効力感」因子については，有意な差を示した ( $t_{(176)} = 3.39$ ,  $p < 0.01$ ) (表Ⅲ-4)。これらのことから，工業高校に求人を求める企業の人事担当者は，非関連業種より関連業種の方が普通科高校生より工業高校生を優先的に採用したいと考える傾向が示された。また，この傾向は主に，「専門性効力感」因子の形成期待の強さに表出することが示唆された。これは，関連業種の人事担当者は，工業高校生に対して，その専門性への自信に期待して採用を検討しやすいためではないかと考えられる。

表Ⅲ-4 優先して採用したい高校生の職業自己効力感形成への期待の検討

		「適応資質効力感」因子	「専門性効力感」因子
工業高校生 ( <i>n</i> =122)	平均	4.30	3.42
	<i>S. D.</i>	0.49	0.75
同じくらい (両方) ( <i>n</i> =56)	平均	4.27	3.01
	<i>S. D.</i>	0.68	0.75
群間の検定		$t_{(82) Welch} = 0.30$ <i>n. s.</i>	$t_{(176)} = 3.39$ **

\*\* :  $p < 0.01$

#### (4) 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力の状況

「基礎的・汎用的能力」の平均について，規模別の集計結果を表Ⅲ-5に，関連・非関連業種別の集計結果を表Ⅲ-6に示す。関連業種群（ $n=123$ ）と非関連業種群（ $n=55$ ）の群間の差のt検定による分析の結果，「人間関係形成・社会形成能力」，「課題対応能力」，「自己理解・自己形成能力」，「キャリアプランニング能力」の群間に差は見られなかった。

表Ⅲ-5 規模別による基礎的・汎用的能力の平均値

規模別		100人未満 ( $n = 54$ )	100～500人未満 ( $n = 68$ )	500～1000人未満 ( $n = 10$ )	1000人以上 ( $n = 46$ )
人間関係形成・ 社会形成能力	平均	4.28	4.31	4.50	4.07
	<i>S.D.</i>	0.77	0.51	0.39	0.49
課題対応能力	平均	4.07	3.99	4.50	4.20
	<i>S.D.</i>	0.93	0.82	0.71	0.83
自己理解・ 自己管理能力	平均	4.24	4.25	4.43	4.45
	<i>S.D.</i>	0.79	0.53	0.61	0.67
キャリア プランニング能力	平均	3.94	3.93	4.20	4.44
	<i>S.D.</i>	0.81	0.65	0.54	0.67

表Ⅲ-6 基礎的・汎用的能力の関連・非関連業種との検討

		人間関係・ 社会形成能力	課題対応能力	自己理解・ 自己管理能力	キャリア プランニング能力
関連業種 ( $n=123$ )	平均	4.37	4.12	4.33	4.03
	<i>S.D.</i>	0.58	0.85	0.63	0.68
非関連業種 ( $n=55$ )	平均	4.36	4.04	4.33	4.02
	<i>S.D.</i>	0.62	0.86	0.74	0.78
群間の検定		$t_{(176)}=0.10$ <i>n. s.</i>	$t_{(176)}=0.58$ <i>n. s.</i>	$t_{(176)}=0.00$ <i>n. s.</i>	$t_{(176)}=0.09$ <i>n. s.</i>

#### (5) 企業が工業高校生に求める社会人基礎力の状況

社会人基礎力の平均について規模別の集計結果を表Ⅲ-6に，関連・非関連業種別の集計結果を表Ⅲ-7に示す。専門分野の関連業種群（ $n=123$ ）と非関連業種群（ $n=55$ ）の群間の差のt検定による分析を行った結果，「前に踏み出す力」，「考え抜く力」，「チームで働く力」の群間に差は見られなかった。

以上の実態を持つ調査対象者の反応として，職業自己効力感構成因子群の形成期待と基礎的・汎用的能力及び社会人基礎力との関連性について分析を進めた。

表Ⅲ-7 規模別による社会人基礎力の平均値

規模別		100人未満 ( $n = 64$ )	100～500人未満 ( $n = 68$ )	500～1000人未満 ( $n = 10$ )	1000人以上 ( $n = 46$ )
前に踏み出す力	平均	4.21	4.26	4.67	4.60
	<i>S.D.</i>	0.71	0.62	0.42	0.51
考え抜く力	平均	4.00	4.00	4.40	4.22
	<i>S.D.</i>	0.79	0.61	0.49	0.83
チームで働く力	平均	3.95	4.07	4.42	4.36
	<i>S.D.</i>	0.77	0.55	0.48	0.67

表Ⅲ-8 社会人基礎力の関連・非関連業種との検討

		前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力
関連業種 (n=123)	平均	4.37	4.04	4.12
	S.D.	0.60	0.76	0.67
非関連業種 (n=55)	平均	4.31	4.13	4.15
	S.D.	0.70	0.64	0.66
群間の検定		$t_{(176)}=0.58$ n. s.	$t_{(176)}=0.76$ n. s.	$t_{(176)}=0.28$ n. s.

### 3.2 「適応資質効力感」因子の形成期待の妥当性の検討

#### (1) 基礎的・汎用的能力との関連性

##### ①関連業種

関連業種における「適応資質効力感」因子全体の平均値(4.32)を基準に，上位群と下位群に分け基礎的・汎用的能力の群間の差のt検定による分析を行なった(表Ⅲ-9)。その結果，「人間関係形成・社会形成能力」の群間に差が見られた( $t_{(74)Welch}=4.33$ ,  $p<0.01$ )。また，「課題対応能力」の群間の差においても，群間に差が見られた( $t_{(121)}=2.13$ ,  $p<0.05$ )。「自己理解・自己管理能力」の群間にも差が見られた( $t_{(69)Welch}=5.33$ ,  $p<0.01$ )。そして，「キャリアプランニング能力」の群間にも差が見られた( $t_{(75)Welch}=3.76$ ,  $p<0.01$ )。

表Ⅲ-9 関連業種における「適応資質効力感」因子と基礎的・汎用的能力との関連性

「適応資質効力感」因子		人間関係形成・ 社会形成能力	課題対応能力	自己理解・ 自己管理能力	キャリア プランニング能力
上位群 (n=77)	平均	4.55	4.09	4.55	4.21
	S.D.	0.47	0.81	0.46	0.56
下位群 (n=46)	平均	4.08	3.76	3.94	3.73
	S.D.	0.64	0.87	0.69	0.75
群間の検定		$t_{(74)Welch}=4.33$ **	$t_{(121)}=2.13$ *	$t_{(69)Welch}=5.33$ **	$t_{(75)Welch}=3.76$ **

\*\*：  $p<0.01$  \*：  $p<0.05$

##### ②非関連業種

同様に，非関連業種における「適応資質効力感」因子全体の平均値(4.24)を基準に，上位群と下位群に分け基礎的・汎用的能力の群間の差のt検定による分析を行なった(表Ⅲ-10)。その結果，「人間関係形成・社会形成能力」の群間に差が見られた( $t_{(24)Welch}=4.88$ ,  $p<0.01$ )。また，「課題対応能力」の群間の差においても，群間に差が見られた( $t_{(53)}=2.60$ ,  $p<0.05$ )。「自己理解・自己管理能力」の群間にも差が見られた( $t_{(28)Welch}=3.36$ ,  $p<0.01$ )。そして，「キャリアプランニング能力」の群間にも差が見られた( $t_{(53)}=2.39$ ,  $p<0.05$ )。

### 第3章 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力，社会人基礎力と職業に対する自己効力感形成期待との関連性

これらのことから，関連・非関連業種共に，「専門性効力感」因子の形成期待が高い企業の人事担当者の方が，基礎的・汎用的能力の「人間関係形成・社会形成能力」，「課題対応能力」，「自己理解・自己管理能力」，「キャリアプランニング能力」の4能力に対して，新規入職者に必要な能力・資質として重要視している傾向が示された。

表Ⅲ-10 非関連業種における「適応資質効力感」因子と基礎的・汎用的能力との関連性

「適応資質効力感」因子		人間関係形成・ 社会形成能力	課題対応能力	自己理解・ 自己管理能力	キャリア プランニング能力
上位群 (n=34)	平均	4.66	4.26	4.60	4.21
	S.D.	0.31	0.79	0.50	0.63
下位群 (n=21)	平均	3.87	3.67	3.90	3.71
	S.D.	0.70	0.86	0.87	0.92
群間の検定		$t_{(24)Welch}=4.88^{**}$	$t_{(53)}=2.60^{*}$	$t_{(28)Welch}=3.36^{**}$	$t_{(53)}=2.39^{*}$

\*\*：  $p<0.01$  \*：  $p<0.05$

#### (2) 社会人基礎力との関連性

##### ① 関連業種

次に，関連業種における「適応資質効力感」因子全体の平均値（4.24）を基準に，上位群と下位群の社会人基礎力の群間の差のt検定による分析を行なった（表Ⅲ-11）。その結果，「前に踏み出す力」の群間に差が見られた（ $t_{(65)Welch}=4.98$ ,  $p<0.01$ ）。また，「考え抜く力」の群間の差においても，群間に差が見られた（ $t_{(74)}=4.80$ ,  $p<0.01$ ）。「チームで働く力」の群間にも差が見られた（ $t_{(67)Welch}=4.29$ ,  $p<0.01$ ）。

表-Ⅲ11 関連業種における「適応資質効力感」因子と社会人基礎力との関連性

「適応資質効力感」因子		前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力
上位群 (n=77)	平均	4.58	4.29	4.32
	S.D.	0.42	0.61	0.50
下位群 (n=46)	平均	4.02	3.62	3.77
	S.D.	0.69	0.82	0.78
群間の検定		$t_{(65)Welch}=4.98^{**}$	$t_{(74)Welch}=4.80^{**}$	$t_{(67)Welch}=4.29^{**}$

\*\*：  $p<0.01$

##### ② 非関連業種

同様に，非関連業種における「適応資質効力感」因子全体の平均値（4.24）を基準に，上位群と下位群に分け社会人基礎力の群間の差のt検定による分析を行なった（表Ⅲ-12）。その結果，「前に踏み出す力」の群間に差が見られた（ $t_{(26)Welch}=3.57$ ,  $p<0.01$ ）。また，「考え抜く力」の群間の差においても，群間に差が見られた（ $t_{(28)}=2.75$ ,  $p<0.05$ ）。「チームで働く力」の群間にも差が見られた（ $t_{(25)Welch}=2.84$ ,  $p<0.01$ ）。

### 第3章 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力、社会人基礎力と職業に対する自己効力感形成期待との関連性

このことから、関連・非関連業種共に「適応資質効力感」因子の期待が高い企業の人事担当者の方が、社会人基礎力「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」に対しても、新規入職者に必要な資質、能力として重要視されていることが示された。

表-Ⅲ12 非関連企業における「適応資質効力感」因子と社会人基礎力との関連性

「適応資質効力感」因子		前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力
上位群(n=34)	平均	4.58	4.32	4.37
	S.D.	0.42	0.46	0.39
下位群(n=21)	平均	3.87	3.81	3.81
	S.D.	0.85	0.77	0.85
群間の検定		$t_{(26)Welch}=3.57^{**}$	$t_{(28)Welch}=2.75^{*}$	$t_{(25)Welch}=2.84^{**}$

\*\*：  $p<0.01$  \*：  $p<0.05$

以上の結果から、「適応資質効力感」因子の形成期待は、関連・非関連業種を問わず、企業が求める基礎的・汎用的能力及び社会人基礎力と適切に関連しており、その進路指導上の妥当性が確認された。

### 3.3 「専門性効力感」因子の形成期待の妥当性の検討

#### (1) 基礎的・汎用的能力との関連性

##### ①関連業種

次に、「専門性効力感」因子全体の平均値(3.44)を基準に、上位群と下位群に分け基礎的・汎用的能力の群間の差のt検定による分析を行った(表Ⅲ-13)。関連業種群での分析の結果、「人間関係形成・社会形成能力」の群間に差は見られた( $t_{(112)Welch}=7.16, p<0.01$ )。また、「課題対応能力」の群間の差においても、群間に差が見られた( $t_{(121)}=3.80, p<0.01$ )。自己理解・自己管理能力」の群間にも差が見られた( $t_{(117)Welch}=4.29, p<0.01$ )。そして、「キャリアプランニング能力」の群間にも差が見られた( $t_{(118)Welch}=4.90, p<0.01$ )。

表Ⅲ-13 関連企業における「専門性効力感」と基礎的・汎用的能力との関連性

「専門性効力感」因子	人間関係形成・ 社会形成能力		課題対応能力	自己理解・ 自己管理能力		キャリア プランニング能力
	平均	S.D.		平均	S.D.	
上位群(n=57)	平均	4.57	4.42	4.57	4.32	4.32
	S.D.	0.46	0.73	0.49	0.52	0.52
下位群(n=66)	平均	4.21	3.86	4.12	3.78	3.78
	S.D.	0.63	0.88	0.88	0.70	0.70
群間の検定		$t_{(112)Welch}=7.16^{**}$	$t_{(121)}=3.80^{**}$	$t_{(117)Welch}=4.29^{**}$	$t_{(118)Welch}=4.90^{**}$	

\*\*：  $p<0.01$

## ②非関連業種

同様に，非関連業種における「専門性効力感」因子全体の平均値（2.97）を基準に，上位群と下位群に分け基礎的・汎用的能力の群間の差の  $t$  検定による分析を行った（表Ⅲ-14）。その結果，「人間関係形成・社会形成能力」の群間に差が見られた（ $t_{(19)Welch}=2.89, p<0.01$ ）。また，「課題対応能力」の群間の差においても，群間に差が見られた（ $t_{(53)}=2.26, p<0.05$ ）。「自己理解・自己管理能力」の群間にも差が見られた（ $t_{(20)Welch}=2.78, p<0.05$ ）。そして，「キャリアプランニング能力」の群間にも差が見られた（ $t_{(22)Welch}=2.94, p<0.01$ ）。

これらのことから，関連・非関連業種共に，「専門性効力感」因子の期待度が高い企業の人事担当者の方が，基礎的・汎用的能力の「人間関係形成・社会形成能力」，「課題対応能力」，「自己理解・自己管理能力」，「キャリアプランニング能力」の4能力に対して，新規入職者に必要な能力として重要視していることが示された。

表Ⅲ-14 非関連業種における「専門性効力感」と基礎的・汎用的能力との関連性

「専門性効力感」因子		人間関係形成・ 社会形成能力	課題対応能力	自己理解・ 自己管理能力	キャリア プランニング能力
上位群 ( $n=38$ )	平均	4.54	4.21	4.54	4.24
	<i>S.D.</i>	0.41	0.74	0.54	0.61
下位群 ( $n=17$ )	平均	3.94	3.65	3.86	3.53
	<i>S.D.</i>	0.81	1.06	0.94	0.91
群間の検定		$t_{(19)Welch}=2.89^{**}$	$t_{(53)}=2.26^{*}$	$t_{(20)Welch}=2.78^{*}$	$t_{(22)Welch}=2.94^{**}$

\*\*：  $p<0.01$  \*：  $p<0.05$

## (2) 社会人基礎力との関連性

### ①関連業種

次に，関連業種における「専門性効力感」因子全体の平均値（3.44）を基準に，上位群と下位群に分け社会人基礎力の群間の差の  $t$  検定による分析を行なった（表Ⅲ-15）。その結果，「前に踏み出す力」の群間に差が見られた（ $t_{(113)Welch}=5.29, p<0.01$ ）。また，「考え抜く力」の群間の差

表Ⅲ15 関連企業における「専門性効力感」因子と社会人基礎力との関連性

「専門性効力感」因子		前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力
上位群 ( $n=57$ )	平均	4.65	4.39	4.36
	<i>S.D.</i>	0.42	0.56	0.55
下位群 ( $n=66$ )	平均	4.14	3.74	3.91
	<i>S.D.</i>	0.64	0.79	0.70
群間の検定		$t_{(113)Welch}=5.29^{**}$	$t_{(116)Welch}=5.31^{**}$	$t_{(121)}=3.92^{**}$

\*\*：  $p<0.01$



においても、群間に差が見られた ( $t_{(116)}=5.31, p<0.01$ )。「チームで働く力」の群間にも差が見られた ( $t_{(121)}=3.92, p<0.01$ )。

## ②非関連業種

非関連業種における「専門性効力感」因子全体の平均値(2.97)を基準に、上位群と下位群に分け社会人基礎力の群間の差のt検定による分析を行なった(表Ⅲ-16)。その結果、「前に踏み出す力」の群間に差が見られた ( $t_{(53)}=4.10, p<0.01$ )。また、「考え抜く力」の群間の差においても、群間に差が見られた ( $t_{(22)Welch}=3.07, p<0.01$ )。「チームで働く力」の群間にも差が見られた ( $t_{(21)Welch}=2.58, p<0.05$ )。

この結果から、関連・非関連業種共に「専門性効力感」因子の期待が高い企業の人事担当者の方が、社会人基礎力の「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」に対しても、新規入職者に必要な資質、能力として重要視されていることが示された。

以上の結果から、「専門性効力感」因子の形成期待は、関連・非関連業種を問わず、企業が求める基礎的・汎用的能力及び社会人基礎力と適切に関連しており、その進路指導上の妥当性が確認された。

表-Ⅲ16 非関連企業における「専門性効力感」因子と社会人基礎力との関連性

「専門性効力感」因子		前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力
上位群( $n=38$ )	平均	4.54	4.32	4.32
	S.D.	0.54	0.49	0.51
下位群( $n=17$ )	平均	3.80	3.71	3.77
	S.D.	0.77	0.75	0.81
群間の検定		$t_{(53)}=4.10$ **	$t_{(22)Welch}=3.07$ **	$t_{(21)Welch}=2.58$ *

\*\*：  $p<0.01$  \*：  $p<0.05$

## 4. 本章のまとめ

以上、本章では、工業高校生の職業に対する自己効力感の形成期待と企業が求める基礎的・汎用的能力及び社会人基礎力との関連性を検討した。その結果、本研究の条件下で以下の知見が得られた。

- 1) 工業高校に求人を求める企業の人事担当者は、非関連業種より関連業種の方が普通科高校生より工業高校生を優先的に採用にしたいと考える傾向が示された。また、この傾向は主に、「専門性効力感」因子の形成期待の強さに表出することが示唆された。これは、関連業種の人事担当者は、工業高校生に対して、その専門性への自信に期待して採用を検討しやすいためではないかと考えられた。
- 2) 関連・非関連業種を問わず、工業高校生に対して「適応資質効力感」因子、「専門性効力感」



### 第3章 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力，社会人基礎力と職業に対する自己効力感形成期待との関連性

因子の形成を期待する人事担当者の方が，基礎的・汎用的能力及び社会人基礎力の形成期待も高い傾向のあることが示唆された。このことから，これら2因子を高めることが，進路指導上，妥当であることが確認された。

次章では，妥当性の確認された職業自己効力感構成因子群を用い，研究課題2への対処として，その形成要因を探索することとする。

## 第4章 工業高校生のキャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響

### 1. 目的

本章からは、第2章で抽出した第3章でその妥当性を確認した職業に対する自己効力感の構造に対し、第2の研究課題への対処として、その形成要因を探索的に検討する。第1章で述べた通り、先行研究により、キャリア成熟と自己効力感との関連性が指摘されている。このことから本章では、工業高校生の職業に対する自己効力感について、キャリア成熟との関連性に着目する。

具体的には、坂柳(1999)<sup>38)</sup>の作成したキャリア成熟尺度（「キャリア関心性」因子、「キャリア自律性」因子、「キャリア計画性」因子）を用い、これらの3因子を説明変数、職業自己効力感構成因子群を基準変数として、その影響力を検討する。

### 2. 研究の方法

#### 2.1 調査対象

O市内の公立A工業高校生、計277名（男子268名、女子9名）、（1学年101名、2学年91名、3学年85名）、（学科：機械系91名、電気系99名、化学系87名）を対象とした。有効回答数は246名（男子237名、女子9名）、（学科：機械系85名、電気系81名、化学系80名）、有効回答率88.4%であった。

#### 2.2 測定尺度

測定尺度には、第2章で作成した「工業高生の職業に対する自己効力感尺度」（図Ⅱ－1）と坂柳(1999)<sup>38)</sup>の作成した「成人キャリア成熟尺度」（図Ⅳ－1）を準備した。「成人キャリア成熟尺度」には、自己のキャリアに対する積極的な関心である「キャリア関心性」因子、自己のキャリアに対する自律的な取り組み姿勢である「キャリア自律性」因子、自己のキャリアに対する計画的な将来展望である「キャリア計画性」の3因子が含まれる（計27項目）。回答は、「5：よくあてはまる」、「4：少しあてはまる」、「3：どちらともいえない」、「2：あまりあてはまらない」、「1：まったくあてはまらない」の5件法とした。

加えて、第2章で用いた「進路に対する意識」3項目を準備した。これは、第2章において進路に対する意識の高い生徒ほど職業に対する自己効力感が高いという知見が得られていることを踏まえ、本調査の妥当性を確認するために使用するものである。回答は、「4：とても思う」、「3：少し思う」、「2：あまり思わない」、「1：まったく思わない」の4件法とした。

### 工業高校生の職業に対する意識に関するアンケートⅡ

3. 次の質問にどのくらいあてはまるのかを○をつけてください。

5.よくあてはまる 4.少しあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.まったくあてはまらない

- |                                      |           |
|--------------------------------------|-----------|
| 1 自分のこれからの人生や生き方には、大変関心をもっている。       | 5-4-3-2-1 |
| 2 人生設計や生き方に役立つ情報を、積極的に収集するようにしている。   | 5-4-3-2-1 |
| 3 自分は何のために生きているのか、あまり考えたことがない。       | 5-4-3-2-1 |
| 4 じぶんの人生を主体的に送っている。                  | 5-4-3-2-1 |
| 5 人生や生き方には、自分で責任をもつ。                 | 5-4-3-2-1 |
| 6 生まれてこなければよかったと思うことが、しばしばある。        | 5-4-3-2-1 |
| 7 これからの人生や生き方について、自分なりの見通しをもっている。    | 5-4-3-2-1 |
| 8 こかからの人生で、取り組みたいことがいくつかある。          | 5-4-3-2-1 |
| 9 人生設計はあるけれど、それを実現するための努力は特にしていない。   | 5-4-3-2-1 |
| 10 これからの人生を、より充実したものになりたいと思う。        | 5-4-3-2-1 |
| 11 人生や生き方に関係する本や雑誌などは、ほとんど読まない。      | 5-4-3-2-1 |
| 12 人生設計は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている。     | 5-4-3-2-1 |
| 13 自ら進んで、どんな人生をおくっていくのか決めている。        | 5-4-3-2-1 |
| 14 人生が充実しないのは、大半は周囲の環境によると思う。        | 5-4-3-2-1 |
| 15 人生で難しい問題に直面しても、自分なりに積極的に解決していく。   | 5-4-3-2-1 |
| 16 自分が望む生き方をするために、具体的な計画を立てている。      | 5-4-3-2-1 |
| 17 こらからの人生で何を目標とすべきか、わからない。          | 5-4-3-2-1 |
| 18 希望する人生や生き方が送れるように、努力している。         | 5-4-3-2-1 |
| 19 どのように生きるべきかということは、あまり気にならない。      | 5-4-3-2-1 |
| 20 充実した人生を送るために参考となる話は、注意して聞いている。    | 5-4-3-2-1 |
| 21 どうすれば人生をよりよく生きられるのか、考えたことがある。     | 5-4-3-2-1 |
| 22 周りの雰囲気にあわせて、人生を送っていけばよい。          | 5-4-3-2-1 |
| 23 充実した人生になるかどうかは、自分の意志と責任によると思う。    | 5-4-3-2-1 |
| 24 これからの人生を通して、さらに自分自身を伸ばし高めていきたい。   | 5-4-3-2-1 |
| 25 これから先の人生のことは、ほとんど予想がつかない。         | 5-4-3-2-1 |
| 26 今後どんな人生を送っていききたいのか、自分なりの目標をもっている。 | 5-4-3-2-1 |
| 27 自分が期待しているような人生を、この先実現できそうである。     | 5-4-3-2-1 |

図Ⅳ-1 成人キャリア成熟尺度(坂柳 1999)

### 2.3 手続き

調査は、各高校のホームルームの時間を利用し 2008 年 9～10 月に実施した。調査後、進路に対する意識の学年別推移傾向及び職業自己効力感 2 因子との関連性を検討し、第 2 章で得られた知見との整合性を確認した。その上で、キャリア成熟各因子を説明変数、職業自己効力感構成因子群を基準変数とする重回帰分析を行った。得られた重相関係数の有意性を確認した後、有意で絶対値が 0.10 以上の標準偏回帰係数をパス係数とするパス・ダイアグラムを作成し、両尺度各因子間の因果関係について学年間の変容を把握した。

### 3. 結果及び考察

#### 3.1 調査対象者の状況

##### (1) 進路に対する意識の状況

まず、調査対象者の進路に対する意識を把握するために、「進路に対する意識」3項目の学年別平均値を求めた(表IV-1)。平均値の学年間の差異について1元配置分散分析を行った結果、学年の主効果が有意であった( $F_{(2,243)}=8.77, p<0.01$ )。LSD法による多重比較の結果、平均値が3学年>1学年≒2学年の順序性を示した。

表IV-1 進路に対する意識の実態

学年別		1学年 ( <i>n</i> =87)	2学年 ( <i>n</i> =86)	3学年 ( <i>n</i> =73)	学年間の差異の検定
進路に対する意識	平均	2.46	2.48	2.87	$F_{(2,243)}=8.77^{**}$
	<i>S. D.</i>	0.62	0.67	0.80	3学年>2学年≒1学年

\*\*: $p<0.01$

##### (2) キャリア成熟及び職業に対する自己効力感の状況

次に、調査対象者のキャリア成熟及び職業自己効力感構成因子群の状況について両尺度各因子の平均値を集計した。職業自己効力感構成因子別平均値における学年間の傾向について1元配置分散分析を行った(表IV-2, 表IV-3)。その結果、「適応資質効力感」因子、「専門性効力感」因子の両因子共に有意な差は見られなかった。同様に、キャリア成熟構成因子別の学年間の傾向について1元配置分散分析を行った。その結果、「キャリア関心性」因子、「キャリア自律性」因子、「キャリア計画性」因子ともに有意な差は見られなかった(表IV-4, 表IV-5, 表IV-6)。以上の実態を持つ調査対象者の状況として、以下の分析を進める。

表IV-2 「適応資質効力感」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =87)	2学年 ( <i>n</i> =86)	3学年 ( <i>n</i> =73)	学年間の差異の検定
「適応資質効力感」因子	平均	3.19	3.15	3.28	$F_{(2,243)}=0.66$
	<i>S. D.</i>	0.71	0.76	0.77	<i>n. s.</i>

表IV-3 「専門性効力感」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =87)	2学年 ( <i>n</i> =86)	3学年 ( <i>n</i> =73)	学年間の差異の検定
「専門性効力感」因子	平均	3.25	3.12	3.25	$F_{(2,243)}=0.69$
	<i>S. D.</i>	0.78	0.85	0.90	<i>n. s.</i>

表IV-4 「キャリア関心性」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =87)	2学年 ( <i>n</i> =86)	3学年 ( <i>n</i> =73)	学年間の差異の検定
「キャリア関心性」因子	平均	3.22	3.25	3.30	$F_{(2,243)}=0.39$
	<i>S. D.</i>	0.55	0.64	0.51	<i>n. s.</i>

表IV-5 「キャリア自律性」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =87)	2学年 ( <i>n</i> =86)	3学年 ( <i>n</i> =73)	学年間の差異の検定
「キャリア自律性」因子	平均	3.21	3.20	3.25	$F_{(2,243)}=0.19$
	<i>S. D.</i>	0.61	0.57	0.46	<i>n. s.</i>

表IV-6 「キャリア計画性」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =87)	2学年 ( <i>n</i> =86)	3学年 ( <i>n</i> =73)	学年間の差異の検定
「キャリア計画性」因子	平均	3.34	3.15	3.23	$F_{(2,243)}=1.69$
	<i>S. D.</i>	0.93	0.52	0.42	<i>n. s.</i>

### 3.2 進路に対する意識とキャリア成熟、及び職業に対する自己効力感との関連性

「進路に対する意識」3項目の平均値 2.50 を基準に、それ以上の生徒を上位群 (*n*=123), 2.50 未満の生徒を下位群 (*n*=123) として、職業に対する自己効力感 2 因子の平均値を比較した(表IV-7)。その結果, 「適応資質効力感」因子 ( $t_{(231)Welch}=3.87, p<0.01$ ), 「専門性効力感」因子 ( $t_{(244)}=4.12, p<0.01$ ) の平均値が共に上位群の方が下位群に比べて有意に高くなった。同様に, キャリア成熟についても上下位群で平均値を比較したところ, 「キャリア関心性」因子 ( $t_{(244)}=2.48, p<0.05$ ), 「キャリア計画性」因子 ( $t_{(244)}=2.14, p<0.05$ ) の 2 因子において群間に有意な差が認められた(表IV-8)。しかし, 「キャリア自律性」因子 ( $t_{(199)Welch}=1.63 \text{ n.s.}$ ) については群間に有意な差は認められなかった。

表IV-7 進路意識と職業自効力構成因子群との関連性

進路に対する意識		「適応資質効力感」因子	「専門性効力感」因子
上位群 ( <i>n</i> =123)	平均	3.38	3.42
	<i>S. D.</i>	0.45	0.42
下位群 ( <i>n</i> =123)	平均	3.02	2.99
	<i>S. D.</i>	0.45	0.60
<i>t</i> 検定		$t_{(231)Welch}=3.87 **$	$t_{(244)}=4.12 **$

\*\*:  $p<0.01$

表Ⅳ-8 進路意識とキャリア成熟構成因子群との関連性

進路に対する意識		「キャリア関心性」因子	「キャリア自律性」因子	「キャリア計画性」因子
上位群 ( $n=123$ )	平均	3.35	3.31	3.29
	<i>S.D.</i>	0.48	1.76	0.45
下位群 ( $n=123$ )	平均	3.17	3.17	3.14
	<i>S.D.</i>	0.45	0.50	0.51
$t$ 検定		$t_{(244)}=2.48 *$	$t_{(199)Welch}=1.63 \text{ n. s.}$	$t_{(244)}=2.14 *$

\*:  $p<0.05$ 

これらの結果は、第2章と同様に、Taylor, K.M. & Betz, N.E.<sup>49)</sup>による「自己効力の強い者ほど進路意識も高い」という指摘とよく一致しており、本調査に対し生徒が妥当な反応を示したものと考えられる。

### 3.3 キャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響力

上記の実態を持つ生徒の傾向として、キャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響について検討した。学年・学科を合算した全体で、「適応資質効力感」因子を基準変数、「キャリア関心性」因子・「キャリア自律性」因子・「キャリア計画性」因子の3因子を説明変数とする重回帰分析を行った。

その結果、重相関係数  $R=0.41$  が得られ、「キャリア計画性」因子からの有意な影響力が認められた ( $F_{(3,242)}=16.58$ ,  $p<0.01$ )。「専門性効力感」因子を基準変数とする重回帰分析においても、重相関係数  $R=0.18$  が得られ、「キャリア計画性」因子に有意な影響力が認められた ( $F_{(3,242)}=2.71$ ,  $p<0.05$ )。これらのことから、全体として自己のキャリアに対する計画的な将来展望が職業に対する自己効力感の形成に影響していることが明らかとなった。

そこで学年別に「適応資質効力感」因子及び「専門性効力感」因子をそれぞれ基準変数、「成人キャリア成熟尺度」各因子を説明変数とした重回帰分析を実施し、得られた標準偏回帰係数をパス係数とするパス・ダイアグラムを学年別に作成した(表Ⅳ-9, 表Ⅳ-10, 図Ⅳ-2, 図Ⅳ-3, 図Ⅳ-4)。その結果、「適応資質効力感」因子に対しては、1学年で「キャリア関心性」因子の影響力が有意傾向を示すと共に、2学年では「キャリア計画性」因子、3学年では「キャリア自律性」因子の影響力がそれぞれ有意であった。このことから、社会的環境への適応に向けた自己効力感の形成には、1学年に対する自己のキャリアに対する積極的な関心が、2学年では自己のキャリアに対する計画性と将来展望が、3学年では自己のキャリアに対する自律的な取り組みの姿勢がそれぞれ重要な役割を果たしていることが示唆された。

表IV-9 「適応資質効力感」因子を基準変数とした重回帰分析

「適応資質効力感」因子	標準偏回帰係数			重相関係数	分散分析
	キャリア関心性	キャリア自律性	キャリア計画性		
1学年 (n=87)	0.29 †	0.01	0.20	R=0.47	$F_{(3,83)}=7.84$ **
2学年 (n=86)	-0.01	0.02	0.53 **	R=0.54	$F_{(3,82)}=11.26$ **
3学年 (n=73)	-0.14	0.35 *	0.11	R=0.34	$F_{(3,69)}=2.93$ *
全体 (N=246)	0.07	0.09	0.30**	R=0.41	$F_{(3,242)}=16.58$ **

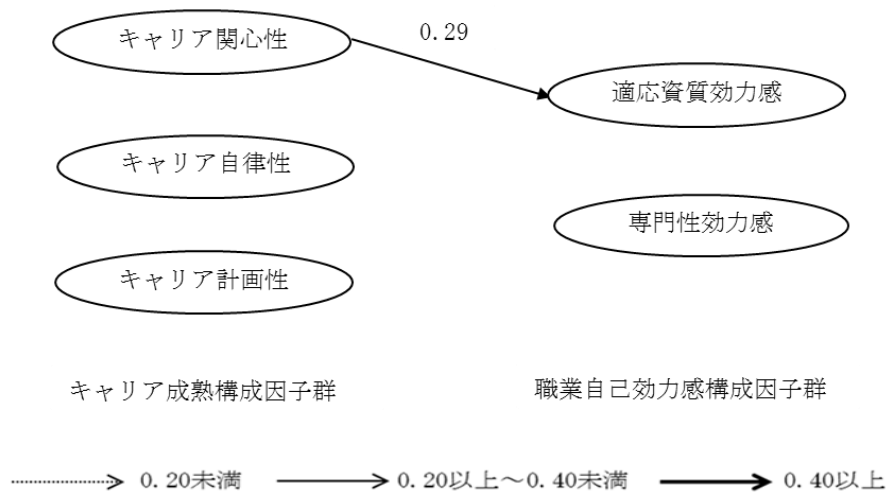
†:  $p<0.10$  \*:  $p<0.05$  \*\*:  $p<0.01$

表IV-10 「専門性効力感」因子を基準変数とした重回帰分析

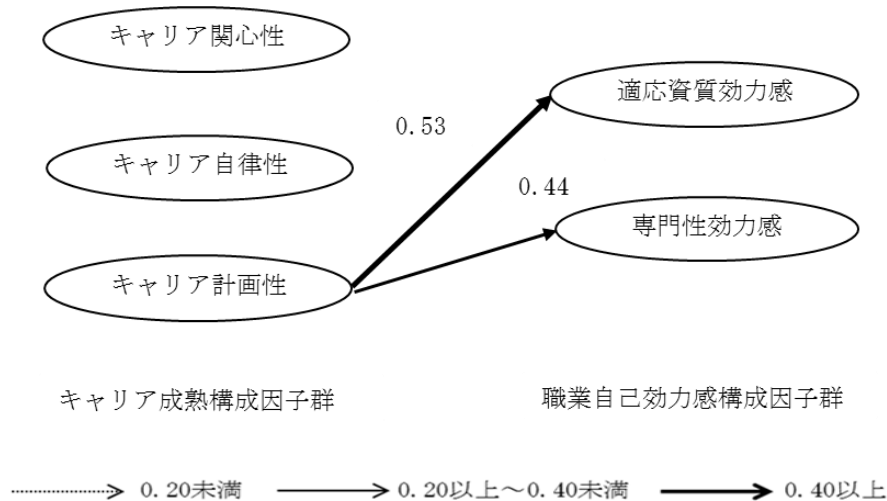
「専門性効力感」因子	標準偏回帰係数			重相関係数	分散分析
	キャリア関心性	キャリア自律性	キャリア計画性		
1学年 (n=87)	0.19	-0.22	0.06	R=0.22	$F_{(3,83)}=1.40$
2学年 (n=86)	-0.25	0.15	0.44 **	R=0.42	$F_{(3,82)}=5.78$ **
3学年 (n=73)	0.13	0.01	-0.05	R=0.11	$F_{(3,69)}=0.28$
全体 (N=246)	0.01	-0.06	0.20 *	R=0.18	$F_{(3,242)}=2.71$ *

\*:  $p<0.05$  \*\*:  $p<0.01$

一方、「専門性効力感」因子に対しては、1, 3 学年ではいずれの因子からも有意な影響力が認められず、2 学年でのみ「キャリア計画性」因子が有意な影響力を示した。このことから、特定の産業分野と関連する職業に対する自己効力感の形成には、必ずしもキャリア成熟が強い影響力を有していないことが示唆された。2 学年において「キャリア計画性」因子の影響力が認められたのは、多くの生徒が2 学年において専門分野に関連する資格・検定などの取得を目指しはじめることで、それらの取り組みと自己の進路との関連性を見出しやすくなるためではないかと考えられる。しかし、3 学年においてこの因果関係が消失することは、専門性の習得が適切に自己のキャリア成熟と結びついていないことを示すものであり、工業高校における大きな実践課題の一つであると考えられる。

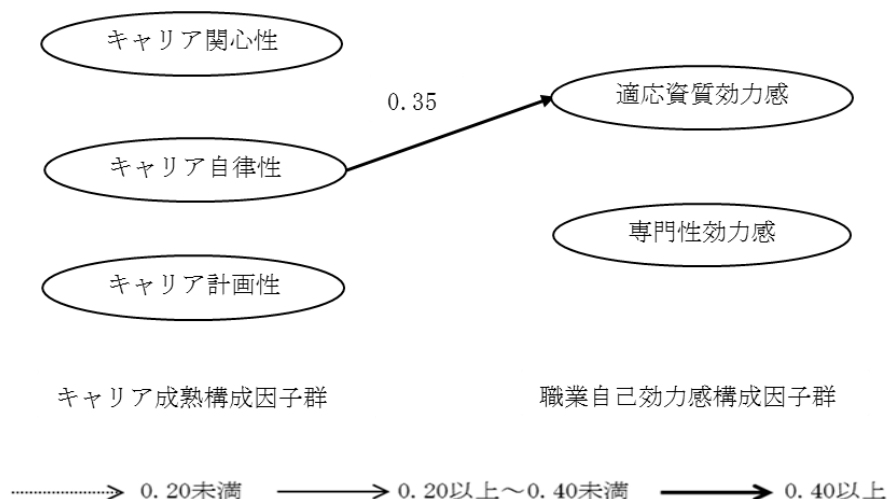


図IV-2 キャリア成熟と職業に対する自己効力感との関連性（1学年）



図IV-3 キャリア成熟と職業に対する自己効力感との関連性（2学年）





図IV-4 キャリア成熟と職業に対する自己効力感との関連性（3学年）

#### 4. 本章のまとめ

本章では、工業高校における生徒のキャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響を把握した。その結果、本調査の条件下で、以下の知見が得られた。

- 1) 工業高校生の職業に対する自己効力感の形成には、全体としてキャリア成熟が重要な役割を果たしていることが示唆された。しかし、その因果関係には、因子ごとに学年間で異なる傾向が認められた。
- 2) 「適応資質効力感」因子の形成に対しては、1 学年では「キャリア関心性」因子が、2 学年では「キャリア計画性」因子が、3 学年では「キャリア自律性」因子がそれぞれ重要な役割を果たしていることが示唆された。
- 3) しかし、「専門性効力感」因子の形成には、2 学年においてのみ「キャリア計画性」因子の影響力が示されたものの、1, 3 学年では有意な影響力は認められず、専門性の習得とキャリア成熟とが適切に関連づけられていない可能性が実践上の課題として把握された。

次章ではさらに、進路指導啓発期における3 学年時の自己概念と職業に対する自己効力感との間の関連性について検討する。

## 第5章 工業高校生の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響

### 1. 目的

本章の目的は、進路啓発期にある工業高校3学年を対象に、生徒の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響について検討することである。第1章で述べた通り、浦上(1996)<sup>36)</sup>の先行研究では、普通科高校生や大学生において進路選択過程に対する自己効力感と自己概念の間との関連性が見出されている。しかし、工業高校生を対象とした同様の検討は未だなされていない。そこで本章では、工業高校において形成される生徒の自己概念と職業に対する自己効力感との関連性に着目することとした。その際、生徒が自らの進路選択に対して自己概念の影響が最も強いと考えられる4～5月頃の進路啓発期に焦点を当てることとした。これは、進路啓発期が、生徒自ら将来の進路実現に向け具体的に進路に関する情報を得ながら、自己の適性や能力を見つめ直す時期となるため、自己概念と職業に対する自己効力感との間に関連性が生じやすいのではないかと考えられる。

そこで本章では、島田・森山(2013)<sup>102)</sup>の作成した工業高校生の自己概念尺度（「自律志向性」因子、「キャリア志向性」因子、「専門的能力志向性」因子、「社会的価値志向性」因子、「自己モニタ志向性」因子）を用い、これらの5因子を説明変数、職業自己効力感構成因子群を基準変数として、その影響力を検討する。

### 2. 研究の方法

#### 2.1 調査対象

H県及びO府下の公立工業高校3校の3学年527名（男子510名、女子17名）を対象とした。学科の構成は機械系148名、電気系173名、化学系173名、都市工学系33名であった。有効回答は516名（男子499名、女子17名）、学科の構成は機械系143名、電気系170名、化学系171名、都市工学系32名で、有効回答率は97.9%であった。

#### 2.2 測定尺度

測定尺度には、①第2章で作成した「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」、②島田・森山(2013)<sup>102)</sup>が作成した「工業高校生の自己概念尺度」をそれぞれ設定した。「工業高校生の自己概念尺度」は、自律的な社会生活の実現に向けた項目が含まれる「自律志向性」因子6項目、卒業後の進路や職業に対する希望や知識に関する項目が含まれる「キャリア志向性」因子4項目、専門分野における知識や技能に関する項目が含まれる「専門的能力志向性」因子4項目、学校や

社会の規範を重んじる価値観や心構えに関する項目が含まれる「社会的価値志向性」因子2項目、他者からの自分に関する項目が含まれる「自己モニタ志向性」因子3項目の計19項目で構成されている。質問項目を図V-1に示す。「自律志向性」因子6項目は、図V-1における項目(1)、(2)、(3)、(4)、(5)及び(6)である。「キャリア志向性」因子4項目は、図V-1における項目(7)、(8)、(9)及び(10)である。「専門的能力志向性」因子4項目は、図V-1における項目(11)、(12)、(13)及び

高校生活に関するアンケート	
3年 ( ) 組 ( ) 番 名前 ( )	
このアンケートは、学校で勉強する皆さんの意識を調査するものです。成績とは関係ありません。自分を振り返りながら、回答（あてはまる番号に○）をしてください。ご協力をお願いします。	
5. とてもよくあてはまる 4. 少しあてはまる 3. どちらでもない 2. あまりあてはまらない 1. 全くあてはまらない	
(1) 何事も前向きにチャレンジできるようになったと思う。	5-4-3-2-1
(2) いつも自分なりに目的をもって行動ができるようになったと思う。	5-4-3-2-1
(3) 色々な物事に対して判断力がついたと思う。	5-4-3-2-1
(4) ひとつのことを他人のひとと協力して、取り組めるようになったと思う。	5-4-3-2-1
(5) 自分自身に対する自信が持てるようになったと思う。	5-4-3-2-1
(6) クラブ活動や生徒会など、課外活動に積極的に取り組みたいと思うようになった。	5-4-3-2-1
(7) 進路・職業について、自分なりに「将来のなりたい自分」（理想の姿）をイメージしている。	5-4-3-2-1
(8) 希望する進路・職業について、その仕事の内容を理解しているつもりだ。	5-4-3-2-1
(9) 自分自身の将来の進路・職業に対する具体的な希望をもっている。	5-4-3-2-1
(10) 工業に関わる専門的な内容に関して、興味や関心がある。	5-4-3-2-1
(11) 情報やコンピューターに関する知識が身についたと思う。	5-4-3-2-1
(12) 情報やコンピューターに関する操作ができるようになったと思う。	5-4-3-2-1
(13) 教室の授業や実習など、高校での学習に積極的に取り組みたいと思うようになった。	5-4-3-2-1
(14) 高校で学んだ専門的な知識や技能は、将来の役に立つと思う。	5-4-3-2-1
(15) 社会のルールを守ることが大切だと思うようになった。	5-4-3-2-1
(16) 資格や検定の取得を積極的にチャレンジしたいと思うようになった。	5-4-3-2-1
(17) 将来は自分の専門性を活かして働きたいと思う。	5-4-3-2-1
(18) 周りのひとから自分が、どのように思われているのか、わかっているつもりだ。	5-4-3-2-1
(19) 自分では、自分自身のことがわかっているつもりだ。	5-4-3-2-1

図V-1 工業高校生における自己概念尺度

(14)である。「社会的価値志向性」因子 2 項目は、図 V-1 における項目(15), (16)である。「自己モニタ志向性」因子 3 項目は、図 V-1 における項目(17), (18)及び(19)である。これら計 19 項目に対しては、当てはまりの程度を 5 件法 (5:とても思う, 4:少し思う, 3:どちらでもない, 2:あまり思わない, 1:まったく思わない) で回答させた。

## 2.3 手続き

調査は、各高校のホームルーム(終礼)の時間を利用し約 15~20 分程度で、実施した。調査後、自己概念各 5 因子それぞれの平均値を基準に、それ以上の生徒を上位群、それ未満の生徒を下位群として、職業自己効力感構成因子群の平均値を比較した。これによって関連性の認められた因子の組み合わせを用いて自己概念各因子を説明変数、職業自己効力感構成因子群を基準変数とする重回帰分析を行い、両者の因果関係について重要な役割を果たす自己概念の下位因子を検討した。得られた重相関係数の有意性を確認した後、有意で絶対値が 0.10 以上の標準偏回帰係数をパス係数とするパス・ダイヤグラムを作成し、両尺度各因子間の因果関係を把握した。

## 3. 結果及び考察

### 3.1 工業高校生の自己概念と職業に対する自己効力感との関連性の探索

まず、工業高校生の自己概念と職業に対する自己効力感との関連性を探索するために、「工業高校生における自己概念」各因子それぞれの「自律志向性」因子の上位群 ( $n=274$ ), 下位群 ( $n=242$ ) の間で職業に対する自己効力感 2 因子の平均値を比較した(表 V-1)。その結果、「適応資質効力感」因子 ( $t_{(513)Welch}=13.42, p<0.01$ ), 「専門性効力感」因子 ( $t_{(514)}=10.08, p<0.01$ ) の平均値が共に上位群の方が下位群に比べて有意に高くなった。同様に、「キャリア志向性」因子の上位群 ( $n=270$ ), 下位群 ( $n=246$ ) の間で職業に対する自己効力感 2 因子の平均値を比較した(表 V-2)。その結果、「適応資質効力感」因子 ( $t_{(514)}=7.43, p<0.01$ ), 「専門性効力感」因子 ( $t_{(511)Welch}=6.88, p<0.01$ ) の平均値が共に上位群の方が下位群に比べて有意に高くなった。

次に、「専門的能力志向性」因子の上位群 ( $n=282$ ), 下位群 ( $n=234$ ) の間で職業に対する自己効力感 2 因子の平均値を比較した(表 V-3)。その結果、「適応資質効力感」因子 ( $t_{(514)}=8.17, p<0.01$ ), 「専門性効力感」因子 ( $t_{(514)}=11.19, p<0.01$ ) の平均値が共に上位群の方が下位群に比べて有意に高くなった。同様に、「社会的価値志向性」因子の上位群 ( $n=271$ ), 下位群 ( $n=245$ ) の間で職業に対する自己効力感 2 因子の平均値を比較した(表 V-4)。その結果、「適応資質効力感」因子 ( $t_{(514)}=9.07, p<0.01$ ), 「専門性効力感」因子 ( $t_{(514)}=11.86, p<0.01$ ) の平均値が共に上位群の方が下位群に比べて有意に高くなった。また、「自己モニタ志向性」因子の上位群 ( $n=251$ ), 下位群 ( $n=265$ ) の間で職業に対する自己効力感 2 因子の平均値を比較した(表 V-5)。

その結果、「適応資質効力感」因子 ( $t_{(514)}=4.08$ ,  $p<0.01$ ), 「専門性効力感」因子 ( $t_{(514)}=2.99$ ,  $p<0.01$ ) の平均値が共に上位群の方が下位群に比べて有意に高くなった。

表V-1 「自律志向性」因子と職業自己効力構成因子群との関連性

「自律志向性」因子		「適応資質効力感」因子	「専門性効力感」因子
上位群 ( $n=274$ )	平均	3.66	3.55
	<i>S. D.</i>	0.71	0.79
下位群 ( $n=242$ )	平均	2.88	2.88
	<i>S. D.</i>	0.61	0.71
		$t_{(513)Welch}=13.42$ **	$t_{(514)}=10.08$ **

\*\* :  $p < 0.01$

表V-2 「キャリア志向性」因子と職業に対する自己効力感との関連性

「キャリア志向性」因子		「適応資質効力感」因子	「専門性効力感」因子
上位群 ( $n=270$ )	平均	3.53	3.46
	<i>S. D.</i>	0.77	0.85
下位群 ( $n=246$ )	平均	3.05	2.99
	<i>S. D.</i>	0.69	0.72
		$t_{(514)}=7.43$ **	$t_{(511)Welch}=6.88$ **

\*\* :  $p < 0.01$

表V-3 「専門的能力志向性」因子と職業に対する自己効力感との関連性

「専門的能力志向性」因子		「適応資質効力感」因子	「専門性効力感」因子
上位群 ( $n=282$ )	平均	3.55	3.57
	<i>S. D.</i>	0.77	0.71
下位群 ( $n=234$ )	平均	3.00	2.84
	<i>S. D.</i>	0.75	0.77
		$t_{(514)}=8.17$ **	$t_{(514)}=11.19$ **

\*\* :  $p < 0.01$

表V-4 「社会的価値志向性」因子と職業に対する自己効力感との関連性

「社会的価値志向性」因子		「適応資質効力感」因子	「専門性効力感」因子
上位群 ( $n=271$ )	平均	3.56	3.59
	<i>S. D.</i>	0.72	0.74
下位群 ( $n=245$ )	平均	3.01	2.85
	<i>S. D.</i>	0.65	0.67
		$t_{(514)}=9.07$ **	$t_{(514)}=11.86$ **

\*\* :  $p < 0.01$

表V-5「自己モニタ志向性」因子と職業に対する自己効力感との関連性

「自己モニタ志向性」因子		「適応資質効力感」因子	「専門性効力感」因子
上位群 (n=251)	平均	3.57	3.45
	S.D.	0.78	0.84
下位群 (n=265)	平均	3.29	3.23
	S.D.	0.78	0.83
		$t_{(514)}=4.08$ **	$t_{(514)}=2.99$ **

\*\*:  $p < 0.01$

これらの結果から、工業高校生の自己概念は、5因子全てが職業自己効力感構成因子群と関連することが示唆された。そこで、全ての因子の組み合わせを用いて、より具体的な因果関係を把握するために、重回帰分析を行った。

### 3.2 工業高校生の自己概念と職業に対する自己効力感との因果関係

#### (1)「適応資質効力感」因子に対する影響力

「適応資質効力感」因子を基準変数、自己概念におけるそれぞれの5因子を説明変数とした重回帰分析を実施した(表V-6)。その結果、「自律志向性」因子 ( $R=0.73, \beta=0.28$ ) の有意な影響力を示し、同様に「専門的能力志向性」因子 ( $R=0.73, \beta=0.32$ ) 及び「社会的価値志向性」因子 ( $R=0.73, \beta=0.27$ ) においても影響力がそれぞれ有意であった。

表V-6 自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響

	標準偏回帰係数( $\beta$ )					重相関係数	分散分析
	自律志向性	キャリア志向性	専門的能力志向性	社会的価値志向性	自己モニター志向性		
「適応資質効力感」因子	0.28 **	0.04	0.32 **	0.27 **	0.04	$R=0.73$	$F_{(5,510)}=119.21$ **
「専門性効力感」因子	0.46 **	0.08 *	0.21 **	0.12 **	0.14 **	$R=0.75$	$F_{(5,510)}=133.09$ **

\*:  $p < 0.05$  \*\*:  $p < 0.01$

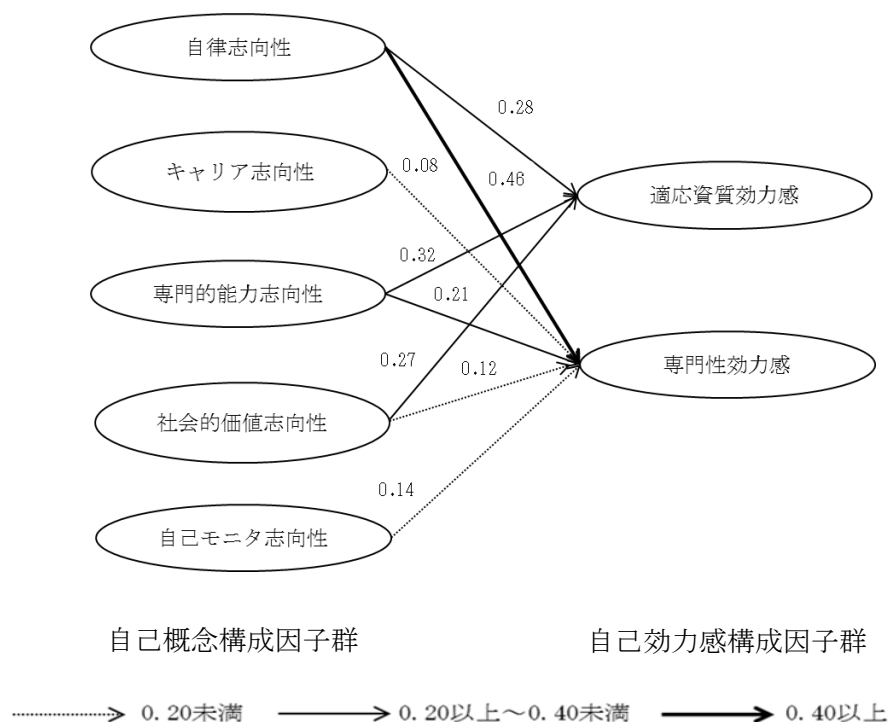
#### (2)「専門性効力感」因子に対する影響力

一方、「専門性効力感」因子に対しては、「自律志向性」因子 ( $R=0.75, \beta=0.46$ ) が有意な影響力を示した(表V-6)。同様に、「キャリア志向性」因子 ( $R=0.75, \beta=0.08$ ) , 「専門的能力志向性」因子 ( $R=0.75, \beta=0.21$ ) , 「社会的価値志向性」因子 ( $R=0.75, \beta=0.12$ ) , 及び「自己モニタ志向性」因子 ( $R=0.75, \beta=0.14$ ) がそれぞれ有意な影響力を示した。

### (3) 自己概念と職業に対する自己効力感との因果関係

そこで両因子において得られた標準偏回帰係数をパス係数とするパス・ダイアグラムを作成した（図V-2）。

これらのことから、「自律志向性」因子、「専門的能力志向性」因子などの自己概念が職業に対する自己効力感に対して比較的強い影響力を示すことが明らかとなった。言い換えれば、自律的な社会生活の実現に向けた意識や工業高校での専門分野における知識や技能に関する意識などが職業に対する自己効力感に有用な影響を与えていると考えられる。一方、「キャリア志向性」因子及び「自己モニタ志向性」因子の影響力は、相対的に弱い傾向にあることが示された。言い換えれば、進路指導啓発期にある工業高校生では、学校生活の中で培ってきた自己像の振り返りに基づくキャリアへの展望が、将来の職業に対する自信と適切に結び付けられていない実態が把握された。



図V-2 工業高校生の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響

### 3.3. 調査結果に対する対象校教員のインタビュー

上記の分析で把握された関連性について調査対象校の教員にインタビューを行った。その結果、次のようなコメントが得られた。

(1) 「自律志向性」因子及び「専門的能力志向性」因子の影響力の強さに関するコメント

自律的な社会生活の実現に向けた意識や工業高校での専門分野における知識や技能に関する意識などが職業に対する自己効力感に結びついていることに関して以下に示すコメントが得られた。

- ◇取得した資格を活かして、仕事に向けて頑張りたい生徒がいる。
- ◇漠然とした夢を具体的・現実的なプランに変えようとしている。
- ◇自分で課題を設定し、解決する方法を考えている。
- ◇これまで学んできたことを基本にして、より専門的な知識や技術を高めていこうと努力する生徒がいる。
- ◇実習に意欲的に取り組み、その内容から興味や関心を見出してきている。

(2) 「キャリア志向性」因子及び「自己モニタ志向性」因子の影響力の弱さに関するコメント

学校生活の中で培ってきた自己像の振り返りに基づくキャリアへの展望が、将来の職業に対する自信と適切に結び付けられていない実態に関して以下に示すコメントが得られた。

- ◇現実と将来の自己像が適切に結び付いていない状態で就職を果たそうとしている生徒がいる。
- ◇中には、やりたい仕事ではなく、できそうな仕事を選んでいる傾向がある。
- ◇具体的な進路実現を目指すために、自分の人生設計から職業を捉えられていない。(瞬間・瞬間で考えて、長いスパンで考えられていない。)
- ◇人生設計を度外視して、先輩ができているので、俺にもできるのではないかと考えられる。
- ◇指導の獲得を重視するがゆえに、彼らの人生設計が明確になっていない。

これらのコメントからは、3 学年時の進路啓発期から本格化する進路指導では、自律性や専門性などが高まっている生徒と自己の振り返りやキャリアへの意識が不十分な生徒との間に二極化が生じ初めていることが危惧される。特に、後者の生徒に対しては、高校卒業後の進路実現を目標にする現実対応型の進路指導にとどまることなく、入学段階の早期より系統的に将来を見通した自己実現に繋がる能力を育成することが求められる。

#### 4. 本章のまとめ

以上、本章では、進路啓発期にある工業高校生における自己概念が職業に対する自己効力感に及ぼす影響を検討した。その結果、本調査の条件下で以下の知見が得られた。

- 1) 進路啓発期にある工業高校生では、自己概念 5 因子が共に、職業に対する自己効力感の形成に寄与していることが把握された。特に、「自律志向性」因子、「専門的能力志向性」因子などの自己概念が職業に対する自己効力感に対して比較的強い影響力を示した。
- 2) これに対して、「キャリア志向性」因子と「自己モニタ志向性」因子の影響力は、相対的に弱



く、学校生活の中で培ってきた自己像の振り返りに基づくキャリアへの展望が、将来の職業に対する自信と適切に結び付けられていない実態に課題が見られた。

以上、第4、5章では、研究課題2への対処として、第2章で抽出した工業高校生の職業に対する自己効力感について、その形成要因を検討した。その結果、第4章ではキャリア成熟との因果関係が、第5章では自己概念との因果関係がそれぞれ認められた。その一方で、第4章では「専門性効力感」因子への影響力が限定的であったこと、第5章では「自己モニタ志向性」因子及び「キャリア志向性」因子の影響力が相対的に弱かったことに実践上の課題が見出された。

次章では、研究課題3の対処として、生徒の進路実現に果たす職業自己効力感構成因子群の役割について検討を進める。

## 第6章 工業高校生の職業に対する自己効力感と時間的展望体験との関連性

### 1. 目的

第6章からは、研究課題3への対処として、職業に対する自己効力感が進路指導に果たす役割を検討する。本章では、その第一歩として、工業高校生の職業に対する自己効力感が、進路実現に向けた将来展望の形成にどのような影響を及ぼしうるかについて検討することを目的とする。

第1章で述べた通り、生徒に進路に対する将来展望を持たせ、それに繋がる意識や行動を学校生活の中で、適切に促すためには、職業に対する自己効力感が生徒の過去・現在・未来という時間的な連続性の中で、将来展望の形成にどのような役割を果たしうるかについて把握する必要がある。白井(1994)<sup>59)</sup>はこれを時間的展望体験と呼んだ。そこで、本章では、工業高校生の職業に対する自己効力感と時間的展望体験との関連性を明らかにすることを試みる。

具体的には、白井(1994)<sup>59)</sup>の作成した時間的展望体験尺度（「目標指向性」因子、「希望」因子、「現在の充実感」因子、「過去受容」因子）を用い、これらの4因子を基準変数、職業自己効力感構成因子群を説明変数として、その影響力を検討する。

### 2. 研究の方法

#### 2.1 調査対象

O市内の公立工業高校3校計479名（男子471名、女子8名、1学年181名、2学年161名、3学年137名）を対象とした。学科の構成は機械系132名、電気系165名、化学系182名であった。有効回答数は468名（男子460名、女子8名、1学年179名、2学年158名、3学年131名）であった。有効回答率97.7%であった。なお、有効回答者の学科構成は機械系124名、電気系164名、化学系180名であった。

#### 2.2 測定尺度

測定尺度には、白井(1994)<sup>59)</sup>の作成した「時間的展望体験尺度」と第2章で作成した「工業高生の職業に対する自己効力感尺度」を準備した。「時間的展望体験尺度」には、将来の目標があるか、そのために何を準備しているかという「目標指向性」因子、自分の将来に希望が持てるか、将来を切り開く自信があるかという「希望」因子、現在の生活が充実しているか、現在の生活に満足しているかという「現在の充実感」因子、過去を受け入れることができるか、過去の出来事にこだわっていないかという「過去受容」の4因子が含まれている（18項目）。回答は、「5：あてはまらない」、「4：どちらかといえばあてはまらない」、「3：どちらともいえない」、「2：どちら

かといえあてはまる」,「1: あてはまる」の5件法とした。調査に使用した「時間的展望体験尺度」を図VI-1に示す。

また、同様に第2章で作成した「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」(11項目)は、「適応資質効力感」因子、「専門性効力感」因子の2因子で構成されている。回答は、「5: とても思う」,「4: 少し思う」,「3: どちらでもない」,「2: あまり思わない」,「1: まったく思わない」の5件法とした。加えて、本調査では第2章で用いた「学校生活に対する意識」3項目を準備した。これは、Lewin,K.(1954)<sup>53)</sup>が時間的展望体験という概念を将来展望と現在の行動と

**3. 次の質問にどのくらいあてはまるか○をつけてください。**

5 あてはまる

4 どちらかといえあてはまる

3 どちらともいえない

2 どちらかといえあてはまらない

1 あてはまらない

(1) 私には、だいたいの将来計画がある。	5-4-3-2-1
(2) 将来のためを考えて、今から準備していることがある。	5-4-3-2-1
(3) 私には、将来の目標がある。	5-4-3-2-1
(4) 私の将来は、漠然としていてつかみどころがない。	5-4-3-2-1
(5) 将来のことは、あまり考えたくない。	5-4-3-2-1
(6) 私の将来には、希望がもてる。	5-4-3-2-1
(7) 10年後、私はどうなっているのかよくわからない。	5-4-3-2-1
(8) 自分の将来は、自分できりひらく自信がある。	5-4-3-2-1
(9) 私には、未来がないような気がする。	5-4-3-2-1
(10) 毎日の生活が、充実している。	5-4-3-2-1
(11) 今の生活に、満足している。	5-4-3-2-1
(12) 毎日が、同じことの繰り返しで退屈だ。	5-4-3-2-1
(13) 毎日が、なんとなく過ぎていく。	5-4-3-2-1
(14) 今の自分は、本当の自分でないような気がする。	5-4-3-2-1
(15) 私は、自分の過去を受け入れることができる。	5-4-3-2-1
(16) 過去のことは、あまり思い出したくない。	5-4-3-2-1
(17) 私の過去は、つらいことばかりだった。	5-4-3-2-1
(18) 私は、過去の出来事にこだわっている。	5-4-3-2-1

図VI-1 時間的展望体験尺度 (白井 1994)

を関連づける心理的要因として位置付けていることに基づき、本調査の妥当性を確認するために使用するものである。「学校生活に対する意識」3項目への回答は、「4：とても思う」、「3：少し思う」、「2：あまり思わない」、「1：まったく思わない」の4件法とした。

### 2.3 手続き

調査は、各高校のホームルーム（終礼）の時間を利用し2008年9～10月に実施した。調査後、「学校生活に対する意識」の学年別推移傾向及び職業に対する自己効力感2因子との関連性を検討し、第2,3章で得られた知見との整合性を確認した。その上で、職業に対する自己効力感各因子を説明変数、時間的展望体験各因子を基準変数とする重回帰分析を行った。得られた重相関係数の有意性を確認した後、有意で絶対値が0.10以上の標準偏回帰係数をパス係数とするパス・ダイヤグラムを作成し、両尺度各因子間の因果関係について学年間の変容を把握した。

## 3 結果及び考察

### 3.1 調査対象者の状況

#### (1) 学校生活に対する意識の状況

まず、調査対象者の状況を把握するために、「学校生活に対する意識」3項目の学年別平均値を求めた（表VI-1）。学年間の差異について1元配置分散分析を行った結果、学年の主効果が有意であった（ $F_{(2,465)}=5.02$ ,  $p<0.01$ ）。LSD法による多重比較の結果、2学年に比べ、1・3学年の平均値が有意に高くなった。

表VI-1 学校に対する意識の学年別の実態

学年別		1学年 ( $n=179$ )	2学年 ( $n=158$ )	3学年 ( $n=131$ )	学年間の差異の検定
学校生活に対する意識	平均	2.91	2.69	2.91	$F_{(2,465)}=5.02$ **
	S. D.	0.71	0.72	0.70	3学年 $\simeq$ 1学年>2学年

\*\*：  $p<0.01$

#### (2) 職業に対する自己効力感の状況

次に、職業に対する自己効力感2因子の学年別平均値を求めた（表VI-2、表VI-3）。学年間の差異について1元配置分散分析を行った結果、「適応資質効力感」因子、「専門性効力感」因子共に学年の主効果が有意であった。LSD法による多重比較の結果、両因子共に1・2学年に比べ3学年が高い平均値を示した。

しかし、1学年と2学年においては、有意な差は見られなかった。これらの結果は、第2章と同様の傾向であった。

表VI-2 「適応資質効感」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =179)	2学年 ( <i>n</i> =158)	3学年 ( <i>n</i> =131)	学年間の差異の検定
「適応資質効力感」因子	平均	3.35	3.43	3.74	$F_{(2,463)}=16.57$ **
	<i>S.D.</i>	0.89	0.83	0.88	3学年>2学年≒1学年

\*\*:  $p<0.01$ 

表VI-3 「専門性効力感」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =179)	2学年 ( <i>n</i> =158)	3学年 ( <i>n</i> =131)	学年間の差異の検定
「専門性効力感」因子	平均	3.25	3.12	3.25	$F_{(2,463)}=8.47$ **
	<i>S.D.</i>	0.78	0.85	0.90	3学年>2学年≒1学年

\*\*:  $p<0.01$ 

## (3) 時間的展望体験の状況

同様に、時間的展望体験 4 因子の学年別平均値を求めた（表VI-4、表VI-5、表VI-6、表VI7）。学年間の差異について 1元配置分散分析を行った結果、4つの因子全てで学年の主効果が有意であった。LSD 法による多重比較の結果、「目標指向性」因子、「希望」因子、「過去受容」因子の 3 因子においてはいずれも 1・2 学年よりも 3 学年の平均値が有意に高かった。しかし、「現在の充実感」因子では、1・3 学年の平均値が 2 学年よりも有意に高くなる中弛み現象が見られた。

表VI-4 「目標指向性」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =179)	2学年 ( <i>n</i> =158)	3学年 ( <i>n</i> =131)	学年間の差異の検定
「目標指向性」因子	平均	2.92	3.03	3.64	$F_{(2,463)}=23.84$ **
	<i>S.D.</i>	0.95	0.96	0.95	3学年>2学年≒1学年

\*\*:  $p<0.01$ 

表VI-5 「希望」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =179)	2学年 ( <i>n</i> =158)	3学年 ( <i>n</i> =131)	学年間の差異の検定
「希望」因子	平均	2.97	3.07	3.14	$F_{(2,463)}=7.70$ **
	<i>S.D.</i>	0.60	0.56	0.51	3学年>2学年≒1学年

\*\*:  $p<0.01$ 

表VI-6 「現在の充実感」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =179)	2学年 ( <i>n</i> =158)	3学年 ( <i>n</i> =131)	学年間の差異の検定
「現在の充実感」因子	平均	3.15	2.86	3.20	$F_{(2,463)}=2.33$ **
	<i>S.D.</i>	0.91	0.82	0.85	3学年≒1学年>2学年

\*\*:  $p<0.01$

表VI-7 「過去受容」因子の学年別平均値

学年別		1学年 ( <i>n</i> =179)	2学年 ( <i>n</i> =158)	3学年 ( <i>n</i> =131)	学年間の差異の検定
「過去受容」因子	平均	3.89	3.06	3.39	$F_{(2,463)}=5.43$ **
	<i>S.D.</i>	0.90	0.83	0.84	3学年>2学年>1学年

\*\* :  $p<0.01$ 

## (4) 学校生活に対する意識と職業に対する自己効力感及び時間的展望体験との関連性

ここで、前述した「学校生活に対する意識」の平均値 2.50 以上の生徒を上位群 ( $n=236$ )、2.50 未満の生徒を下位群 ( $n=232$ ) として、職業に対する自己効力感 2 因子及び時間的展望体験 4 因子の平均値を比較した(表IV-8, 表IV-9)。前述した Lewin, K.(1954)<sup>53)</sup>の指摘に基づけば、学校生活に満足感を有する生徒ほど、時間的展望体験、職業に対する自己効力感共に高くなることが予測される。群間の差に対する  $t$  検定の結果、予測した通り「適応資質効力感」因子 ( $t_{(466)}=8.89$ ,  $p<0.01$ )、「専門性効力感」因子 ( $t_{(409)Welch}=10.09$ ,  $p<0.01$ ) 共に上位群が下位群に比べて有意に高くなった。また、時間的展望体験についても、「過去受容」因子 ( $t_{(466)Welch}=1.75$ ,  $n.s.$ ) を除く、「目標指向性」因子 ( $t_{(466)}=3.38$ ,  $p<0.01$ )、「希望」因子 ( $t_{(466)}=4.56$ ,  $p<0.01$ )、「現在の充実感」因子 ( $t_{(466)}=6.99$ ,  $p<0.01$ ) において群間に有意な差が認められた。このことから、本調査対象の生徒は概ね両尺度に適切に回答し、妥当な反応を示したことが確認された。以上の実態を持つ生徒の傾向として以下の分析を進めた。

表VI-8 学校に対する意識と職業に対する自己効力感との関連性

学校生活に対する意識		「適応資質効力感」因子	「専門性効力感」因子
上位群 ( $n=236$ )	平均	3.62	3.86
	<i>S.D.</i>	0.69	0.68
下位群 ( $n=232$ )	平均	3.04	3.11
	<i>S.D.</i>	0.72	0.90
$t$ 検定		$t_{(466)}=8.89$ **	$t_{(409)Welch}=10.09$ **

\*\* :  $p<0.01$ 

表VI-9 学校に対する意識と時間的展望体験との関連性

学校生活に対する意識		「目標指向性」因子	「希望」因子	「現在の充実感」因子	「過去受容」因子
上位群 ( $n=236$ )	平均	3.31	3.26	3.33	3.27
	<i>S.D.</i>	1.01	0.80	0.83	0.93
下位群 ( $n=232$ )	平均	3.00	2.92	2.79	3.13
	<i>S.D.</i>	0.97	0.81	0.84	0.80
$t$ 検定		$t_{(466)}=3.38$ **	$t_{(466)}=4.56$ **	$t_{(466)}=6.99$ **	$t_{(464)Welch}=1.75$ <i>n.s.</i>

\*\* :  $p<0.01$

## 3.2 職業に対する自己効力感が時間的展望体験に及ぼす影響

職業に対する自己効力感が時間的展望体験に及ぼす影響について、全体及び学年別に、時間的展望体験4因子を基準変数、職業に対する自己効力感2因子を説明変数とする重回帰分析を行った（表VI-10、表VI-11、表VI-12、表VI-13）。その結果、「過去受容」因子を除く「目標指向性」因子、「希望」因子、「現在の充実感」因子の3因子では、重相関係数  $R=0.23\sim0.72$  の有意な因果関係が示された。得られた有意な標準偏回帰係数をパス係数とするパス・ダイヤグラムを（図VI-2～図VI-5）に示す。

表VI-10 職業に対する自己効力感が「目標指向性」因子に及ぼす影響

「目標指向性」因子	標準偏回帰係数		重相関係数	分散分析
	適応資質効力感	専門性効力感		
1学年（ $n=179$ ）	0.21 *	0.12	$R=0.29$	$F_{(2,176)}=8.05$ **
2学年（ $n=158$ ）	0.12	0.15 †	$R=0.23$	$F_{(2,155)}=4.37$ *
3学年（ $n=131$ ）	0.19 †	0.13	$R=0.28$	$F_{(2,128)}=5.53$ **
全体（ $N=468$ ）	0.22 **	0.15 **	$R=0.32$	$F_{(2,465)}=27.02$ **

†:  $p<0.10$  \*:  $p<0.05$  \*\*:  $p<0.01$ 

表VI-11 職業に対する自己効力感が「希望」因子に及ぼす影響

「希望」因子	標準偏回帰係数		重相関係数	分散分析
	適応資質効力感	専門性効力感		
1学年（ $n=179$ ）	0.30 **	0.09	$R=0.37$	$F_{(2,176)}=12.88$ **
2学年（ $n=158$ ）	0.35 **	0.11	$R=0.41$	$F_{(2,155)}=15.50$ **
3学年（ $n=131$ ）	0.36 **	0.05	$R=0.72$	$F_{(2,128)}=11.23$ **
全体（ $N=468$ ）	0.35 **	0.09	$R=0.41$	$F_{(2,465)}=45.59$ **

\*\*:  $p<0.01$ 

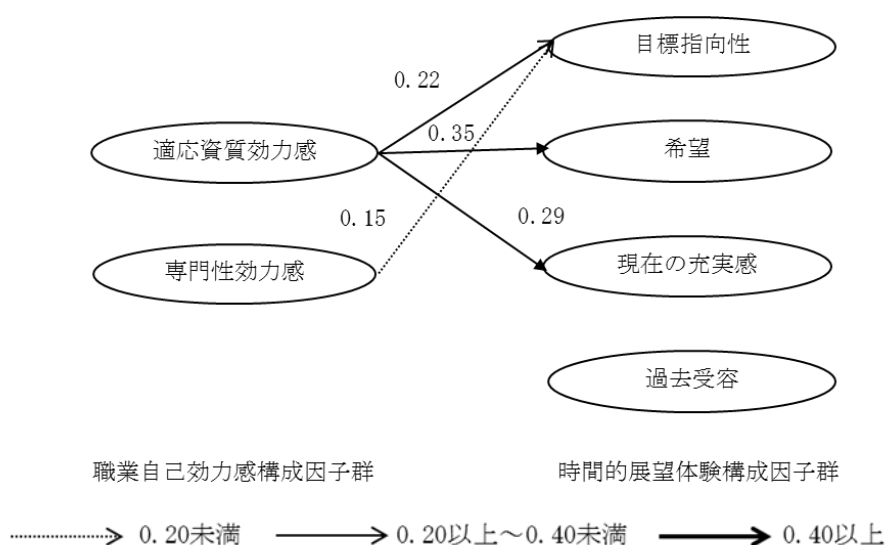
表VI-12 職業に対する自己効力感が「現在の充実感」因子に及ぼす影響

「現在の充実感」因子	標準偏回帰係数		重相関係数	分散分析
	適応資質効力感	専門性効力感		
1学年（ $n=179$ ）	0.24 **	0.04	$R=0.26$	$F_{(2,176)}=6.32$ **
2学年（ $n=158$ ）	0.26 **	0.08	$R=0.31$	$F_{(2,154)}=8.02$ **
3学年（ $n=131$ ）	0.36 **	0.10	$R=0.42$	$F_{(2,128)}=13.97$ **
全体（ $N=468$ ）	0.29 **	0.06	$R=0.33$	$F_{(2,465)}=27.93$ **

\*\*:  $p<0.01$

表VI-13 職業に対する自己効力感が「過去受容」因子に及ぼす影響

「過去受容」因子	標準偏回帰係数		重相関係数	分散分析
	適応資質効力感	専門性効力感		
1学年 (n=179)	-0.10	0.06	R=0.08	$F_{(2,176)}=0.62$
2学年 (n=158)	0.12	-0.01	R=0.12	$F_{(2,155)}=1.06$
3学年 (n=131)	-0.16	0.15	R=0.15	$F_{(2,128)}=1.44$
全体 (N=468)	-0.01	0.06	R=0.57	$F_{(2,465)}=0.70$



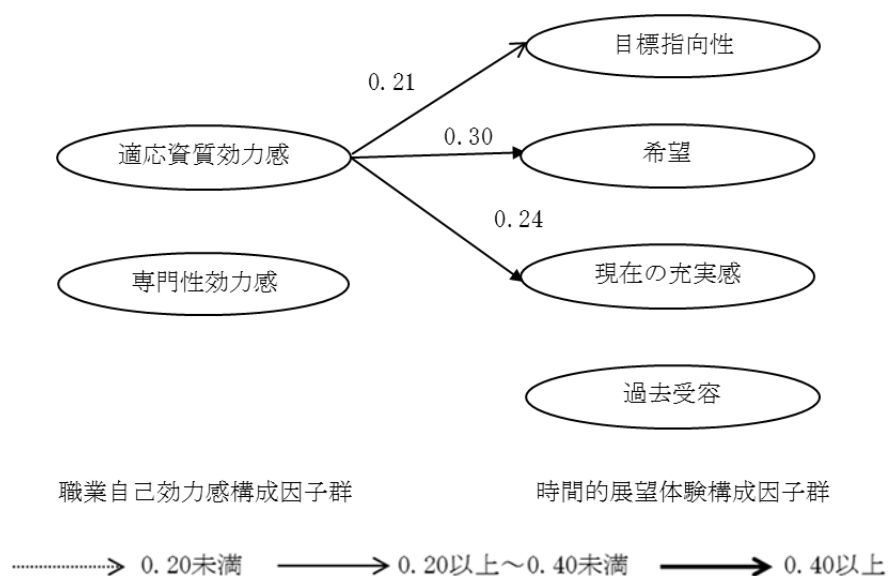
図IV-2 職業に対する自己効力感が時間的展望体験に及ぼす影響(全体)

これらのことから、職業に対する自己効力感は全体として現在から将来に向けた時間的展望体験の形成に重要な役割を果たしていることが示唆された。しかし、学年間でその因果関係には差異が認められた(図IV-3, 図IV-4, 図IV-5)。1学年では、「適応資質効力感」因子のみが「目標指向性」因子、「希望」因子、「現在の充実感」因子の3因子に因果していた。しかし、2学年では「目標志向性」因子に対する影響力が「適応資質効力感」因子から「専門性効力感」因子に遷移した。その後、3学年ではこの因果関係が再び「適応資質効力感」因子から示されるようになった。

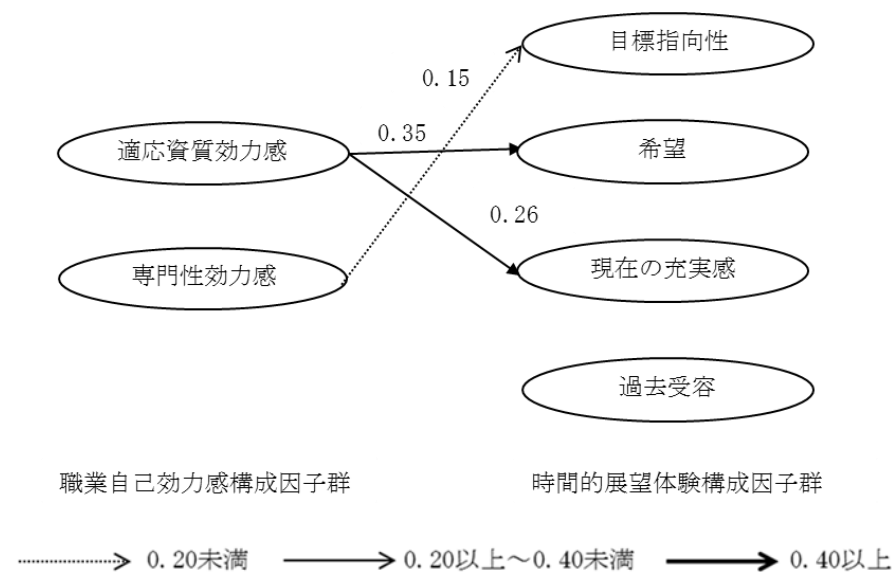
これは、工業高校では1学年から2学年にかけて授業科目の専門性が高まると共に、関連する資格の取得などへの指導が強化されるため、「専門性効力感」因子が「目標指向性」因子に影響したのではないかと考えられる。しかし、3学年になると授業科目の専門性がさらに深まること



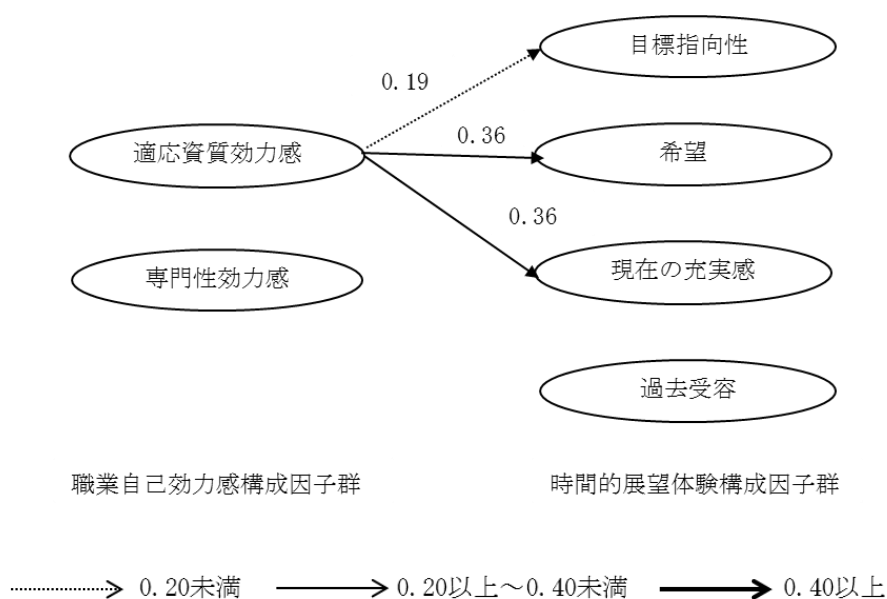
で、「専門性効力感」因子自体は1, 2学年時よりも高まるものの、必ずしも資格取得などのみで希望する進路が実現するわけでもなく、進路指導においても礼儀やあいさつ、社会人としての常識や自覚を促す指導が行われるため、希望する進路の実現、つまり目標への志向性がむしろ、これらを含む「適応資質効力感」因子と結び付きやすくなるのではないかと推察される。逆に言えば、進路選択を目前に控えた3学年において、工業に関する専門性の習得が必ずしも時間的な展望の形成に十分貢献しているとは言えない状況に、工業高校における進路指導の実践上の課題があると考えられる。



図IV-3 職業に対する自己効力感が時間的展望体験に及ぼす影響 (1 学年)



図IV-4 職業に対する自己効力感が時間的展望体験に及ぼす影響 (2 学年)



図IV-5 職業に対する自己効力感が時間的展望体験に及ぼす影響(3学年)

#### 4. 本章のまとめ

以上、本章では工業高校における生徒の職業に対する自己効力感が時間的展望体験に及ぼす影響を把握した。その結果、本調査の条件下で、以下の知見が得られた。

- (1) 工業高校生の職業に対する自己効力感は、「目標指向性」因子、「希望」因子、「現在の充実感」因子など、現在から将来に向けた時間的展望体験の形成に有意な影響力を示した。
- (2) これらの影響力には学年間の差異が認められ、「目標指向性」因子に対する影響力が1・3学年では「適応資質効力感」因子から、2学年では「専門性効力感」因子からそれぞれ認められた。

これらの結果から、工業高校生の時間的展望体験の形成には、工業に関わる専門性に依拠する自己効力感よりも、社会環境に適応するための基礎的な資質の形成に依拠する自己効力感が重要な役割を果たしており、工業高校における専門性の習得が必ずしも時間的な展望の形成に十分貢献しているとは言えない状況に実践上の課題が見出された。

次章ではさらに、就職を目前に控える3学年を対象に職業自己効力感構成因子群が進路に対する意思決定に果たす役割を縦断的に検討する。

## 第7章 工業高校3学年時における生徒の職業に対する自己効力感が進路不決断に及ぼす影響

### 1. 目的

本章の目的は、就職を目前に控える3学年を対象に職業自己効力感因子群が進路に対する意思決定に果たす役割を縦断的に検討する。

第1章で述べた通り、浦上は、「自信の無さ」という概念を、不決断を訴える者への介入の視座から、自己効力という観点から捉え直したものであると述べている。そして、自分の進路を決められないでいることを示す進路不決断と自己効力感との関連について今後の研究が極めて重要であることを指摘している。このことから本章では、進路を決定しなければならない工業高校3学年において職業に対する自己効感と進路不決断との関連性について把握することにした。

具体的には、清水(1990)<sup>42)</sup>の作成した進路不決断尺度（「職業決定不安」因子、「職業選択葛藤」因子、「職業相談希求」因子、「職業障害不安」因子、「職業外的統制」因子、「職業情報不足」因子、「職業モラトリアム」因子、「職業準備不安」因子）を用い、これらの8因子を基準変数、職業自己効力感構成因子群を説明変数として、その影響力を検討する。

### 2. 研究の方法

#### 2.1 調査対象

O市内の公立A工業高校3学年124名（男子121名、女子3名）を対象に調査を実施した。学科構成は機械系44名、電気系24名、工業化学系56名であった。有効回答数は116名（男子113名、女子3名）であった。有効回答率93.5%であった。なお、有効回答者の学科構成は機械系42名、電気系19名、化学系55名であった。

#### 2.2 調査時期

調査は、O市内公立A工業高校の3学年時の進路指導において、啓発期末の5月に第1回調査を、探索期末の7月に第2回調査を、受験期末の10月に第3回調査を、追指導期末の2月に第4回調査をそれぞれ縦断的に実施した。

#### 2.3 測定尺度

測定尺度には、第2章で作成した（図Ⅱ-2）①進路に対する意識（計3項目4件法）及び「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」（2因子計11項目、5件法）、②清水(1990)<sup>42)</sup>が作成した「進路不決断尺度」（8因子計40項目）をそれぞれ設定した。質問項目を図Ⅶ-1に示す。

## 第7章 工業高校生3学年時における生徒の職業に対する自己効力感が進路不決断に及ぼす影響

( ) 科 3 年 ( ) 番 名前 ( )

このアンケートは、工業高校に学ぶ生徒の皆さんの「職業」に対する意識を調査するものです。

次の質問にどのくらいあてはまるのかを○をつけてください。

このアンケートは学校の成績とはまったく関係ありません。

思ったとおりに回答してください。裏面もあるので注意して○をつけてください。

「5. よくあてはまる」 「4. ややあてはまる」 「3. どちらともいえない」

「2. ややあてはまらない」 「1. まったくあてはまらない」

- |   |           |
|---|-----------|
| 1. 将来の職業を決めることに対して不安がある。                          | 5-4-3-2-1 |
| 2. 将来、職業を決めることがうまくいかどうか心配である。                     | 5-4-3-2-1 |
| 3. どのようにして、職業を決めればよいかわからないので不安である。                | 5-4-3-2-1 |
| 4. 将来の職業を決めることが、ばくぜんとしていて不安である。                   | 5-4-3-2-1 |
| 5. 就職先を決めることのむずかしさを考えると不安になる。                     | 5-4-3-2-1 |
| 6. いろいろなことに興味があるので、どの職業を選んだらよいかわからない。             | 5-4-3-2-1 |
| 7. 魅力ある職業がいくつもあるので、将来の職業がたくさんあるので、どれにしたらよいかわからない。 | 5-4-3-2-1 |
| 8. 可能性のある職業がたくさんあるので、どれにしたらよいかわからない。              | 5-4-3-2-1 |
| 9. いろいろと考えすぎて自分に合う職業が、決まらない。                      | 5-4-3-2-1 |
| 10. ほかの人の意見がいろいろとあるので、自分に合う職業を決めることができない。         | 5-4-3-2-1 |
| 11. 職業選択の問題は重要なことなので、誰かと相談したい。                    | 5-4-3-2-1 |
| 12. 今まで重大な問題は親などと相談してきたので、職業選択の問題でも相談したい。         | 5-4-3-2-1 |
| 13. 自分一人で何かを決めた経験が少ないので、将来の職業について誰かと相談したい。        | 5-4-3-2-1 |
| 14. 将来の職業について、誰かと相談や話し合いをしたい。                     | 5-4-3-2-1 |
| 15. 自分に合う職業を教えてくれるような検査を受けたい。                     | 5-4-3-2-1 |
| 16. 将来の職業について希望はあるが、それに親が反対するのではないかと心配である。        | 5-4-3-2-1 |
| 17. 思わぬことで希望する職業につくことが、できないかもしれないと不安である。          | 5-4-3-2-1 |
| 18. 将来の職業について、友達と意見が違うのではないかと心配である。               | 5-4-3-2-1 |
| 19. 社会の変化や景気の変動が、希望する職業に大きな影響を与えるのではないかと不安である。    | 5-4-3-2-1 |
| 20. 何かの影響で希望する職業につくことが、できなくなるのではないかと心配になる。        | 5-4-3-2-1 |
| 21. 就職先の決定は、運や偶然によって決まることが多い。                     | 5-4-3-2-1 |
| 22. 就職先の決定は自分一人の力ではどうしようもない。                      | 5-4-3-2-1 |
| 23. 自分の努力や能力よりも、他からの影響で職業が決まることが多い。               | 5-4-3-2-1 |
| 24. 自分だけでは、職業は決定できない。                             | 5-4-3-2-1 |
| 25. 将来の職業のために積極的に努力するよりは、チャンスを待つ方がよい。             | 5-4-3-2-1 |
| 26. 自分の興味や関心がよくわからないので、将来の職業がきまらない。               | 5-4-3-2-1 |
| 27. 自分の能力や適性がよくわからないので、将来の職業がきまらない。               | 5-4-3-2-1 |
| 28. 就職した後での職業生活のようすがよくわからないので、将来の職業がきまらない。        | 5-4-3-2-1 |
| 29. 進路を決めるために必要な具体的な情報がないので、将来の職業が決まらない。          | 5-4-3-2-1 |
| 30. 自分のことについても、職業のことについても、よくわからないので、将来の職業が決まらない。  | 5-4-3-2-1 |
| 31. いままであまり職業のことを真剣に考えたことがない。                     | 5-4-3-2-1 |
| 32. 将来のことはわからないから、職業のことは考えたくない。                   | 5-4-3-2-1 |
| 33. 将来の職業のことを真剣に考えたことがない。                         | 5-4-3-2-1 |
| 34. 将来、職業につかずに、好きなことをしたい。                         | 5-4-3-2-1 |
| 35. 職業のことなど考えずに、自分の好きなことに集中したい。                   | 5-4-3-2-1 |
| 36. 具体的な将来の職業を考えているが、採用試験が心配である。                  | 5-4-3-2-1 |
| 37. 将来の職業についての希望は明確なのだが、採用試験には自信がない。              | 5-4-3-2-1 |
| 38. 希望する職業はあるが、これが最良なのかどうか不安である。                  | 5-4-3-2-1 |
| 39. 希望する職業において、十分に活躍できるかどうか不安である。                 | 5-4-3-2-1 |
| 40. 職業選択のための準備が、十分であったかどうか不安である。                  | 5-4-3-2-1 |

図VII-1 進路不決断尺度 (清水 1990)

年度当初の生徒の進路に対する意識を把握するために、第2章で作成した「進路に対する意識」は、「あなたは将来、工業高校の専門分野に関係する仕事に就きたいと思いますか。」、「あなたは将来、就きたい職業や仕事などすでに決めていますか。」、「あなたは、高校卒業後の進路に向けて、自分なりに努力をしていますか。」の3項目を設定した。はてはまりの程度を、(4:とても思う, 3:少し思う)と回答した生徒を進路意識上位群に、(2:あまり思わない, 1:まったく思わない)と回答した生徒を進路意識下位群とした。

進路不決断に関する質問は項目の文頭「将来の職業や就職先」とした。本尺度は「職業決定不安」因子5項目、「職業選択葛藤」因子5項目、「職業相談希求」因子5項目、「職業障害不安」因子5項目、「職業外的統制」因子5項目、「職業情報不足」因子5項目、「職業モラトリウム」因子5項目、「職業準備不安」因子5項目の計40項目で構成される。「職業決定不安」因子6項目は、図2の項目(1), (2), (3), (4)及び(5)である。「職業選択葛藤」因子5項目は、図2の項目(6), (7), (8), (9)及び(10)である。「職業相談希求」因子5項目は、図2の項目(11), (12), (13), (14)及び(15)である。「職業障害不安」因子5項目は、図2の項目(16), (17), (18), (19)及び(20)である。そして、「職業外的統制」因子5項目は、図2の項目(21), (22), (23), (24)及び(25)である。「職業情報不足」因子5項目は、図2の項目(26), (27), (28), (29)及び(30)である。「職業モラトリウム」因子5項目は、図2の項目(31), (32), (33), (34)及び(35)である。「職業準備不安」因子5項目は図2の項目(36), (37), (38), (39)及び(40)である。これら計40項目に対しては、当てはまりの程度を5件法(5:よくあてはまる, 4:ややあてはまる, 3:どちらともいえない, 2:ややあてはまらない, 1:まったくあてはまらない)で回答させた。

## 2.4 調査の手続き

調査は、2011年(5月, 7月, 10月)～2012年(2月)に実施した。このうち、2.3で述べた進路に対する意識3項目は、5月の第1回調査でのみに実施した。「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」と「進路不決断尺度」は、4回全ての調査において実施した。

## 3. 結果及び考察

### 3.1 調査対象者の状況

#### (1) 年度当初の進路に対する意識の状況

まず、調査対象者の状況を把握するために、進路に対する意識3項目の進路意識上位・下位群の比率を求めた結果を表Ⅶ-1に示す。「自分が就きたい職業や仕事をすでに決めている。」と回答した上位群の割合が58.6%, 「専門分野に関する仕事に就きたい。」と回答した上位群の割合が50.0%, そして、「卒業後の進路の実現に向かって努力している」と回答した上位群の割合が62.9%

となった。

このことから、調査対象校3学年の年度当初の進路に対する意識としては、これからの自己の進路選択、実現に向けて少なくとも、6割程度の生徒が、自分なりに将来像を描き、自分なりに努力していると感じている実態が把握された。しかし、逆に言えば、3学年の年度当初にもかかわらず約4割程度の生徒は、自己の進路に対する展望を十分に描けていない実態が把握された。

表Ⅶ-1 年度当初の進路に対する意識の状況

進路に対する意識	上位群	下位群
専門分野に関する仕事に就きたいと思う。	58人 50.0%	58人 50.0%
自分がつきたい職業や仕事をすでに決めている。	68人 58.6%	48人 41.4%
卒業後の進路の実現に向けて自分なりに努力している。	73人 62.9%	43人 37.1%

## (2) 最終的な進路選択の状況

年度末に集計した最終的な進路については、学科ごとの専門性に繋がる関連業種に進路が決定した生徒と非関連業種に進路が決定した生徒、進学する生徒に分類された。関連業種に進路決定した生徒（以下、関連業種就職群）が全体の49人（42.2%）と最も多く、非関連業種に進路決定した生徒（以下、非関連業種就職群）は、37人（31.9%）、そして、進学した生徒（以下、進学群）は24人（20.7%）、未定6人（5.2%）となった。このような実態を持つ生徒の反応として以下の分析を進めた。

### 3.2 進路指導のプロセスにおける進路不決断の状況

#### (1) 進路不決断の推移

3学年時の進路指導のプロセスにおける進路不決断の状況を縦断的に集計した結果を表Ⅶ-2に示す。進路不決断尺度全体では、5月調査の平均値が3.04となった。その後、7月調査でも進路不決断の平均値は3.01と5月調査とほぼ同じ値であった。しかし、10月調査では、進路不決断の平均値が2.36と低下した。そして、各生徒の進路決定を経た2月調査の段階では、進路不決断の平均値が2.19と最も低くなった。これらのことから、3学年時1年間における生徒の進路不決断は、年度当初には高いものの、進路指導のプロセスを経ることで、10月前後以降に水準が低下する傾向を示すことが示唆された。これは、10月前後には、具体的な採用試験が終了し、内定が出される時期であるためであると考えられる。逆に言えば、工業高校生は、出願や受験をしても、具体的な就職先が内定する直前まで、少なからず進路不決断の状態を呈していると考えられる。

表Ⅶ-2 進路不決断構成因子群の推移

	5月調査		7月調査		10月調査		2月調査	
	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
「職業決定不安」因子	3.57	1.05	3.52	1.15	2.67	1.32	2.26	1.28
「職業選択葛藤」因子	3.02	1.09	2.83	1.13	2.19	1.17	2.08	1.13
「職業相談希求」因子	3.06	1.07	3.19	0.98	2.46	1.21	2.27	1.16
「職業障害不安」因子	2.89	0.90	2.84	1.02	2.23	1.07	2.12	1.07
「職業外的統制」因子	2.96	0.81	2.96	0.90	2.46	1.18	2.35	1.15
「職業情報不安」因子	2.96	1.29	3.01	1.21	2.25	1.21	2.00	1.16
「職業モラトリウム」因子	2.50	1.14	2.53	1.11	2.11	1.11	2.16	1.19
「職業準備不安」因子	3.17	1.17	3.10	1.07	2.49	1.25	2.25	1.26
月別平均値	3.04	1.06	3.01	1.07	2.36	1.19	2.19	1.18

## (2) 最終的な進路と進路不決断との関連性

次に、進路未定の生徒を除いた最終的な進路別3群(関連業種就職群、非関連業種就職群、進学群)における「進路不決断」の月別平均値とそれらを合算した通年の平均値について1元配置分散分析を行なった結果を表Ⅶ-3に示す。月別では、7月調査において「職業決定不安」因子群の主効果が有意であった( $F_{(2,107)}=3.41, p<0.05$ )。LSD法による多重比較の結果、平均値に $\text{関連業種就職群} \approx \text{非関連業種就職群} > \text{進学群}$ の順序性が認められた。また、「職業情報不足」因子においても同様に7月で群の主効果が有意であった( $F_{(2,107)}=4.30, p<0.05$ )。LSD法による多重比較の結果、平均値に $\text{関連業種就職群} \approx \text{非関連業種就職群} > \text{進学群}$ の順序性が認められた。

これらのことから、進路指導のプロセスにおいて探索期である7月の段階では、進学した生徒の進路不決断状況が就職した生徒よりも低い傾向が示された。言い換えれば、就職した生徒は、7月頃に職業に関する情報不足を感じ、職業を決定することに不安を抱きやすい傾向があると考えられる。しかし、7月頃は、就職求人票の受付が開始され、生徒は求人票を閲覧する機会が設

表Ⅶ-3 最終的な進路における「進路不決断」因子の7月の平均値

		関連業種就職	非関連業種就職	進学	群間の差の検定
		( $n=49$ )	( $n=37$ )	( $n=24$ )	
「職業決定不安」因子	平均	3.67	3.68	2.00	$F_{(2,107)}=3.41*$ 関連業種>進学 非関連業種>進学
	S.D.	1.02	1.03	1.34	
「職業情報不足」因子	平均	3.22	3.21	2.42	$F_{(2,107)}=4.30*$ 関連業種>進学 非関連業種>進学
	S.D.	0.96	1.29	1.32	

\*:  $p<0.05$

定されはじめる時期である。したがって、実際問題としては、必ずしも職業に関する情報不足に陥っているとは考えにくい。これはむしろ、進学に比べてライフイベントとしての重要性の高い就職に際し、生徒がより慎重になるためではないかと考えられる。

### (3) 職業に対する自己効力感と進路不決断との関連性

次に、3学年時の1年間における職業に対する自己効力感の推移を集計した。その結果、「適応資質効力感」因子では平均値が(3.15～3.30)の範囲で、「専門性効力感」因子では平均値が(2.98～3.19)の範囲でそれぞれ推移した。これらの平均値は、変動の幅が狭く、3学年時の1年間で極端な変容は生じていない傾向が示唆された。

そこで「適応資質効力感」因子の月別による平均値を合算し、通年の平均値 3.25 を基準に、それ以上の生徒を上位群 ( $n=57$ )、3.25 未満の生徒を下位群 ( $n=59$ ) として、進路不決断構成因子群の月別および通年での平均値を比較した結果を表VII-4に示す。月別平均値ではいずれの調査時期においても群間に有意な差は認められなかった。しかし、通年の平均値では、「職業決定不安」因子 ( $t_{(114)}=2.78, p<0.01$ )、「職業障害不安」因子 ( $t_{(114)}=2.06, p<0.05$ )、「職業情報不足」因

表VII-4 「適応資質性効力感」因子と進路不決断との関連性

「適応資質効力感」因子		上位群 ( $n=57$ )	下位群 ( $n=59$ )	月別差異の検定
「職業決定不安」因子	平均	2.80	3.23	$t_{(114)}=2.78$ **
	S. D.	0.82	0.83	
「職業選択葛藤」因子	平均	2.44	2.62	$t_{(114)}=1.18$ n. s.
	S. D.	0.77	0.85	
「職業相談希求」因子	平均	2.81	2.80	$t_{(114)}=0.07$ n. s.
	S. D.	0.77	0.74	
「職業障害不安」因子	平均	2.39	2.67	$t_{(114)}=2.06$ *
	S. D.	0.70	0.75	
「職業外的統制」因子	平均	2.61	2.77	$t_{(114)}=1.15$ n. s.
	S. D.	0.66	0.81	
「職業情報不足」因子	平均	2.35	2.80	$t_{(114)}=2.82$ **
	S. D.	0.81	0.89	
「職業モラトリアム」因子	平均	2.09	2.59	$t_{(114)}=3.16$ **
	S. D.	0.86	0.83	
「職業準備不安」因子	平均	2.70	2.88	$t_{(114)}=1.23$ n. s.
	S. D.	0.81	0.75	

\*:  $p<0.05$  \*\*:  $p<0.01$



子 ( $t_{(114)}=2.82, p<0.01$ ), 「職業モラトリウム」因子 ( $t_{(114)}=3.16, p<0.01$ ) の平均値が共に上位群の方が下位群に比べて有意に進路不決断状態が低いことが示された。このことから, 「適応資質効力感」因子は, 年間を通じて次第に進路不決断の低減に寄与していくものと考えられる。

「専門性効力感」因子の月別による平均値を合算し, 通年の平均値 3.12 を基準に, それ以上の生徒を上位群 ( $n=56$ ), 3.12 未満の生徒を下位群 ( $n=60$ ) として, 進路不決断構成因子群の通年平均値を比較した結果を表VII-5に示す。月別平均値では5月調査において上位群の「職業モラトリウム」因子の平均値が下位群よりも有意に低くなった(上位群平均値:2.37, 下位群平均値:2.89,  $t_{(114)}=2.65, p<0.05$ )。また, 通年平均値では, 「職業決定不安」因子 ( $t_{(114)}=2.70, p<0.01$ ), 「職業障害不安」因子 ( $t_{(114)}=2.06, p<0.05$ ), 「職業情報不足」因子 ( $t_{(114)}=2.36, p<0.05$ ), 「職業モラトリウム」因子 ( $t_{(114)}=2.68, p<0.01$ ) の平均値が, 共に上位群の方が下位群に比べて有意に進路不決断状態が低いことが示された。

表VII-5「専門性効力感」因子と進路不決断との関連性

「専門性効力感」因子		上位群 ( $n=56$ )	下位群 ( $n=60$ )	月別差異の検定
「職業決定不安」因子	平均	2.80	3.22	$t_{(114)}=2.70$ **
	S. D.	0.81	0.85	
「職業選択葛藤」因子	平均	2.41	2.64	$t_{(114)}=1.52$ <i>n. s.</i>
	S. D.	0.72	0.88	
「職業相談希求」因子	平均	2.70	2.91	$t_{(114)}=1.50$ <i>n. s.</i>
	S. D.	0.70	0.79	
「職業障害不安」因子	平均	2.38	2.66	$t_{(114)}=2.06$ *
	S. D.	0.66	0.78	
「職業外的統制」因子	平均	2.58	2.80	$t_{(114)}=1.60$ <i>n. s.</i>
	S. D.	0.67	0.79	
「職業情報不足」因子	平均	2.38	2.76	$t_{(114)}=2.36$ *
	S. D.	0.78	0.93	
「職業モラトリウム」因子	平均	2.12	2.55	$t_{(114)}=2.68$ **
	S. D.	0.84	0.87	
「職業準備不安」因子	平均	2.67	2.90	$t_{(114)}=1.58$ <i>n. s.</i>
	S. D.	0.75	0.80	

\*:  $p<0.05$  \*\*:  $p<0.01$

このことから、通年の傾向として、「適応資質効力感」因子と同様に「専門性効力感」因子の高い生徒の方が、「職業決定不安」因子、「職業障害不安」因子、「職業情報不足」因子、「職業モラトリウム」因子などの進路不決断状態が低いことが示唆された。

また、これらのことから、工業高校3学年時の進路指導においては、生徒の職業に対する自己効力感を適切に高めることが、進路選択時の進路不決断状態を回避する上で重要な役割を果たすことが示唆された。しかし、前述したように職業に対する自己効力感自体は、3学年時の1年間で大きな変容は認められていない。言い換えれば、職業に対する自己効力感は、3学年の段階では既に生徒の内的な傾向性として安定した状態になっている可能性があり、その水準を高めることは3学年時の段階では難しいと思われる。したがって、3学年時の進路指導に向けて、1～2学年時の段階で十分に生徒の職業に対する自己効力感を高めておくことが重要である。特に、3学年時進級直後の4～5月頃に位置する進路指導の啓発期では、「専門性効力感」因子の低い生徒の方が進路決定を先延ばしにしようとする「職業モラトリウム」因子の傾向が強いことが示されたことから、2学年時の段階で十分に「専門性効力感」因子を高める指導を展開することが重要ではないかと考えられる。

#### 4. 本章のまとめ

本章では、工業高校の3学年を事例に、進路指導のプロセスにおける生徒の職業に対する自己効力感と進路不決断との関連性を縦断的な視点から検討した。その結果、本調査条件の範囲内で以下の知見が得られた。

- 1) 本調査対象の工業高校3学年の進路不決断は、具体的な進路を決定する10月前後に水準の低下する傾向が示唆された。これに対して職業自己効力感構成因子群の推移は、変動の幅が狭く、3学年時の1年間で極端な変容は生じていない傾向が示された。
- 2) 進路不決断と職業に対する自己効力感との関連性を検討したところ、通年の傾向として「適応資質効力感」因子と「専門性効力感」因子の両因子の水準の高い生徒の方が、「職業決定不安」因子、「職業障害不安」因子、「職業情報不足」因子、「職業モラトリウム」因子などの進路不決断状態が低い傾向が示唆された。

これら本章の結果は、本調査の範囲で限定的に捉える必要があるものの、とりわけ、①進路不決断状況の回避には、職業に対する自己効力感を十分に高めておく指導が必要であること、②職業に対する自己効力感は、3学年時に至る1・2学年時の段階で十分に形成を図る必要のあること、③特に、進路指導啓発期の「職業モラトリウム」因子の傾向を回避するためには、「専門性効力感」因子の醸成が必要であること、この3点は今後の進路指導に向けた重要な示唆を与えるものと考えられる。

## 第7章 工業高校生3学年時における生徒の職業に対する自己効力感が進路不決断に及ぼす影響

以上、第6章及び7章では、工業高校生の職業に対する自己効力感が進路指導に果たす役割について、時間的展望体験と進路不決断との関連性を検討した。第8章及び第9章では、これまでに得られた知見を踏まえて、O市内の公立A工業高校の具体的な進路指導の中でのアクション・リサーチを実施することとする。

## 第8章 工業高校生の職業に対する自己効力感に着目した進路指導の実践

### 1. 目的

本研究ではこれまで、第2～3章において工業高校生の職業に対する自己効力感の構成因子と企業が求める人材像との関連性を明らかにした。第4～5章では、職業に対する自己効力感の形成要因としてキャリア成熟と自己概念の果たす役割を明らかにした。また、第6～7章では、進路指導のプロセスにおける時間的展望体験や進路不決断に及ぼす職業に対する自己効力感の影響を明らかにした。これらの各章で得られた知見から、工業高校における進路指導では、工業高校生自身に自らの職業に対する自己効力感と企業が求める人材像との関連性を捉えさせた上で、その形成要因であるキャリア成熟と自己概念形成の支援を適切に進路指導のプロセスに取り入れることによって、時間的展望体験を促し進路不決断を低減できる可能性があると考えられる。そのためには、進路指導の改善方策として、次の3点を指摘することができる。第一に、第4章で示されたキャリア成熟との関連性より、3学年全体を通してキャリアへの関心性、計画性、自律性の向上を図るように進路指導の全体構成の重要性である（以下、方策①）。第二に、第3章で示された企業が求める人材像との関連性から、特に「専門性効力感」因子の因果関係が確認された2学年において関連業種の企業が求める人材像を適切に生徒に把握させる取り組みの重要性である（以下、方策②）。そして、第三に、第5章で示された自己概念との関連性より、3学年における「自律志向性」を促す取り組みの重要性である（以下、方策③）。

そこで本章からは、O市内の公立A工業高校における3学年時の進路指導のプロセスに上記方策①～③を取り入れ、その効果を縦断的に検討することとした。このうち第8章では、上記を踏まえた3学年時の進路指導のどの方策が職業自己効力感構成因子群の向上に及ぼす効果を検討する。具体的には、3学年時の1年間における職業に対する自己効力感の変容について年4回（4～5月、啓発期）、（6～7月、探索期）、（9～10月、受験期）、（2月、追指導期）調査の実施及び3学年時前半（進路選択決定までの期間）の進路指導の取り組みを振り返った意識について、進路指導の取り組みを説明変数、職業自己効力感構成因子を基準変数として、その影響力を検討する。

### 2. 研究の方法

#### 2.1 調査対象

O市内の公立A工業高校3学年124名（男子121名、女子3名）を対象とした。学科構成は機械系44名、電気系24名、化学系56名であった。有効回答数は116名（男子名113、女子3名）であった。有効回答率93.5%であった。なお、学科構成は機械系42名、電気系19名、化学

系 55 名であった。調査対象校の授業の様子を図Ⅷ-1 に示す。



図Ⅷ-1 学校における授業の様子

## 2.2 進路指導のデザイン

### (1) 3 学年全体を通してキャリアへの関心性、計画性、自律性の向上を図る進路指導の構成

方策①に対処するために、3 学年全体を通してキャリアへの関心性、計画性、自律性の向上を図るように進路指導全体を構成し、進路指導年間行事における見直しの必要性があると考えた。まず、1 学年では、入学直後の早期段階における新入生にこれからの工業高校 3 年間の学習経験を通じ、自分の将来を見据えた進路設計に必要な情報から視野を広げさせ、興味や関心を深める「進路講話」を 4 月中旬に取入れた。その後、6 月中旬に行われる保護者を対象とした「進路説明会（PTA）」では、近年の進路状況や就職活動についての流れなどの説明を行なった。そして、7 月上旬には、アンケート調査結果（5 月上旬実施）から希望する職種にグループ分けされた講話型による「職業理解ガイダンス」を行った。10 月中旬には、希望する生徒に「進学説明会」が予定されており、11 月下旬には、1 学年向けの「進路だより配布」、12 月中旬には期末考査の最終日に「1 学年進路模試」を組み立てた。

2 学年では 7 月下旬に、アンケート調査（5 月上旬実施）から希望する職種にグループ分けされた体験型による「職業理解ガイダンス」、夏期休業期間の 7 月下旬～8 月上旬に掛けて、自らの

学習内容や将来の進路に関連した就業体験（1～5日程度の現場実習）となるインターンシップ（実習日誌の記入や事前指導、事後指導）を行った。10月下旬には、具体的な学部・学科に対するアンケート調査（9月中旬実施）から希望する大学や専門学校関係者を招いた「進学説明会」、11月上旬には、この時点で就職を考えている生徒には具体的な仕事内容や職種など、進学を考える生徒には具体的な学部や学科などの「進路希望調査」、11月中旬には、外部の講師を招き「進路講話」を行った。

## （2）関連業種の企業が求める人材像を生徒に把握させる進路指導の取り組み

方策②への対処として、「専門性効力感」因子の因果関係が確認された2学年において、12月上旬の期末考査の最終日に「2学年進路模試」、そして、12月中旬～下旬に関連業種の企業が求める人材像の講話として「企業説明会」の取り組みを入れた。この取り組みに対して、機械系、電気系、化学系ごとに分かれ、それぞれの関連企業の現場で実際に活躍している者を外部講師として招き、企業に求められる人材像や高校生活の間に何をやって置くべきであるか、それが就職してからどのようなことに役に立つのかなど、在籍中に就職するにあたり自己のキャリアに計画的な姿勢が持てるように構成した。企業説明会の様子を図Ⅷ-2に示す。



図Ⅷ-2 企業説明会の様子



3 学年では、4～5 月（以下、啓発期）に以下の取り組みを実施した。まず、年度当初 4 月上旬～中旬に掛けて 3 学年向け「進路だより」を配布し、再度の「進路希望調査」を行うとともに、生徒が自分のこれまでの性格・適性・能力・興味に対して自己理解を深めるための「レディネス・テスト」を行った。5 月中旬に自己実現に役立てる「進路の手引き」を配布した。6 月上旬に「第 1 回進路模試」、希望生徒を対象とした「進学説明会」、ハローワーク管轄地域の担当者による「進路講話」、「進路だより配布」を行った。

### (3)3 学年における「自律志向性」を促す進路指導の取り組み

3 学年では、「キャリア自律性」や「自律志向性」など、進路実現に対する生徒の自律性を高める(方策③)ために、6 月中旬～7 月上旬に掛けて実際の就職面接を想定した学校長による「面接模擬」や、職業現場で働く卒業生を学校に招き交流する「卒業生を囲む会」などを取り入れた。そして、「第 2 回進路模試」、7 月下旬に「第 3 回進路模試」、「第 1 回進路相談」を行った(以下、探索期)。8 月上旬には、就職試験に対応するための外部講師による自己 PR 講習会や履歴書講習会を含めた「SPI 講習」、「ビジネスマナー講習会」、そして、生徒の最終希望となる受験先の調整を諮る「進路調整会議」、8 月下旬に外部講師による「面接講習会」を行った。9 月上旬に「応募書類発送準備」から「応募書類発送」、9 月中旬に「就職受験開始」となっている（以下、受験期）。11 月以降に掛けて、一部の生徒に進学に関する入試関連の指導、内定した生徒に対する追指導（「就職内定礼状発送」、「もうすぐあなたは、社会人 1 年生」の配布）などを行った（以下、追指導期）。以上の進路指導に関する行事を整理して表Ⅷ-1 に示す。

## 2.3 測定尺度

測定尺度には、①学校に対する意識(計 8 項目 4 件法)②3 学年時の進路行指導における意識（計 9 項目 4 件法）、③第 2 章で作成した「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」（2 因子計 11 項目、5 件法）をそれぞれ設定した。

### (1)学校に対する意識に関する項目

年度当初の生徒状況を知るために、今現在の学校に対する意識 8 項目（第 2 章・表Ⅱ-1）を把握するとして、（授業に対する意識 2 項目）「あなたは、工業の科目が好きですか。」、「あなたは、工業の専門科目が理解できていますか。」や、（学校生活に対する意識 3 項目）「あなたは、現在の学校に満足していますか。」、「あなたの、部活動や生徒会などの課外活動は充実していますか。」、「あなたの学校での友人関係は良好ですか。」及び（進路に対する意識 3 項目）「あなたは将来、工業高校の専門分野に関係する仕事に就きたいと思いますか。」、「あなたは将来、就きたい職業や仕事などすでにきめていますか。」、「あなたは、高校卒業後の進路に向けて、自分なりに努力をしていますか。」などの項目をそれぞれ 5 月調査に設定した。

表Ⅷ-1 A工業高校における進路行事

	1 年	2 年	3 年
4月			進路だより配布
			進学説明会アンケート調査
			進路希望調査
	進路講話		
5月			レディネス・テスト
	求人依頼発送		
	職業理解ガイダンスアンケート調査		
	進路のてびき配布		
	進路指導講習会(職員)		
6月			第1回 進路模試
			進学説明会
			進学資料配布会
	進路説明会(PTA)		
			進路だより配布
7月			進路講話(ハローワーク)
			校長面接模擬
			卒業生を囲む会
	求人票受付開始		
			第2回 進路模試
8月	職業理解ガイダンス(講話)		
	統一用紙配布		
			第3回 進路模試
	職業理解ガイダンス(体験)		
	インターンシップ参加		応募前職場見学
9月			第1回 進路相談
			SPI講習会
			第2回 進路相談
			ビジネスマナー講習会
	進路調整会議		
10月			面接講習会
			応募書類発送準備
			応募書類発送
	進学説明会アンケート調査		
			就職試験開始
11月			専門学校入試開始
	進学説明会		
			大学・短大推薦入試開始
	進路だより配布	進路希望調査	第1回 合同求人説明会
	進路講話		
12月	就職内定礼状発送		
			進路だより配布
	進路模試		
	企業説明会		
1月			求職者登録説明会
2月			第2回 合同求人説明会
	進学資料配布会		
			進路だより配布



## (2) 進路指導の取り組みに対する意識に関する項目

次に、進路指導の取り組みに対する意識項目として、時期ごとに実施される進路指導の反応や意識を把握する9項目として、「進路希望調査が自分の進路意識を高めた。」、「進路の手引きを活用したことが進路意識を高めた。」、「面接模擬をしたことが自分の進路意識を高めた。」、「卒業生を囲む会が自分の進路意識を高めた。」、「第1・2回進路模試試験が自分の進路意識を高めた。」、「SPI講習会が自分の進路意識を高めた。」、「求人票閲覧が自分の進路意識を高めた。」、「ビジネスマナー講習会が自分の進路意識を高めた。」、「第3回進路模試試験が自分の進路意識を高めた。」などの項目を設定した。それぞれの項目に対して当てはまりの程度を4件法（4:とても思う, 3:少し思う, 2:あまり思わない, 1:まったく思わない）で回答させた。

## 2.4 手続き

調査は、2011年にホームルーム（終礼）の時間を利用し約15～20分程度で、進路指導のプロセスにおける啓発期末の5月に第1回調査を、探索期末の7月に第2回調査を、受験期末の10月に第3回調査を、追指導期末の2月に第4回調査をそれぞれ縦断的に実施した。

調査後、まず、「授業に対する意識」、「学校生活に対する意識」、「進路に対する意識」及び職業自己効力感構成因子群についてそれぞれの平均値を求め、調査対象者の実態を把握した。次に、3学年時に実施された進路指導の取り組みに対する意識について調査を実施した。そして、進路指導の取り組みに対する意識項目を説明変数、職業自己効力感構成因子を基準変数とする重回帰分析を行った。

## 3. 結果及び考察

### 3.1 学校に対する意識について

まず、調査対象者における現在の状況を把握するために、授業、学校生活、進路に対する意識による項目別の平均値を求めた。その結果、平均値の高かった項目については「友人関係は良好」（3.40）と「学校生活に満足」（3.10）であった。その後、（4.とても思う, 3.少し思う）と回答した生徒は肯定型に位置づけ、それに対して、（2.あまり思わない, 1.まったく思わない）と回答した生徒は否定型に位置づけて調査対象者全体による割合を把握した（表Ⅷ-2）。

授業に対する意識については、「工業科目の授業が好きである。」と回答した上位群の割合が45.7%、「工業科目の授業が理解できる。」と回答した上位群の割合が58.6%となった。また、学校生活に対する意識については、「学校生活に満足している。」と回答した上位群の割合が74.1%、「部活や生徒会などの課外活動は充実している。」と回答した上位群の割合が41.4%、そして、「学校での友人関係は良好である。」と回答した上位群の割合が91.4%となった。進路に対する意識

については、「自分の就きたい職業や仕事をすでに決めている。」と回答した上位群の割合が 58.6%, 「専門分野に関する仕事に就きたい。」と回答した上位群の割合が 50.0%, そして, 「卒業後の進路の実現に向かって努力している。」と回答した上位群の割合が 62.9%となった。

このことから, 本調査対象の生徒は, 現在学校生活において特に不満がある生徒の割合は低いことがわかった。このような実態を持つ生徒の反応として以下の分析を進めた。

表Ⅷ-2 年度当初による学校に対する意識

授業に対する意識	肯定群		否定群	
工業科目の授業が好きである。	53人	45.7%	63人	54.3%
工業科目の授業が理解できる。	68人	58.6%	48人	41.4%
学校生活に対する意識	肯定群		否定群	
学校生活に満足している。	86人	74.1%	30人	25.9%
部活や生徒会などの課外活動は充実している。	48人	41.4%	68人	58.6%
学校での友人関係は良好である。	106人	91.4%	10人	8.6%
進路に対する意識	肯定群		否定群	
専門分野に関する仕事に就きたいと思う。	58人	50.0%	58人	50.0%
自分がつきたい職業や仕事をすでに決めている。	68人	58.6%	48人	41.4%
卒業後の進路の実現に向けて自分なりに努力している。	73人	62.9%	43人	37.1%

### (1) 進路に対する意識の変容

3 学年時に実施された進路指導の取組みに対する意識の変容を集計した。年度当初の 5 月では, 「自分が就きたい職業や仕事をすでに決めている。」(4 件法) の平均値は (2.31) と必ずしも高くはなかった。その後, 7 月までに行われた「進路希望調査」や「面接模擬」, 「卒業生を囲む」, 「進路模擬試験」などの取り組みでは, 進路に対する意識 (4 件法) の平均値が (3.16~3.83) と上昇した (表Ⅷ-3)。しかし, 7~10 月までに行われた「SPI 講習」, 「ビジネスマナー講習会」, 「進路模擬試験」, 実際の就職試験などの行事では進路に対する意識の平均値が (2.17~2.59) と低下した (表Ⅷ-4)。10~11 月には, 就職試験の結果が発表され, 各生徒の進路が決定していった。1 年間の進路指導を振り返った 2 月の調査では進路に対する意識の平均値は (2.58~2.87) と上昇に転じた (表Ⅷ-5)。これらのことから, 3 学年時 1 年間における生徒の進路に対する意識は, 具体的な進路を決定する 10 月前後に水準の低下する V 字型の傾向を示すことが示唆された。これは, 具体的な就職試験に直面する状況の中で, その不安感などから一時的に意識の低下が生じたのではないかと考えられる。

表Ⅷ-3 7月調査による進路指導の取り組みに対する意識

進路指導の取り組みに対する意識（7月調査）		
進路希望調査をしたことで自分の進路意識が高まった。	平均	3.16
	<i>S. D.</i>	1.20
進路の手引きを活用することで進路意識が高まった。	平均	3.21
	<i>S. D.</i>	1.10
模擬面接をしたことで進路意識が高まった。	平均	3.83
	<i>S. D.</i>	1.08
卒業生を囲む会が進路意識を高めた。	平均	3.45
	<i>S. D.</i>	1.23
第1・2回進路模擬試験が進路意識を高めた。	平均	3.16
	<i>S. D.</i>	1.10

表Ⅷ-4 10月調査による進路指導の取り組みに対する意識

進路指導の取り組みに対する意識（10月調査）		
S P I 講習会が進路意識を高めた。	平均	2.17
	<i>S. D.</i>	1.09
求人票閲覧が進路意識を高めた。	平均	2.59
	<i>S. D.</i>	1.08
ビジネスマナー講習会が進路意識を高めた。	平均	2.47
	<i>S. D.</i>	1.07
第3回進路模試試験が進路意識を高めた。	平均	2.40
	<i>S. D.</i>	1.06

表Ⅷ-5 2月調査による進路指導の取り組みに対する意識

進路指導の取り組みに対する意識（2月調査）		
進路希望調査をしたことで自分の進路意識が高まった。	平均	2.78
	<i>S. D.</i>	0.91
進路の手引きを活用することで進路意識が高まった。	平均	2.77
	<i>S. D.</i>	0.90
模擬面接をしたことで進路意識が高まった。	平均	2.87
	<i>S. D.</i>	0.98
卒業生を囲む会が進路意識を高めた。	平均	2.58
	<i>S. D.</i>	0.98
第1～3回進路模擬試験が進路意識を高めた。	平均	2.67
	<i>S. D.</i>	0.96

## (2) 職業自己効力感構成因子群の変容

3 学年時の 1 年間における職業に対する自己効力感構成の因子群の推移を集計した（5 件法）。その結果、「適応資質効力感」因子では平均値が（3.15～3.30）の範囲で、「専門性効力感」因子では平均値が（2.98～3.19）の範囲でそれぞれ推移した。これらの平均値は、変動の幅が狭く、3 学年時の 1 年間で極端な変容は生じていない傾向が示唆された（表Ⅷ-6）。

表Ⅷ-6 1年間における職業に対する自己効力感の推移

	5月調査		7月調査		10月調査		2月調査	
	平均	S. D.	平均	S. D.	平均	S. D.	平均	S. D.
「適応資質効力感」因子	3.15	0.83	3.26	0.90	3.30	0.94	3.30	1.00
「専門性効力感」因子	2.98	0.77	3.17	0.99	3.19	0.99	3.15	1.01

### 3.2 最終的な進路の状況

最終的な進路について、学科ごとの専門性に繋がる関連分野に就職が決定した生徒と非関連業種に就職が決定した生徒、進学する生徒に分類した。その結果、関連業種に就職決定した生徒は全体の42.2%を占め、非関連業種に就職決定した生徒は31.9%、そして進学する生徒は20.7%、未定5.2%の割合になった。

#### (1) 最終的な進路状況別に見た「適応資質効力感」因子の推移

進路未定の生徒を除き、最終的な進路状況別に「適応資質効力感」因子の月別平均値とそれらを合算した通年の平均値について群間の差に対する1元配置分散分析を行った（表Ⅷ-7）。その結果、関連業種に進路決定した生徒、非関連業種に進路決定した生徒、進学の生徒との間には差異は認められなかった。

表Ⅷ-7 最終的な進路状況の「適応資質効力感」因子の推移

「適応資質効力感」因子		関連業種就職 ( <i>n</i> = 49)	非関連業種就職 ( <i>n</i> = 37)	進学 ( <i>n</i> = 24)	月別差異の検定
5月	平均	3.18	3.00	3.37	$F_{(2, 107)}=1.43$
	S. D.	0.76	0.91	0.92	<i>n. s.</i>
7月	平均	3.43	3.08	3.21	$F_{(2, 107)}=1.63$
	S. D.	0.75	1.04	0.96	<i>n. s.</i>
10月	平均	3.34	3.21	3.33	$F_{(2, 107)}=0.22$
	S. D.	0.88	1.16	0.82	<i>n. s.</i>
2月	平均	3.27	3.46	3.13	$F_{(2, 107)}=0.87$
	S. D.	0.96	0.99	1.08	<i>n. s.</i>
通年	平均	3.30	3.19	3.26	$F_{(2, 107)}=0.32$
	S. D.	0.61	0.75	0.70	<i>n. s.</i>

## (2) 最終的な進路状況別に見た「専門性効力感」因子の推移

同様に、**「専門性効力感」** 因子の最終的な進路状況別の推移を検討した(表Ⅷ-8)。その結果、7月において群間の差が有意であった ( $F_{(2,107)}=4.29, p<0.05$ )。LSD 法による多重比較の結果、平均値に関連業種就職>非関連業種>進学 の順序性が認められた。また、通年でも群間の差が有意であった ( $F_{(2,107)}=4.97, p<0.01$ )。LSD 法による多重比較の結果、 関連業種就職>非関連業種就職>進学 において差異が認められた。このことから、関連業種に就職した生徒の方が「専門性効力感」因子が高いことが示唆された。

表Ⅷ-8 最終的な進路状況の「専門性効力感」因子の推移

「専門性効力感」因子		関連業種就職 ( <i>n</i> =49)	非関連業種就職 ( <i>n</i> =37)	進学 ( <i>n</i> =24)	月別差異の検定
5月	平均	3.13	2.88	2.93	$F_{(2,107)}=1.22$
	<i>S. D.</i>	0.70	0.82	0.88	<i>n. s.</i>
7月	平均	3.46	2.99	2.82	$F_{(2,107)}=4.29^*$
	<i>S. D.</i>	0.85	1.16	0.91	関連業種>非関連業種 関連業種>進学
10月	平均	3.42	3.07	2.91	$F_{(2,107)}=2.60$
	<i>S. D.</i>	0.95	1.18	0.72	<i>n. s.</i>
2月	平均	3.33	3.22	2.78	$F_{(2,107)}=2.51$
	<i>S. D.</i>	0.88	1.11	1.02	<i>n. s.</i>
通年	平均	3.33	3.04	2.86	$F_{(2,107)}=4.97^{**}$
	<i>S. D.</i>	0.63	0.71	0.56	関連業種>非関連業種 関連業種>進学

\*:  $p<0.05$  \*\*:  $p<0.01$ 

## 3.3 進路指導の取り組みが職業自己効力感構成因子群に及ぼす影響

2月調査では、3学年時前半(進路選択決定までの期間)の進路指導の取り組みを振り返った意識について調査した。その平均値を用い、進路指導の取り組みが職業に対する自己効力感に及ぼす影響について重回帰分析を行った。その結果、いずれの因子においても有意な重相関係数  $R=0.486\sim 0.487$  が得られた(表Ⅷ-9)。そこで、得られた有意な標準偏回帰係数を用いたパス・

表Ⅷ-9 進路指導の取り組みが職業に対する自己効力感に及ぼす影響

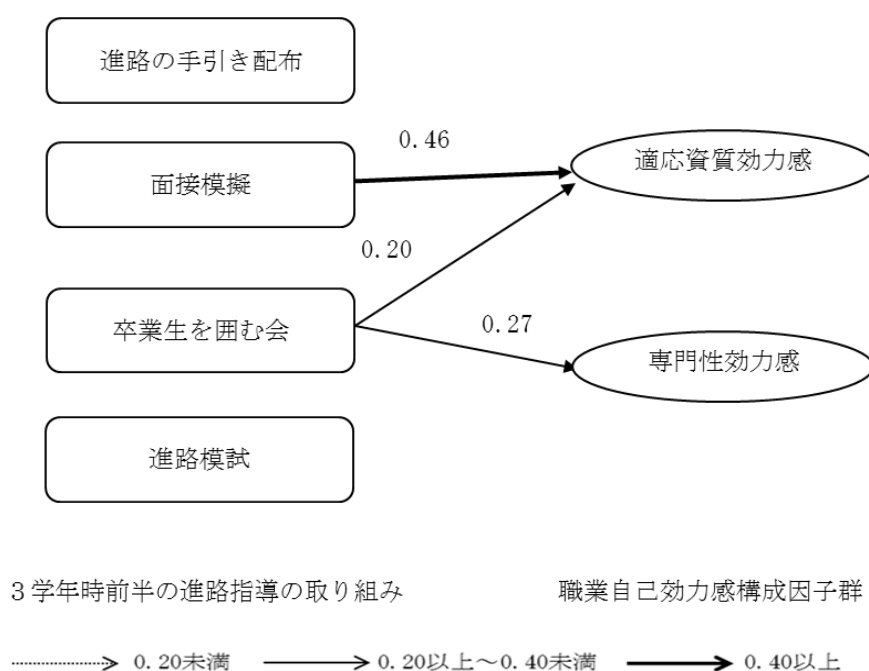
2月調査	標準偏回帰係数					重相関係数	分散分析
	進路希望調査	進路の手引き	模擬面接	卒業生を囲む会	進路模擬試験		
「適応資質効力感」因子	-0.04	-0.23	0.46 **	0.20 †	-0.16	$R=0.49$	$F_{(6,109)}=5.65^{**}$
「専門性効力感」因子	-0.18	-0.12	0.22	0.27 *	0.01	$R=0.49$	$F_{(6,109)}=5.63^{**}$

\*:  $p<0.05$  \*\*:  $p<0.01$

ダイアグラムを作成した（図Ⅷ-3）。その結果、「適応資質効力感」因子に対する「面接模擬」と「卒業生を囲む会」の有意な影響力が認められた。「専門性効力感」因子に対しても「卒業生を囲む会」の影響力が有意であった。

これらのことから、3 学年時 1 年間の進路指導においては職業に対する自己効力感の形成に「面接模擬」、「卒業生を囲む会」などの取り組みが重要な役割を果たしていることが示唆された。

卒業生を囲む会の様子を図Ⅷ-4 に示す。



図Ⅷ-3 3 学年時前半進路指導の取り組みが職業に対する自己効力感に及ぼす影響

#### 4. 本章のまとめ

本章では、第 4～5 章で得られた知見に基づいて設定した 3 つの方策を O 市内の公立 A 工業高校の進路指導に取り入れ、アクション・リサーチを実施した。その結果、本実践の条件下において以下の知見を得られた。

- 1) 本実践の工業高校 3 学年の進路に対する意識は、具体的な進路を決定する 10 月前後に水準の低下する V 字型の傾向を示すことが示唆された。





図Ⅷ-4 卒業生を囲む会の様子

- 2) 本実践の工業高校3学年時の自己効力感の推移傾向は、変動の幅が狭く、3学年時の1年間で極端な変容は生じていない傾向が示唆された。
- 3) 本実践の工業高校3学年時の「専門性効力感」因子の最終的な進路状況別の推移は、関連業種に就職した生徒の方が「専門性効力感」因子が高いことが示唆された。
- 4) 本実践の工業高校3学年の1年間の進路指導においては、職業に対する自己効力感の形成に「面接模擬」、「卒業生を囲む会」などの取り組みが重要な役割を果たしていることが示唆された。

これらの結果は、アクション・リサーチとしての事例の範囲で限定的に捉える必要があるものの、本章で設定した3つの方策は、3年間の進路指導において生徒の職業に対する自己効力感の形成に一定の効果があることが示された。

次章ではさらに、同実践の後、卒業後・就職した卒業生を対象に、関連業就職者及び非関連業種就職者の群別に、職業に対する自己効力感に関する追跡調査を実施することとした。

## 第9章 実践校における職業に対する自己効力感の就職後の変容に関する事例検討

### 1 目的

本章の目的は、在籍時に形成した職業に対する自己効力感が工業高校を卒業した後にどのように変容しているかを事例検討することである。調査対象は、第8章の進路指導を経て就職した卒業生とする。第8章では、第4～5章で得られた知見に基づく3つの方策の効果を確認した。しかし、学校生活から職業生活へと環境が変化すれば、生徒の在籍時に形成した将来展望や自信がそのまま維持されるとは限らず、その他の多様な要因とも連動して、職業的な不適応に陥ってしまう可能性もある。とは言え、すべての卒業生を対象とした追跡調査は困難である。そこで本章では、前述した先行研究における長谷川・佐藤(2002)<sup>109)</sup>の検討により、就職後に自らの学習経験を有用と捉えやすい工業化学科の生徒を対象に、職業自己効力感構成因子群の卒業後の変容という観点から着目することとした。

具体的には、工業化学科の卒業生15名を対象に、就職後5～7ヶ月の段階で、第2章で作成した「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」及び半構造化面接によるインタビューを実施することとした。その際、関連業種就職者及び非関連業種就職者の群別に検討することとした。

### 2 研究の方法

#### 2.1 調査対象者

第8章と同O市内の公立A工業高校工業化学科15名（2011年3月卒業の男子13名、女子2名）を対象とした。これらの対象者は、調査対象校の一つのクラスの卒業生であり、担任教員からの面談依頼に対し、承諾した者である。これらの対象者のうち、専門分野の工業化学に関連する業種に就職した者を関連業種就職群、関連しない業種に就職した者を非関連業種就職群と呼ぶことにする。各対象者の就職した業種は次の通りである（表IX-1）。

#### 2.2 質問紙による調査項目

卒業目前の在籍時に①3年間の高校生活に対する項目として工業高校の学校生活の満足度を把握するために、「あなたは、A工業高校での3年間の学校生活に満足していますか。」の質問項目を設定1とした。当てはまりの程度を4件法、（4:とても思う, 3:少し思う）と回答した生徒は肯定群に位置づけ、それに対して、（2:あまり思わない, 1:まったく思わない）と回答した生徒は否定群に位置づけて、調査対象者全体による割合を把握した。また、「どんなところが満足（不満足）でしたか。」を具体的に自由記述も設定した。



表IX-1 調査対象者の就職した業種と主な職務内容

関連業種就職群	就職した業種	主な職務内容
生徒		
男子 A	製造業	化学薬品の詰め替え・抜缶
男子 B	製造業	化学薬品の製造・充填
男子 C	製造業	石鹼の製造
男子 D	製造業	LCP樹脂の製造
男子 E	製造業	化学薬品の濃度調整
男子 F	専門技術	塗料の特性試験・分析検査
男子 G	専門技術	滴定・染色検査
女子 H	専門技術	剥離強度・ゴム加硫検査
非関連業種就職群	就職した業種	主な職務内容
生徒		
男子 I	医療・福祉	介護職
男子 J	医療・福祉	介護職
男子 K	製造業	各種部品のパイプ加工
男子 L	製造業	食料原料の仕分け
男子 M	製造業	金属加工
男子 N	サービス業	整流器の維持管理・施設点検
女子 O	サービス業	梱包・出荷・事務処理

また、②4月からの新しい就職先（職場）での生活についてどのような気持ちを持っているかを把握するために、「あなたは、4月からの新しい就職先（職場）での生活についてどのような気持ちを持っていますか。」の質問項目を設定2とした。同様に、当てはまりの程度を4件法、（4:とても頑張りたいと思う、3:少し頑張りたいと思う）と回答した生徒は肯定群に位置づけ、それに対して、（2:あまり頑張りたいと思わない、1:まったく頑張りたいと思わない）と回答した生徒は否定群に位置づけて調査対象者全体による割合を把握した。また、「どうして頑張りたい（頑張らない）か」を具体的に自由記述も設定した。

そして、③第2章で作成された「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」を設定した（図Ⅱ-2）。これら計11項目に対しては、当てはまりの程度を5件法（5:とても思う、4:少し思う、3:どちらでもない、2:あまり思わない、1:まったく思わない）で回答させた。

## 2.3 調査の手続き

卒業目前となる3月に「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」11項目を実施し、就職後5ヶ月以上経過した8月から10月に個別面談による半構造化面接及び職業経験を経た現時点での「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」の調査を実施した。

## 2.4 半構造化面接の手続き

質問項目を準備した上で個別面談による回答を得る半構造化面接を実施した。面接ではまず、

調査対象者に次に示す質問項目を回答した後、そのように回答した理由などをインタビューで聞き取りを行った。

(インタビューの項目)

- ①今の仕事の概要(仕事の中身)について。
- ②今の仕事は楽しいか。
- ③今の仕事の中身として、自分で「やる気」になれるのはどんな時。
- ④今の仕事が「いや」になる時、「苦しい」と思うことはどんなこと。
- ⑤仕事に対する自信が高まったこと、自分にはできそうだと感じたことはあるか。それはどんなこと。
- ⑥高校の時に勉強したり、身に付けたことで、仕事に今、一番役に立っていると思えることはどんなこと。
  - 在籍時に仕事の自信はあったか。
  - 「今でも自信があること。」 その理由、経験。
  - 「今は自信がなくなったこと。」 その理由、経験。
  - 在籍時に仕事の自信はなかった。
  - 「就職後、自信がわいたこと。」 その理由、経験。
  - 「今でも自信がないこと。」 その理由、経験。
- ⑦これから先、今の仕事についてどう考えているのか。
  - 自分の将来に対する夢。
  - 不安についてどう考えている。
- ⑧高校生(後輩)に一言。どんなことを大切にして高校生活を過ごしてほしいか。(あるいは、もう一度、高校生に戻れるなら、どんなことを大切にしたいか。)

### 3 結果及び考察

#### 3.1 調査対象者の状況

##### (1) 3年間の高校生活に対する意識

まず、卒業目前までの学校生活とこれからの進路に対してどのような意識を有していたか設問2の質問項目の回答を集計した。学校生活に対する意識では、「3年間の学校生活に満足しているか」に対して肯定的な回答が86.7%と高く評価した。また、自由記述には、「友達が増え、良い先生がいたから」、「良いところに就職できたから」、「行事が多く毎日が楽しめたから」などの回答が多かった。このことから、本調査対象者となる工業化学科の生徒は、特に不満なくわりと安定した学校生活を送っていた実態であることが把握された。

また、設問3で設定した卒業後の新しい進路に対する意識では、「4月からの新しい就職先（職場）での生活について頑張りたい気持ちを持っているか」の質問項目に対しては、肯定的な回答が93.3%と極めて高かった。自由記述には、「自分で決めた仕事だから」、「親を少しでも楽にさせたいと思うから」、「頑張らないと会社に適応しないから」などの回答であった。このことから、本調査対象者の工業化学科の生徒は、これからの新しい環境となる職場生活において、前向きな意識を有していたと判断される（表IX-2）。

表IX-2 学校生活の意識とこれからの進路に対する意識

	肯定群	否定群
A工業高校の3年間での学校生活に満足している。	13人 (86.7%)	2人 (13.3%)
4月からの新しい就職先（職場）での生活に頑張りたいと思っている。	14人 (93.3%)	1人 (6.7%)

## (2) 職業自己効力感因子群の状況

次に、設問3に設定した職業に対する自己効力感を在籍時と就職後で比較した(5件法)。その結果、「適応資質効力感」因子は、在籍時の平均値(3.32)だったものが、就職後の職業生活時では平均値(4.09)と有意な伸びを示した( $t_{(14)}=11.47, p<0.01$ )。また、「専門性効力感」因子についても、在籍時の平均値(3.55)だったものが、就職後の職業生活時では平均値(3.95)と有意な伸びを示した( $t_{(14)}=11.07, p<0.01$ )（表IX-3）。

表IX-3 全体における職業に対する自己効力感の変容

	在籍時		就職後		群間の差の検定
「適応資質効力感」因子	平均	<i>S. D.</i>	平均	<i>S. D.</i>	$t_{(14)}=11.47^{**}$
	3.32	0.84	4.09	0.58	
「専門性効力感」因子	平均	<i>S. D.</i>	平均	<i>S. D.</i>	$t_{(14)}=11.07^{**}$
	3.55	0.80	3.95	0.66	

\*\*：  $p<0.01$

## (3) 関連業種就職群と非関連業種就職群の差異

この傾向について、調査対象者を関連業種就職群(8人)と非関連業種就職群(7人)に分け、それぞれの在籍時と就職後での職業に対する自己効力感の変容について検討した。その結果、関連業種就職群(8人)の「適応資質効力感」因子は、顕著に高まることなく在籍時の水準が維持される傾向が示された( $t_{(7)}=1.40, n.s.$ )。しかし、「専門性効力感」因子については、有意な伸びを示した( $t_{(7)}=8.92, p<0.01$ )（表IX-4）。非関連業種就職群(7人)においては、「適応資質効力感」因子は、有意な伸びを示した( $t_{(6)}=8.01, p<0.01$ )。

また、「専門性効力感」因子についても、有意な伸びを示した ( $t_{(6)}=5.88, p<0.01$ ) (表IX-5)。これらの結果から、本調査対象者の卒業生は、職業に対する自己効力感のうち、「専門性効力感」因子は、業種を問わず在籍時よりも実際の職業生活を経験しながら、なお向上していくことが示唆された。これらは、関連業種就職群が職場において、より専門的知識が要求され、それに適応しているものだと考えられる。一方、非関連業種就職群においても、直接的な知識や技能が職務内容と直接、関連していなくとも、専門科目における学習経験の有用性を感じていることが示唆された。上記の実態を持つ生徒の反応として、半構造化面接の結果について検討を進める。

表IX-4 関連業種就職群における職業に対する自己効力感の変容

	在籍時		就職後		群間の差の検定
「適応資質効力感」因子	平均 3.56	S. D. 0.61	平均 4.05	S. D. 0.52	$t_{(7)}=1.40$ n. s.
「専門性効力感」因子	平均 3.75	S. D. 0.59	平均 4.16	S. D. 0.46	$t_{(7)}=8.92$ **

\*\*:  $p<0.01$

表IX-5 非関連業種就職群における職業に対する自己効力感の変容

	在籍時		就職後		群間の差の検定
「適応資質効力感」因子	平均 3.05	S. D. 1.03	平均 4.14	S. D. 0.67	$t_{(6)}=8.01$ **
「専門性効力感」因子	平均 3.31	S. D. 0.99	平均 3.71	S. D. 0.81	$t_{(6)}=5.88$ **

\*\*:  $p<0.01$

### 3.2 職業に対する自己効力感に関するコメントの検討

#### (1) 在籍時の自己効力感の維持、向上要因の検討

半構造化面接によって得られたコメントより、「適応資質効力感」因子の維持・向上に関連するコメントを検討した。その結果、在籍時に身に付けたことで今の仕事の自信につながっていることに対する回答として、下記に示すようなコメントが得られた。

N：「いろんな社会の仕組みや社会人としてのルールを覚えることができて自信ができました。」  
 J：「整理整頓ができることで自分の可能性を感じた。挑戦する自分が今は、自信となった感じます。」  
 B：「挨拶など学生時代に言われていたので、自然にできています。」  
 L：「人の話を聞く態度です。」

このように、多くの工業高校で展開されているマナーや自律性を高める生活指導が、生徒の卒業後に適応資質効力感の維持・向上に役立っている可能性が指摘できる。

同様に、「専門性効力感」因子に関するコメントでは、以下のように専門科目の学習内容が

直接役立っていることで自信につながったケースが見られた。

D：「化学の知識が非常に役立っている。教えられたときでも基礎を知っているので、頭に入ってくるのが分かりやすい。選択科目の高分子の授業の内容を直接やっているので、役立っています。」

A：「実習での内容で、薬品の性質の違いなどが工業高校生時代に触っていたので、まったく知らないことはなかった。」

G：「滴定検査，試験器具の取り扱い方などが役立ちました。」

H：「試験器具の名前や試験実験のまとめ方（実習報告書・レポート）などです。また，危険物の取り扱い方などです。その時は，集中力が高まってきます。」

N：「危険物取扱者の資格やガス溶接技術者の資格があることです。」

E：「危険物の資格を持っていたら役に立った。会社の定期試験がいくつか免除になりました。」

K：「酸やアルカリの調整の部門において，化学の知識が役立ちました。後はパイプを酸できれいにした後の中和処理などです。」

M：「鉄の成分や性質など授業でやったことなどです。例えば比重など知っていました。危険物の資格なども役に立っていると思います。」

I：「薬品の名前を聞いて，合成方法が少し分かる。」

O：「情報処理の内容や化学の計算式など，主に使っています。自分の働いている会社は電気回路を使うこともあり，その計算ができたことなどです。」

しかし，その一方で，関連業種就職群であっても，以下のように，高校での学習内容が役立っていないと感じているケースも少なからず見られた。

C：「まったくなしです。」

F：「仕事によって高校で学んだことが生かされないことがある。知らない化学式や大学レベルと思うくらいの内容も必要だと感じる時があります。」

また，「在籍時に仕事の自信はあったが，今は自信がなくなった，逆に，在籍時に仕事の自信がなかったが，就職後に，自信が湧いたことなどについての理由および経験」について，下記に示すケースなども見られた。

F：「入社前に教科書やノートなど一度見直したことはありますが，入社後はありません。今は学校で学んだ内容と違う部署で，学校で学んだ分野にあたる仕事についていません。在籍時は，頑張った分だけ結果がついてきたので自信があった。でも，自信があっても，就職してからは，周りの環境によって自分の実力に関係なく結果が出せなく，どうしようもない時もあります。また，やったことがない仕事を任された時などに，自信はなくなります。例えば，比較検査

や危険な内容になると少し自信はなくなります。溶剤の分析や水素ガスの処置など不慣れなことがきっちりとこなせるかが今の問題です。」

H：「試験結果のまとめ方が分からなくなって、在籍時の実習報告書を見直したことがあります。働く気持ちは、あったけど自信はなかった。実際に働いて、責任感が生まれた。今は、会社に行くのが当たり前になりました。でも、検査試験を1人でまだできないことや、ゴムについてまだまだ分かってないことに自信がありません。」

これらのコメントからは、生徒が自己の「専門性効力感」因子を、専門科目で学んだ知識・技能、資格などが直接的に業務に活用できているかどうかという観点で評価している傾向が推察される。

## (2) 就職後に職業に対する自己効力感の変容をもたらした経験

次に、実際の職業生活との関連で、職業に対する自己効力感の手がかりとなる「仕事に対する自信が高まったこと、自分にはできそうだと感じたこと。」に対する回答として、関連業種就職群が示す下記のコメントが得られた。

A：「薬品の種類ごとに異なるトラックやドラムの種類の見分けがつくようになってきた事などです。」

B：「作業内容でのエア上昇の際に、パチンとびっくりする音がでていましたが、それをうまく調整できるようになったことです。また、検品の際にクレームになりそうな製品などを事前に発見できた時など、それに表彰された時に自信が湧いてきます。」

D：「任された仕事内容がしっかりと身に付いてきた時などに、すごく自信を感じてきます。」

C：「すぐに、仕事をマスターできた時は、自分が成長していると自分に自信が持てます。」

H：「パートさんに頼られた時です。例えば、(製品としてこの商品は優れているのか)を聞かれた時にすごく自信になります。」

F：「化学分野で仕事をする時、その薬品の危険性について知っている事が、役立っている時に自信は感じます。」

G：「業務作業後の整備を、1人だけで任された時などに、頼られていると感じ自信がでけます。」

これらのコメントから、関連業種就職群では、専門科目で習得した知識、技能、資格を武器に、職場でスムーズに職務内容を習得できたり、仕事を任されたり、認められたりする経験が自己効力感を高めるエピソードとなっていることが示唆された。

一方、非関連業種就職群におけるコメントでは、関連業種就職群とは違って、以下に示すように専門科目の学習内容とは直接的な関係とは異なり、自分にとって新しい職務内容のスムーズ

な習得と、その中での自律性や忍耐強さ、責任感の強さなどを自覚する経験が自信につながっているケースが見られた。

K：「先輩の指導なしで、自分だけで作業ができれば実力がついてきたと思うのですごく自信が持てます。」

O：「業務内容での1日の報告書の書き方など、いろんなことに我慢できたことや規則を守れた時です。」

I：「先輩や看護師の方々に少し褒められた時など、細かいところも教わった時など、自信が湧きます。」

J：「仕事がうまくいくようになり、今まで以上にもっと達成することができると思って、もっとやりたくなります。」

M：「仕事の流れで、自分でミスを発見することができたり、また判断することができた時など自信が高まります。」

L：「仕事に対して、責任感を強く感じてきた時です。」

### (3) 就職後から見た工業高校での学習経験への期待

卒業・就職後の立場から見た工業高校への期待を把握するために、「どんなことを大切に後輩たちに学校生活を過ごして欲しいか。」を問うたところ、以下のコメントが得られた。

A：「この工業高校にきたことは、他の高校より求人が多いと思うので、就職試験の時期は気持ちを切り替えて、真面目に勉強に取り組んで欲しいです。また、危険物の資格など取っておくと就職試験に有利です。卒業してから取得するのは大変です。」

B：「工業高校の求人は、良い会社の求人が来るので、そこを目指して頑張っておいて欲しいです。コンピュータなど仕事の報告書など提出するので、慣れておいてください。」

K：「働くようになると時間が限られてくる。普通科では、わからないことがあるので、専門分野を学ぶことはどこで活かされるかわからない。今、大学を卒業しても仕事があるかどうかかわからない。だから、専門でしか、いけないところもあるので就職に有利だと思います。」

D：「勉強は、頑張っておいた方が良い。後は、資格取得や人間関係を円滑にするために、口の利き方など気をつけておいて欲しい。」

O：「年上の人とのコミュニケーションを大切に。社会人と学生の差は自分で思っているより、かなり大きい。中途半端な気持ちだと絶対に続かない。社会人には、学生の時という先生みたいな人はいてないから自分で考える。1人で行動できる力を身に付けていった方が良く思うよ。でも、分からないことは、素直に誰かに聞く頼る力も身につける事も大事だよ。」

これらのコメントからは、卒業生は工業高校での学習経験に対して「専門性効力感」因子に繋がる専門分野における知識・技能・資格の習得と共に、人間関係の円滑さを意識するコミュニケーション能力の向上などを期待していることが窺える。

### 3.3 考察

以上の結果より、本調査対象者の卒業生では、職業に対する自己効力感が関連業種、非関連業種ともに在籍時よりも実際の職業生活を経験しながら、なお維持・向上していくことが示唆された。「専門性効力感」因子の向上については、関連業種就職群では、職場において工業高校で身につけた専門的な知識・技能、資格などが活かされたことによると推察された。また、関連業種就職群で就職後の自己効力感を高めた要因は、専門科目で習得した知識、技能、資格を武器に、職場でスムーズに職務内容を習得できたり、仕事を任されたり、認められたりする経験であった。

一方、非関連業種就職群においても、就職後の「専門性効力感」因子は向上する傾向が見られた。就職後に職業に対する自己効力感を高めた要因としては、自分にとって新しい業務内容のスムーズな習得と、その中での自律性や忍耐強さ、責任感の強さなどを自覚する経験が自信につながっているケースが見られた。これは、工業高校での実験・実習における学習経験、作業の段取りや準備、後片付けなど、あらゆる職業に共通する基本的な態度の形成されたものであり、就職後にその有用性を生徒が感じたためではないかと推察される。

「適応資質効力感」因子については、関連業種就職群では在籍時の水準が維持されるとともに、非関連業種就職群では就職後になお水準の向上が見られた。工業高校での学習経験に対する期待においても、「適応資質効力感」因子に関連して、人間関係の円滑さを意識するコミュニケーション能力の向上などを期待していることが示された。

このような傾向は、卒業後に個別の呼びかけに応じて面談に答えてくれた肯定的な意識を有する本調査の対象者の反応として、限定的に捉える必要がある。その上で解釈するならば、これらの傾向からは、次の4点を指摘することができる。第一に、工業高校在籍時に獲得した「適応資質効力感」因子は、就職後に主として円滑な人間関係を実現するコミュニケーション能力という形で自覚されやすいことである。第二に、工業高校在籍時に獲得した「専門性効力感」因子は、関連業種就職群では習得した知識、技能、資格の直接的な活用という形で就職後も向上することである。第三に、非関連就職群では、工業高校での実践的な学習の経験が、就職後の新たな経験による影響を受けつつ、自律性や忍耐強さ、責任感の強さなど汎用的な職務能力という形で就職後も向上していくことである。しかし、第四に、このような意識は必ずしも自覚的ではなく、工業高校での学習経験に対して卒業生は、専門科目で学んだ知識・技能、資格などが直接的に業務に活用できているかどうかという観点で評価しやすいことである。



これらのことを踏まえると、今後の工業高校では、在籍時の職業に対する自己効力感を適切に就職後も維持、向上させていくためには、在籍時の学習経験の価値を、自己の専門性として習得した知識・技能、資格だけで捉えさせるのではなく、学び方や探究方法、学習の中での自律性や忍耐強さ、責任感の強さなどの獲得として捉えさせることが重要ではないかと考えられる。その上で、円滑な人間関係を実現するコミュニケーション能力の獲得という観点で自信を持たせることが、就職後の社会適応を促す上で、重要な役割を果たすのではないかと考えられる。

#### 4. 本章のまとめ

以上、本章では、第8章の進路指導を経験した工業高校生の職業に対する自己効力感が高校卒業・就職した後に、どのように変容しているかを事例検討し、明らかにした。その結果、工業化学科卒業生を対象とした本調査の条件下で以下の知見が得られた。

- 1) 本調査対象の工業高校生において「適応資質効力感」因子及び「専門性効力感」因子は、業種に問わず在籍時よりも実際の職業生活を経験しながら、なお維持・向上していくことが示された。
- 2) 就職後の「専門性効力感」因子の向上要因は、関連業種就職群では習得した知識、技能、資格の直接的な活用経験、非関連業種就職群では実践的な学習経験による自律性や忍耐強さ、責任感の強さなど汎用的な職務能力を発揮した経験によるものと推察された。
- 3) 就職後の「適応資質効力感」因子の維持・向上要因は、就職後に主として円滑な人間関係を実現するコミュニケーション能力という形で自覚されやすいことが推察された。

本章で得られた結果は、先述したように卒業後の面談を許諾した対象者の反応であり、その意味では職場への社会的な適応が図れた者の特徴を把握したものであると考える必要がある。しかし、本調査の範囲内で限定的に捉える必要があるものの、第4～5章で得られた知見に基づいて設定した3つの方策を取り入れた進路指導では、卒業・就職後にも職業に対する自己効力感が維持・向上する効果のあることが確認された。

次章では、これまでの各章で得られた知見を整理するとともに、生徒の職業に対する自己効力感の形成要因とその役割を踏まえた教育的支援のあり方を考察し、今後の実践の方向性を展望する。

## 第10章 結論および今後の課題

### 1. 本研究で得られた知見の整理

第1章で述べた通り、本研究の目的は、工業高校生の職業に対する自己効力感の構造を把握し、その形成要因と影響対象を明らかにすることであった。これは、①近年、工業高校を卒業した後、関連する業種に就職しない生徒や職業生活を適切に営めない生徒が増えつつあること、②この問題の背景として、工業高校生が様々な学習経験を自己のキャリア形成と適切に結びつけられず、将来の職業生活に対する見通しや自信、展望などをもてないことなど実践課題に基づいている。この問題について本研究では、工業高校生の将来の職業に対する自己効力感を「工業高校生が将来の自己の職業を適切に営めそうであると感じる遂行可能性の認知」と定義し、上記の実践課題の解決に向けて、1) 工業高校生の職業に対する自己効力感の構造的な把握、2) 工業高校生の職業に対する自己効力感の形成要因の検討、3) 工業高校生の職業に対する自己効力感が果たす役割の検討という3つの研究課題を設定した。これらの研究課題に対し、本研究では、第2章において、工業高校生の職業に対する自己効力感の構造把握、第3章においては、職業自己効力感構成因子群の進路指導上の妥当性の検証を行った。そして、第4～5章では、職業に対する自己効力感の形成要因としてキャリア成熟、及び自己概念との関連性を検討した。また、第6～7章では、職業に対する自己効力感の影響要因として時間的展望体験、及び進路不決断との関連性についてそれぞれ検討した。第8章及び第9章では、これまでに得られた知見を踏まえて、O市内の公立A工業高校の具体的な進路指導の中でのアクション・リサーチを実施し、3学年の進路指導における職業に対する自己効力感の推移及び卒業後の変容について検討した。以下に、各章で得られた知見及び結論を整理する。

#### 1.1 工業高校生の職業に対する自己効力感の構造把握

第2章では、第1の研究課題への対処として、工業高校生の職業に対する自己効力感について因子分析を用いて探索した。工業高校で学んだことのうち、将来の自分の仕事や職業をやっている自信が持てたと感じた経験について自由記述調査及び質問紙を行った。その結果、工業高校生の職業に対する自己効力感とは、どのような職業に就いたとしても、その職務や職場などの社会的環境に適応するために必要とされる基礎的な資質を形成したことによってもたらされる効力感である「適応資質効力感」因子及び特定の産業分野に関連する領域固有性の高い専門的な知識や技能・資格などを修得したことによってもたらされる効力感である「専門性効力感」因子の2因子により構成されていることを明らかにした。また、これら2因子からなる「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」（11項目）を作成し、以下の各章で職業に対する自己効力感の形成状況

の把握に活用することにした。また、工業高校生の職業に対する自己効力感は、1・2 学年よりも 3 学年の方が「適応資質効力感」因子、「専門性効力感」因子共に高くなり、「適応資質効力感」因子に対しては授業及び学校生活に対する意識の影響力が学年の進行に伴って強くなる傾向を示した。一方、「専門性効力感」因子に対しては、逆にこれらの影響力が学年の進行に伴って弱くなる傾向を示した。

### 1.2 工業高校生に求める基礎的・汎用的能力、社会人基礎力と職業に対する自己効力感形成期待との関連性

第3章では、第2章で抽出した職業に対する自己効力感2因子の進路指導上の妥当性を検討するために、企業が新規入職者に求める資質・能力との関連性を検討した。O 市内公立 A 工業高校へ求人提供で来校する企業人事担当者を対象に文部科学省(2011)<sup>23)</sup>が提唱する「基礎的・汎用的能力」に対する意識及び経済産業省(2006)<sup>24)</sup>が提唱する「社会人基礎力」に対する意識を把握する質問項目を設定した。その結果、「適応資質効力感」因子及び「専門性効力感」因子への形成を期待する人事担当者の方が基礎的・汎用的能力及び社会人基礎力の形成期待も高い傾向のあることが示唆された。また、「専門性効力感」因子への形成の期待については、関連企業及び工業高校生を優先に新規入職者として採用を考える企業の人事担当者の方が、形成期待が強いことが示された。これらの反応から、第2章で抽出した2因子の妥当性が確認された。

### 1.3 工業高校生のキャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響

第4章では、第2の研究課題への対処として、職業に対する自己効力感の形成要因を探索的に検討した。坂柳(1999)<sup>38)</sup>の作成した「キャリア成熟尺度」(27 項目)を用いて工業高校生のキャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響を把握した結果、工業高校生の職業に対する自己効力感の形成には、全体としてキャリア成熟が重要な役割を果たしていることが示唆された。しかし、その因果関係には、因子ごとに学年間で異なる傾向が認められた。具体的には、「適応資質効力感」因子の形成に対しては、1 学年では「キャリア関心性」因子が、2 学年では「キャリア計画性」因子が、3 学年では「キャリア自律性」因子がそれぞれ重要な役割を果たしていることが示唆された。しかし、「専門性効力感」因子の形成には、2 学年においてのみ「キャリア計画性」因子の影響力が示されたものの、1, 3 学年では有意な影響力は認められず、専門性の習得とキャリア成熟とが適切に関連づけられていない可能性が認められた。

### 1.4 工業高校生の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響

続いて第5章では、工業高校3 学年を対象に、自らの進路選択に対して自己概念の影響が最も

強いと考えられる4～5月頃の進路啓発期に焦点を当て、生徒の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響について検討した。島田・森山(2013)<sup>102)</sup>の作成した「工業高校生の自己概念尺度」(19項目)を用いて、工業高校生の自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響を把握した。その結果、進路啓発期にある工業高校生では、自己概念5因子が共に、職業に対する自己効力感の形成に寄与していることが把握された。特に、「自律志向性」因子、「専門的能力志向性」因子などの自己概念が職業に対する自己効力感に対して比較的強い影響力を示した。これに対して、「キャリア志向性」因子と「自己モニタ志向性」因子の影響力は、相対的に弱く、学校生活の中で培ってきた自己像の振り返りに基づくキャリアへの展望が、将来の職業に対する自信と適切に結び付けられていない実態に課題が見られた。

### 1.5 工業高校生の時間的展望体験と職業に対する自己効力感との関連性

第6章では、研究課題3への対処として、工業高校生の職業に対する自己効力感の影響要因として、時間的展望体験との関連性を検討した。白井(1994)<sup>59)</sup>の作成した「時間的展望体験尺度」(18項目)を用いた調査を実施した。その結果、工業高校生の職業に対する自己効力感は、「目標指向性」因子、「希望」因子、「現在の充実感」因子など、現在から将来に向けた時間的展望体験の形成に有意な影響力を示した。これらの影響力には学年間の差異が認められ、「目標指向性」因子に対する影響力が1・3学年では「適応資質効力感」因子から、2学年では「専門性効力感」因子からそれぞれ認められた。これらの結果から、工業高校生の時間的展望体験の形成には、工業に関わる専門性に依拠する自己効力感よりも、社会環境に適応するための基礎的な資質の形成に依拠する自己効力感が重要な役割を果たしており、工業高校における専門性の習得が必ずしも時間的な展望の形成に十分貢献しているとは言えない状況に実践上の課題が見出された。

### 1.6 工業高校生の職業に対する自己効力感が進路不決断に及ぼす影響

続いて第7章では、工業高校の3学年を事例に、進路指導のプロセスにおける生徒の職業に対する自己効力感と進路不決断との関連性を縦断的な視点から検討した。清水(1990)<sup>42)</sup>の作成した「進路不決断尺度」(40項目)を用いた調査を実施した。その結果、具体的な進路を決定する10月前後に進路不決断の水準の低下する傾向が示唆された。これに対して職業に対する自己効力感の推移は、変動の幅が狭く、3学年時の1年間で極端な変容は生じていない傾向が示された。また、通年の傾向として「適応資質効力感」因子と「専門性効力感」因子の両因子の水準の高い生徒の方が、「職業決定不安」因子、「職業障害不安」因子、「職業情報不足」因子、「職業モラトリウム」因子などの進路不決断状態が低い傾向が示唆された。特に、「専門性効力感」因子の高い生徒では「職業モラトリウム」因子の水準が低くなる傾向が認められた。このことから、進路不決

断状況の回避には、職業に対する自己効力感を十分に高めておく指導の必要が示唆された。

### 1.7 工業高校生の職業に対する自己効力感に着目した進路指導の実践

第8章では、第4～5章で得られた知見に基づいて設定した3つの方策をO市内の公立A工業高校の進路指導に取り入れ、アクション・リサーチを実施した。(方策①)3学年全体を通してキャリアへの関心性、計画性、自律性の向上を図る進路指導を構成し、1学年に、早期の入学直後による「進路講話」を取り入れた。(方策②)2学年に、関連業種の企業が求める人材像を生徒に把握させるための「企業説明会」を取り入れた。(対策③)3学年に、「キャリア自律性」や「自律志向性」を促す自己実現に向けた進路指導を取り入れた。その結果、本実践の工業高校3学年の進路に対する意識は、具体的な進路を決定する10月前後に水準の低下するV字型の傾向を示すことが示唆された。これに対して職業に対する自己効力感の推移傾向は、変動の幅が狭く、3学年時の1年間で極端な変容は生じていない傾向が示唆された。また、3学年時の「専門性効力感」因子の最終的な進路状況別の推移は、関連業種に就職した生徒の方が「専門性効力感」因子が高いことが示唆された。職業に対する自己効力感の形成には、3学年で取り入れた「面接模擬」、「卒業生を囲む会」などが重要な役割を果たした。これらの結果は、アクション・リサーチとしての事例の範囲で限定的に捉える必要があるものの、本章で設定した3つの方策は、3年間の進路指導において生徒の職業に対する自己効力感の形成に一定の効果があることが示された。

### 1.8 実践校における職業に対する自己効力感の就職後の変容に関する事例検討

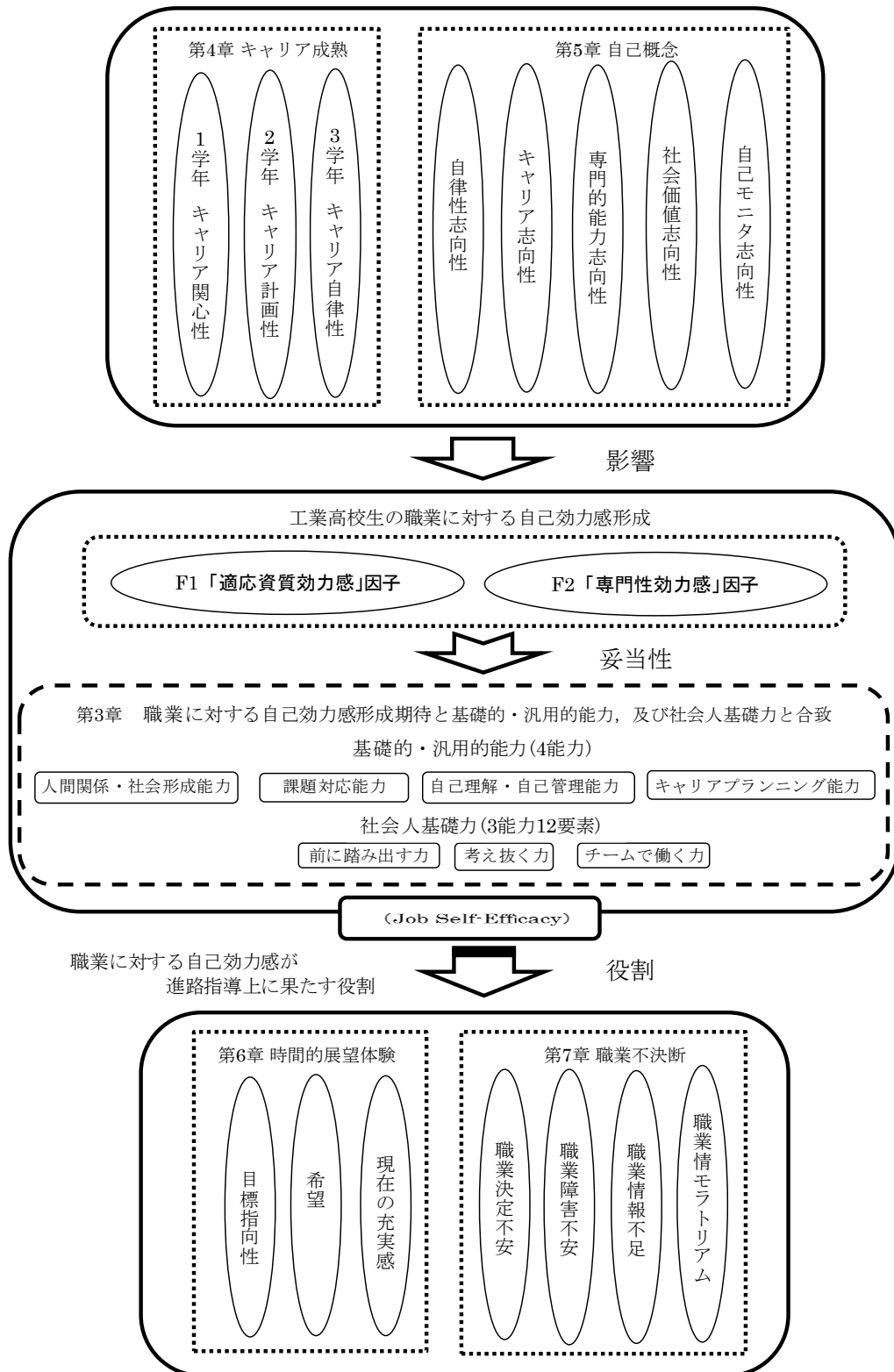
第9章では、第8章の進路指導を経て就職した卒業生を調査対象とした工業高校生の在籍時における職業に対する自己効力感の就職後の変容について事例検討を行った。第2章で作成した「工業高校生の職業に対する自己効力感尺度」及び半構造化面接によるインタビューを実施した。その際、関連業種就職者及び非関連業種就職者の群別に検討した。その結果、「適応資質効力感」因子及び「専門性効力感」因子は、業種に問わず在籍時よりも実際の職業生活を経験しながら、なお維持・向上していくことが示された。また、就職後の「専門性効力感」因子の向上要因は、関連業種就職群では習得した知識、技能、資格の直接的な活用経験、非関連就職群では実践的な学習経験による自律性や忍耐強さ、責任感の強さなど汎用的な職務能力を発揮する経験によるものと推察された。また、就職後の「適応資質効力感」因子の維持・向上要因は、就職後に主として円滑な人間関係を実現するコミュニケーション能力という形で自覚されやすいことが推察された。

## 2. 結論

各章で得られた知見は第1章で提示した研究課題に即すると、次の3点に集約できる(図X-1)。

## 第10章 結論および今後の課題

職業に対する自己効力感形成要因



図X-1 工業高校生の職業に対する自己効力感の構造と形成要因及び果たす役割

それは、①工業高校生の職業に対する自己効力感は、「F1 適応資質効力感」因子、「F2 専門性効力感」因子の2因子で構成されていること、②工業高校生の職業に対する自己効力感の形成には自己のキャリアに対する関心性や計画性、自律性がそれぞれ重要な役割を果たすと共に、学校生活における適応状況に影響を受けて形成された自己概念に影響を受けて形成されうること、③職業に対する自己効力感の高まりが、現在から将来に向けた時間的な展望の形成、進路不決断状態の低減に寄与しうることの3点である。これらの知見を本研究の結論とする。

### 3. 教育実践への示唆

本研究で得られた各知見及び結論に基づき、今後の工業高校における教科指導及び進路指導のあり方について検討する。

工業高校における生徒のキャリア形成を促す教育的支援は現在、工業高校の教科指導、進路指導、生徒指導において困難な実践課題を抱えている。従来、この問題については、個々の教師の経験に基づいて指導・支援がなされてきた。特に、教科担当教員、学級担任、進路指導担当教員が必ずしも十分な連携を図れないまま、教科指導と進路指導、生徒指導に取り組んできた経緯がある。しかし、本研究では、これまで経験的に実施してきた様々な生徒とのかかわり方を理論的に整理し、より効果的なかかわり方を提案するものである。

#### 3.1 学年の進行に応じた進路指導のあり方

第一に、本研究の第4章の知見を踏まえると、キャリア成熟と職業に対する自己効力感との関連性を踏まえた学年進行に伴う進路指導の重要性である。第4章では、職業に対する自己効力感の形成には、1学年では「キャリア関心性」因子が、2学年では「キャリア計画性」因子が、3学年では「キャリア自律性」因子がそれぞれ重要な役割を果たしていることが認められた。しかし、現在の工業高校では2～3学年を中心に具体的な進路（就職や進学）の実現に向けた取り組みが行われる場合が多い。そのため、入学時の早期段階から生徒の発達課題に合わせたキャリア教育・進路指導の課題を網羅し、主体的に進路を選択させていく能力を段階的に育成していく必要が考えられる。その際、進路指導における生徒の理解や意識が表面的にとどまることがないように、専門分野の学習経験から職業意識形成と職業に対する自己効力感形成を促していくことが重要である。本研究の知見に基づけば、学年進行に伴う進路指導のあり方として、1学年から自己のキャリアに対して積極的に関心を持たせ、それに対する情報探索を行い自己とキャリアの関係づけを深めさせる指導の強化、2学年では、自己のキャリアに対する計画的な将来展望を持たせ、目標設定とその達成に向けて現実的な対応に対する指導の強化、3学年では、自己のキャリアに対する取り組み姿勢が主体的であり、自己の意思決定に対する責任を自覚してキャリアへの向上意欲に繋げる指導の強化に力点を置かなければならない。これによって、①入学後早期の段階から工

業高校での学習経験から個々の生徒に職業や仕事と自己についての理解を深めさせ、卒業後における自らの職業生活を様々な学校生活の場面で真剣に捉えさせること、②それに向ける課題の発見とその解決に向けて、主体的な学び手としてどのように学ぶべきかを生徒自ら考えさせることができるのではないかと期待される。

### 3.2 進路指導における指導のポイント

第5章の知見を踏まえると、進路指導啓発期にある工業高校3学年では、学校生活で培ってきた自己像の振り返りに基づくキャリアへの展望が、将来の「職業」に対する「自信」と適切に結び付けられていない実態が把握された。そのため、自己像を描けるトレーニングの強化（学習経験の延長上に将来の自己像が位置付けられるように）と生涯キャリアという視点から、将来の進路実現と繋がりを持たせられるような授業構成を図っていくことが重要ではないかと考えられる。その上で、個々の生徒に将来の自己像に対する展望から現在の自分の状況を捉えさせ、その逆算から現在取り組むべき課題を明確に意識させる指導の重要性について指摘できる。

また、第6章で得られた知見より、職業に対する自己効力感、時間的展望体験に影響を与え、「目標指向性」因子や「希望」因子、「現在の充実感」因子などの形成に重要な役割を果たしていた。しかし、現在の工業高校で用いられている進路ノート（進路指導のためのワークブック）には、自分の適性や興味・関心を見つめさせ進路について考えさせる内容が盛り込まれているが、職業に対する自己効力感を促す機能は必ずしも十分ではない。例えば、進路ノートを拡充した進路ポートフォリオなどの活用を手立てとし、職業に対する自己効力感を生徒自身に意識化させる指導の展開が重要ではないかと考えられる。それによって、1学年から継続的に時間軸上の展望に立って、それぞれの時点での自己課題を明確化させることができるのではないかと期待される。

これらの指導のポイントが今後の進路指導に向けた第二の示唆である。

### 3.3 進路指導と教科指導の連携による授業構成の強化

第三に、上述した2つのポイントを実践する上で、進路指導と教科指導が適切に連携することの重要性である。第4～5章において示された通り、職業に対する生徒の自己効力感を巡る構造的な因果関係は「適応資質効力感」因子においてのみ示されたものであり、進路実現に向けたキャリア成熟と時間的展望体験が、教科指導を中心に形成される「専門性効力感」因子との間に明確な関連性は認められなかった。これは、現在の工業高校において進路指導と教科指導が適切に関連づけられていないために生じた現象ではないかと考えることができる。進路指導は進路指導課(部)、教科指導は各教科担当、生徒指導は担任の教員を中心に展開する必要があることは言うまでもない。しかし、教科指導の中で進路との関連性を踏まえた学習課題を設定することをはじ



め、進路指導課(部)が企業等から得た様々な情報や卒業生の声を各教科の学習内容にフィードバックすることで、生徒の学習に対する有効性認知を高める等の手立てが必要と思われる。

そのため、学年、学校全体へと教員間の連携を促進し、生徒に関わる多々の教員が教科担当者会議を設定する中で、その情報について共有することが重要ではないかと考えられる。その上で、進路指導という専門性が高い分掌である進路指導課(部)と学級担任がより連携することにより、生徒に向けた適切な進路指導ができるのではないかと期待される。

### 3.4 進路指導における多様なコミュニケーションの重要性

第四に、進路指導において生徒―教師間、生徒間、生徒―卒業生間などの多様なコミュニケーションを適切に取り入れることの重要性である。コミュニケーションを取り相互理解を深めさせるためには、授業の背後に生徒が単に話を聞いているだけではなく、学校生活の中で対話や質問を重ねた自分の考えを相手に伝えることができる場面を設定するなど、それに向けて生徒に意識させる適切な指導の必要性が求められるのではないかと考えられる。企業がコミュニケーション能力を重視するのは、情報共有するためには、コミュニケーション能力が必要不可欠であり、コミュニケーション能力を高めることによって、人間関係が築かれ、信頼を得ることになる。そのため、企業はコミュニケーション能力が高い新規入職者を求めており、人間関係が円滑であることは仕事の満足度や会社への愛着心に大きく寄与するものと考えられている。

また、実践校における工業高校在籍時に獲得した「適応資質効力感」因子は、就職後に主として円滑な人間関係を実現するコミュニケーション能力という形で自覚されやすいことが示された。

このことから、今後の工業高校では専門学科の枠を外した教員間の連携を促し、他学科に在籍する生徒への適切な声かけをこころがけ、自己の将来に夢や希望を抱かせる円滑な人間関係を実現するコミュニケーション能力を高めうる進路指導が期待される。

以上のような改善の方向性を踏まえつつ、これまでも幅広い産業社会を支える人材を輩出させてきた工業高校は今後も、生きた情報の収集や分析に努めなければならない。そして、学校状況に即した進路指導を再検討していく必要がある。また、工業高校は、今後の経済社会の様々な情勢に対応しうる工業人として、必要とされる力を身につけた人材を育成すると共に、地域や産業社会の発展に貢献するために今後も重要な役割をはたさなければならないであろう。以上に考察した教育実践への示唆を整理して図X-2に示す。

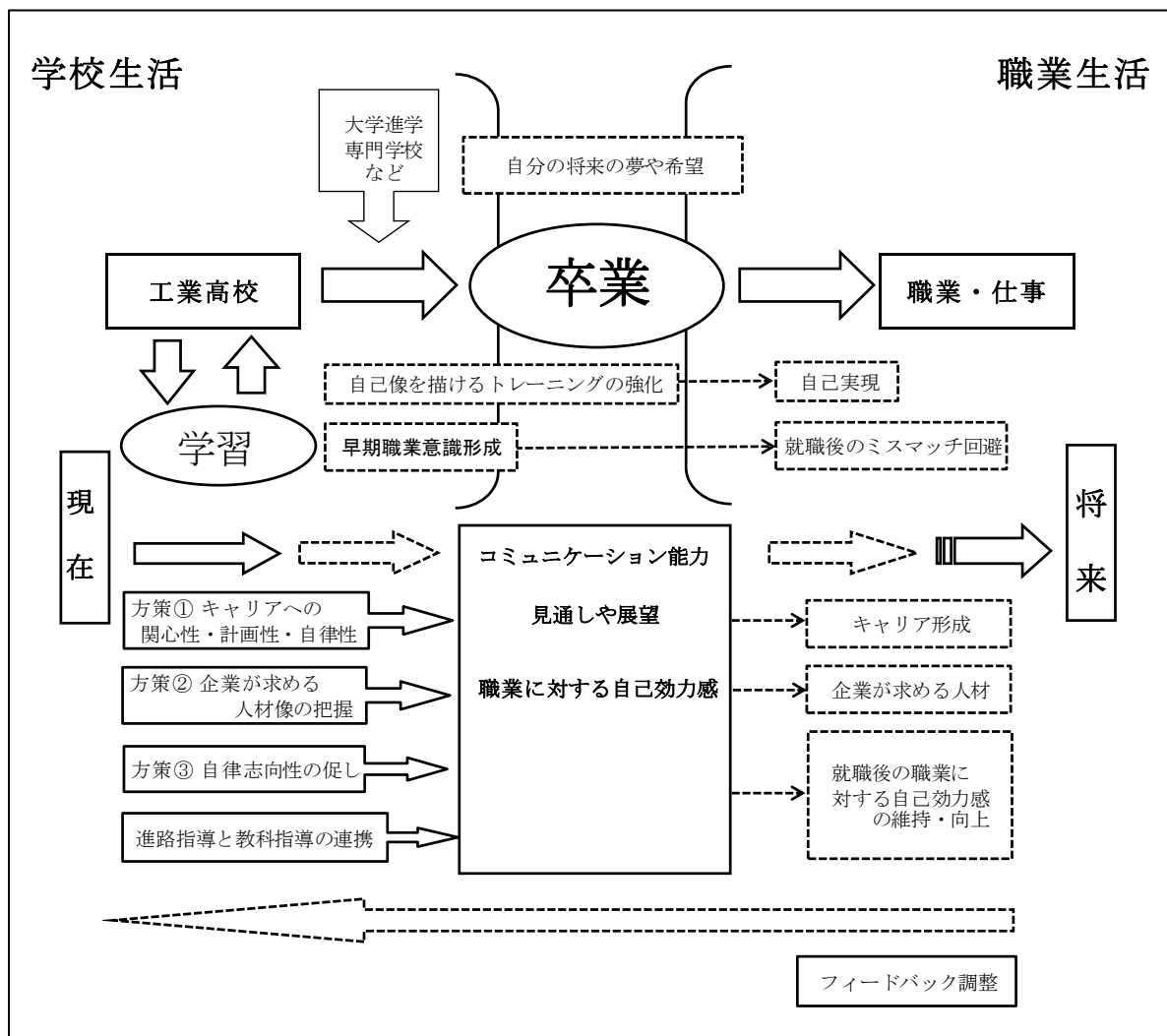


図 X-2 教育実践への示唆

#### 4. 今後の課題

しかし、本研究には以下に示すいくつかの問題が残されている。第一に、工業高校生の職業に対する自己効力感 2 因子の妥当性と汎用性に関するさらなる検証の必要性である。本研究では職業に対する自己効力感を把握するために、生徒の自由記述に基づいて測定尺度を構成した。しかし、本尺度の汎用性を高めていくためには、自己効力感に関する既存の測定尺度など、外的な基準との関連性についてデータを蓄積する必要がある。その際、工業科のみならず、商業科や農業科等の他の専門学科で学ぶ高校生の自己効力感との関連性を検討する必要がある。その上で、本研究では、十分に検討できていない不本意入学してきた生徒や中途退学していく生徒などを視野に入れ、各教科の学習状況や部活動の取組み状況など、職業に対する自己効力感の形成要因について多様な観点からの検討が認められる。

第二に、各章で得られた知見の追試の必要性である。本研究では、種々の調査の結果、①職業に対する自己効力感のうち「専門性効力感」因子の形成要因が限定的であったこと、②自己概念の「自己モニタ志向性」因子及び「キャリア志向性」因子の影響力が相対的に弱かったこと、③「専門性効力感」因子が時間的展望体験の形成に十分貢献している状態でなかったこと、④進路指導啓発期の「職業モラトリウム」傾向を回避するためには「専門性効力感」因子の醸成が必要であること等、いくつかの実践上の課題が見出された。これらに対して今後、同様の調査をより大規模に実施し、把握された生徒の実態を追試していく必要がある。その上で、これらの課題に対応しうる具体的な進路指導の改善方策を引き続き実践的に検討していく必要がある。

第三に、卒業・就職後における職業に対する自己効力感の形成状況の継続的な追究の必要性である。本研究では、在籍中の工業高校生を対象に第2章で作成した測定尺度を用いたが、就職後の卒業生が抱く職業に対する自己効力感には第2章で抽出した2因子以外の要因が含まれる可能性も否定できない。工業高校を卒業した後、就業を通して形成されうる職業に対する自己効力感の構成要素について改めて検討する必要があると考えられる。これらの検討を通して、職業に対する自己効力感の形成を工業高校と社会との連続性の中で生涯教育の観点から継続的に追究していくことが求められよう。これらについては、今後の課題とする。

## 文献

- 1) 文部科学省：高等学校学習指導要領(平成 21 年 3 月告示)，p.5 (2009)
- 2) 高等学校新教育課程説明会資料〔職業に関する教科〕(中央説明会 工業部会) 平成 21 年度，p.276 (2009)
- 3) 中央教育審議会教育課程企画特別部会論点整理，pp.44-45，  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf) (2018 年 6 月 5 日閲覧)
- 4) 高等学校学習指導要領 平成 30 年 3 月公示，(2018)  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/04/24/1384661\\_6\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/04/24/1384661_6_1.pdf) (2018 年 6 月 5 日閲覧)
- 5) 文部省(文部科学省)：高等学校学習指導要領 工業科編(試案) 第 1 篇 工業課程一般篇 第 1 章 高等学校における工業教育の目標 昭和 26 年度版，(1951)
- 6) 文部省(文部科学省)：高等学校学習指導要領 工業科編 第 1 章 工業科の目標 昭和 31 年度改訂版，(1956)
- 7) 文部省(文部科学省)：高等学校学習指導要領 大蔵省印刷局 第 2 章 各教科・科目 第 10 節(工業) 昭和 35 年告示，(1960)
- 8) 文部省(文部科学省)：高等学校学習指導要領 第 2 章 各教科 第 10 節(工業) 昭和 45 年 10 月告示，(1970)
- 9) 文部省：高等学校学習指導要領 明治図書 文部省 各教科 第 10 節(工業) 昭和 53 年改訂版，(1978)
- 10) 文部省(文部科学省)：高等学校学習指導要領 第 3 章 専門教育に関する各教科 第 2 節(工業) 平成 11 年 3 月告示，(1999)
- 11) 全国工業教育理念検討委員会：新しい時代の工業教育「創造的なものづくり教育を目指して」最終まとめ，社団法人 全国工業高等学校長協会，pp.1-2 (2005)
- 12) 仙崎武・他編著：キャリア教育の系譜と展開，社団法人 雇用問題研究会，pp.69-78 (2008)
- 13) 労働省(厚生労働省)：職業安定法，第 5 条の 4，法律 第 141 号，(1947)
- 14) 文部省(文部科学省)：職業指導の手引き-管理・運営編，高等学校キャリア教育の手引き，第 1 章 キャリア教育とは何か，第 3 節 キャリア教育と進路指導，進路指導の定義と諸活動，(1) 進路指導の定義，p.39 (1995)
- 15) 文部省(文部科学省)：進路指導の手引き-中学校学級担任編，日本職業指導協会，高等学校キャリア教育の手引き，第 1 章 キャリア教育とは何か，第 3 節 キャリア教育と進路指導，進路

- 指導の定義と諸活動, (1)進路指導の定義, p.390 (1961)
- 16) 文部省(文部科学省):進路指導の手引-高等学校ホームルーム担任編, 日本進路指導協会, 高等学校キャリア教育の手引き, 第1章 キャリア教育とは何か, 第3節 キャリア教育と進路指導, 進路指導の定義と諸活動, (1)進路指導の定義, p.40 (1983)
- 17) 藤本喜八: 進路指導の定義について, 進路指導研究, vol.8, pp.37-39 (1987)
- 18) 文部科学省:中央教育審議会答申, 初等中等教育と高等教育との接続の改善について, 第6章 学校教育と職業生活との接続, 第1節 学校教育と職業生活の接続の改善のための具体的方策, (1999)
- 19) 文部科学省:キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議, キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために～, 第2章 キャリア教育の意義と内容, p.14 (2004)
- 20) 文部科学省:キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議, 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために～」第3章キャリア教育の基本方向と推進方策, p.22 (2004)
- 21) 文部科学省:中央教育審議会 キャリア教育・職業特別部門「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(審議経過報告), II 改革の基本的方向性, p.9 (2009)
- 22) 文部科学省(国立教育政策研究所生徒指導研究センター):キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書, 第2章キャリア教育を通して育成すべき能力についてのこれまでの考え方, pp.13-22 (2011)
- 23) 文部科学省:中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申), 第1章 キャリア教育・職業教育の課題と基本的方向性, pp.16-27(2011)
- 24) 経済産業省: 社会人基礎力とは, 3つの能力/12の能力要素, (2006)  
[www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku\\_image.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf) (2018年6月5日閲覧)
- 25) 斉藤武雄・田中喜美・依田有弘編著:工業高校の挑戦-高校教育再生への道, 学文社, p.318 (2005)
- 26) Bandura, A.: Self-efficacy toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review*, vol.84, pp.191-215 (1977)
- 27) Bandura, A.: *Social learning theory*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall (1997)
- 28) Bandura, A.: *Social foundations of thought and action, A social cognitive theory*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall (1986)
- 29) Bandura, A.: Explorations in self-efficacy. In S. Sukemune (Ed.), *Advances in social Learning theory*, Kaneko-shobo (1985)

- 30) 渡辺三枝子：新版 キャリアの心理学・キャリア支援への発達的アプローチ，ナカニシヤ出版，p.212 (2007)
- 31) Raynor, J.O. & Entin, E.E.: *Motivation, career striving and ageing*, New York, Hemisphere (1982)
- 32) 木村周：キャリア・カウンセリングー理論と実際，その今日的意義ー，雇用問題研究会，pp.12-13 (1997)
- 33) Super, D.E : Self concepts in vocational development. In D.E.Super, R.Starishevsky. N. Matilin & J.P. Jordaan (Eds.), *Career development : Self concept theory*, New York:College Examination Board, pp.1-16 (1963)
- 34) Gysbers, N.C. & Henderson P. : *Developing & Managing Your School Guidance and Counseling Program 4th ed.* American Counseling Association, p.55 (2005)
- 35) Super, D.E.: *The Psychology of Careers*, New York, Harper & Row (1957)
- 36) 浦上昌則：女子短大生の職業選択過程についての研究，進路選択に対する自己効力，就職活動，自己概念の関係から，教育心理学研究，vol.44, pp.195-203 (1996)
- 37) Super, D.E : Career & Life development, In Brown, D. & Brooks, L (Eds.) *Career Choice and Development*, Jossey-Bass (1984)
- 38) 坂柳恒夫：成人キャリア成熟尺度(ACMS)の信頼性と妥当性の検討，愛知教育大学研究報告，vol.48, pp.115-122 (1999)
- 39) 浦上昌則：進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連，教育心理学研究，vol.41(3), pp.358-364 (1993)
- 40) 坂柳恒夫・竹内登規夫：進路成熟態度尺度(CMAS-4)の信頼性および妥当性の検討，愛知教育大学研究報告(教育科学編)，vol.35, pp.169-182 (1986)
- 41) Osipow, S.H, Carney C.G. & Barak, A. A scale of educational-vocational undecidedness : A typological approach. *Journal of Vocational Behavior*, Vol.9, pp.233-243 (1976)
- 42) 清水和秋：進路不決断尺度の構成，関西大学社会学部紀要，vol.22(1), pp.63-81 (1990)
- 43) 奥井秀樹・大里大助：若年労働者の職業的進路不決断の測定，進路指導研究，vol.22, pp.19-24 (2004)
- 44) 萩原俊彦・櫻井茂男：“やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討，教育心理研究，vol.56, pp.1-13 (2008)
- 45) 粕川正光・木村栄宏：職業的進路不決断傾向の測定による大学生のキャリア意識類型化の試み，千葉科学大学紀要，vol.2, pp.5-31 (2009)
- 46) 浦上昌則：学生の進路選択に対する自己効力に関する研究，名古屋大学教育学部紀要（教育心理学編），vol.42, pp.115-126 (1995)
- 47) Hackett,G. & Betz, N. : A self-efficacy approach to the career development of women,

- Journal of Vocational Behavior*, vol.3, pp.326-339 (1981)
- 48) Betz, N. E. & Hakertt, G. : The relationship of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in college women and men, *Journal of Counseling Psychology*, vol.28, pp.399-410 (1981)
- 49) Taylor, K.M. & Betz, K.M. : Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career in decision, *Journal of Vocational Behavior*, vol.22, pp.63-81 (1983)
- 50) Lent, R. W., Larkin, K.C. & Brown, S.D. : Relation of Self-efficacy to inventoried vocational interests, *Journal of Vocational Behavior*, vol.34, pp.279-288 (1989)
- 51) Lapan, R. T., & Jingeleski. : Circumscribing vocational aspirations in junior high school. *Journal of Counseling Psychology*, vol.39 (1), pp.81-90 (1992)
- 52) Hackett, G. & Lent, R.W. : *Theoretical advances and current inquiry in career Psychology*. In S.D. Brown & R.W. Lent (Eds.), *Handbook of Counseling psychology* (2nd Ed., pp.419-452) New York : Wiley (1992)
- 53) Lewin, K. : *Time perspective and moral*, New York, Houghton Mifflin. (レヴィン K. 著, 末永俊郎訳(1942). 時間的展望とモラル, 東京創元社), (1954)
- 54) 富安浩樹: 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連, 教育心理学研究, vol.45, pp.329-336 (1997b)
- 55) Crites, J.O. Measurement of vocational maturity in adolescence : I. Attitude test of the Vocational Development Inventory. *Psychological Monographs*, vol.79 (1965), 道脇正夫 (訳) 職業的発達インベントリーによる態度テスト 職業的発達の概念と測定 職業研究所, pp.11-98 (1972)
- 56) 中西信男 : 進路発達検査(CRT-2)の研究, 大阪大学人間科学部紀要, vol.4, pp.113-160 (1976)
- 57) 竹内登規夫・坂柳恒夫 : 進路成熟態度尺度(CMAS-1)の作成と項目分析, 愛知教育大学研究報告教育科学, vol.31, pp.193-210 (1982)
- 58) 下山晴彦 : 大学生の職業未決定の研究, 教育心理学研究, vol.34, pp.20-30 (1986)
- 59) 白井利明 : 時間的展望体験の作成に関する研究, 心理学研究, vol.65, pp.54-60 (1994)
- 60) 大石郁美・岡本祐子 : 青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連, 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, vol.8, pp.43-53 (2009)
- 61) 奥田雄一郎 : 大学生の時間的展望の構造に関する研究, 共愛学園前橋国際大学論集, vol.8, pp.13-22 (2008)
- 62) 當山明華 : 高校生の学習動機づけと将来展望に関する研究, 東北大学大学院教育学研究科, 研究年報, vol.58(2), pp.329-341 (2010)

- 63) 渡辺三枝子：新版 キャリアの心理学，キャリア支援への発達のアプローチ，ナカニシヤ出版，  
p.14 (2007)
- 64) 富永美佐子：進路選択自己効力に関する研究の現状と課題，キャリア教育研究，vol.25，  
pp.97-111 (2008)
- 65) Betz, N. E. : Career self-efficacy. In Frederick, T.L. & Leong, A.B.(Eds.) *Contemporary models in Vocational psychology : a volume in honor of Samuel H. Osipow*. NJ : Lawrence Erlbaum Associates, pp.55-77 (2001)
- 66) 古市裕一：青年の職業忌避傾向とその関連要因についての検討，進路指導研究，vol.16，  
pp.16-22 (1995)
- 67) 富安浩樹：大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連，発達心理学研究，  
vol.8, pp.15-22 (1997a)
- 68) 富永美佐子：女子大学生の進路選択過程における自己効力，進路指導研究，vol.20, pp21-31  
(2000)
- 69) 安達智子：大学生の進路発達過程 社会・認知的進路理論からの検討，教育心理研究，vol.49，  
pp.326-336 (2001a)
- 70) 長岡大・松井賢二・山田亮：大学生の進路選択に対する自己効力と進路（キャリア）成熟，  
進路指導研究，vol.20, pp.11-20 (2001)
- 71) 長岡大・松井賢二：大学生の進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連，進路指導研究，  
vol.19, pp.10-17 (1999)
- 72) 浦上昌則：進路決定に対する自己効力測定尺度，日本教育心理学会第 33 回総会発表論文集，  
pp.453-454 (1991)
- 73) 高須真紀子：高校生の進路意志決定に関する因果モデル作成の試み，自己効力理論の視点から，  
立正大学哲学・心理学会紀要，vol.23, pp.17-29 (1997)
- 74) 大濱裕司・古川雅文：高校生の進路選択に対する自己効力を高める，進路先訪問と先輩の体  
験談の効果，日本教育心理学会第 41 回総会発表論文集，p.414 (1999)
- 75) 永作稔・新井邦二郎：高校生用進路決定自己効力感尺度の作成(2)，因子妥当性の検討，筑波  
大学発達臨床心理学研究，vol.14, pp.79-84 (2002)
- 76) 永作稔・新井邦二郎：高校生用進路決定自己効力感尺度の作成の試み，筑波大学発達臨床心  
理学研究，vol.13, pp.69-75 (2001)
- 77) 大谷哲朗：高校生の進路選択自己効力感が学校適応感に及ぼす影響，比治山大学現代文化学  
部紀要，vol.10, pp.147-154 (2003)
- 78) 長谷川龍彦：中学生の自尊感情と進路決定に対する自己効力測定尺度作成の試み，学校教育



- 研究, vol.6, pp.31-47 (1995)
- 79) 松井賢二・奈良井啓子：中学生の学校適応と進路（キャリア）成熟，進路選択に対する自己効力感との関連，新潟大学教育人間科学部紀要人文・社会科学編, vol.3, pp.363-373 (2001)
- 80) 宮崎太一・西川和夫：進路決定自己効力に対する自我同一性及び自己統制感の影響，中学生を対象とした追跡的研究，三重大学教育学部研究紀要教育科学, vol.55, pp.103-113 (2004)
- 81) 富永美佐子：高校生のための進路選択自己効力尺度の作成，東北大学大学院教育学研究科研究年報, vol.54(2), pp.355-376 (2006)
- 82) Lent, R.W., Brown, S.D. & Hackett, G. : 1994 Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice and performance. *Journal of Vocational Behavior*, vol.45, pp.79-122 (2006)
- 83) 安達智子：進路選択に対する効力感と就業動機，職業未決定の関連について，女子短大生を対象とした検討発達過程 社会・認知的進路理論からの検討，心理学研究, vol.72, pp.10-18 (2001b)
- 84) 児玉真樹子・松田敏志・戸塚唯氏：大学生の進路選択行動に及ぼす自己効力及び職業アイデンティティの影響，広島大学大学院教育学研究科心理学研究, vol.2, pp.63-72 (2002)
- 85) 大谷哲朗・久保田昌子：高校生の進路選択自己効力感と無気力感の関係，日本教育心理学会第42回総会発表論文集, p.431 (2000)
- 86) 坂柳恒夫：中学生の進路成熟に関する縦断的研究，愛知教育大学教科教育センター研究報告, vol.16, pp.299-308 (1992)
- 87) 川崎友嗣：職業情報の検索によるキャリア決定自己効力・キャリア不決断の変化，職業ハンドブック CD-ROM 検索システムの効果測定，悠峰職業科学研究紀要, vol.7, pp.12-21 (1999)
- 88) 下村英雄：自己分析課題がコンピュータによる情報検索及び進路選択に対する自己効力に与える影響，進路指導研究, vol.20, pp.9-20 (2000)
- 89) 三村隆男・白石紳一：大学における体験活動を取り入れた進路授業の進路決定自己効力に関する研究(1)，上越教育大学研究紀要, vol.21, pp.65-75 (2001)
- 90) 高良美紀・金城亮：インターンシップの経験が大学生の就業意識に及ぼす効果，職業レディネスおよび進路選択に対する自己効力感を中心として，琉球大学法文学部人間科学科研究紀要人間科学, vol.8, pp.39-57 (2001)
- 91) 田澤実：職業選択時における大学生の自己効力，中央大学大学院研究年報, vol.31, pp.347-359 (2002)
- 92) 安住伸子・足立由美：女子大生の進路選択自己決定援助に関する研究，進路選択に対する自己効力尺度を用いて，学生相談研究, vol.25, pp.44-55 (2004)

- 93) 笹谷聡史・小川亮：進路指導における情報教育的な授業実践，高校生の進路選択への自己効力を発表活動の中で高める試み，日本教育工学会第18回大会講演論文集，pp.497-498 (2002)
- 94) 中野良樹・鈴木麻衣子：進路選択と学業における自己効力感が高専生の学習意欲に及ぼす影響，福島工業高等専門学校研究紀要，vol.42，pp.113-120 (2002)
- 95) 宮下明大：AO 選抜入学者にみる進路選択理由と自己効力感について，立命館高等教育研究 / 立命館大学 大学教育開発・支援センター編，vol.2，pp.39-58 (2003)
- 96) 下村英雄：中学生におけるコンピュータを活用したキャリアガイダンスが進路自己効力感に与える影響，教育心理学研究，vol.55，pp.276-286 (2007)
- 97) 坂柳恒夫・清水和秋：中学生の進路課題自信度と性役割自己概念との関連，進路指導研究，vol.11，pp.18-27 (1990)
- 98) 河崎智恵：家庭科におけるキャリア教育モデルの検討・能力開発領域の尺度の構成を中心に，進路指導研究，vol.22，pp.25-33 (2003)
- 99) 廣瀬英子：進路に関する自己効力研究の発展と課題，教育心理学研究，Vol.6(3)，pp.343-355 (1998)
- 100) 安田嘉男・高部博子：工業高校卒業者の職業選択と職業に関する研究，進路指導研究，vol.7，pp.9-17 (1986)
- 101) 柿原長弘・松浦正史：職業高校に学ぶ生徒の勤労観に関する認知的な態度と行動的な態度との比較，日本産業技術学会誌，vol.38(2)，pp.77-84 (1996)
- 102) 島田和典・森山潤：工業高校における生徒の自己概念の形成と影響，風間書房 (2013)
- 103) 阿濱茂樹・東良典：工業高校の生徒の職業に関する研究，金沢大学教育学部紀要教育科学編，vol.55，pp.65-72 (2006)
- 104) 逸見 正・森山潤：工業高校科の授業における生徒のセンスに対する教師の捉え，日本産業技術教育学会誌，vol.53(1)，pp.33-42 (2011)
- 105) 厚生労働省：新規学卒者の離職状況 新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移，  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137940.html> (2018年6月5日閲覧)
- 106) 高校生の就職問題に関する検討会議：高校生の就職問題に関する検討会議報告，文部科学省(2001),[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/008/toushin/010201.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/008/toushin/010201.htm)  
(2018年6月5日閲覧)
- 107) 赤木愛和・橋本峯三・鍛冶拓美・中嶽治麿・他：勤労青年教育に関する基礎的研究—工業高校卒業生の職場生活，実態と生活意識，日本教育学会大会研究発表要項，vol.18，pp.74-78 (1958)
- 108) 長谷川雅康・佐藤史人：工業教育に対する工業に従事している卒業生による評価—大阪市立

都島工業高等学校の事例－, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科技術・職業教育学研究室,  
職業と技術の教育学, vol.15, pp.67-81 (2002)

109) 理科教育及び産業教育審議会: 今後の専門高校における教育の在り方等について(答申),  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/rika/toushin/980701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/rika/toushin/980701.htm) (2018 年 6 月 5 日閲覧)

## 謝 辞

学位論文執筆及び研究の遂行にあたり、多くの方々のご指導、ご支援を頂きましたことを深く感謝をいたします。特に、指導教員であり、本論文の主査である兵庫教育大学大学院の森山 潤 教授には、修士課程での研究計画の段階から本論文の遂行に至るまで長期間に渡り、懇切丁寧なご指導をいただきました。先生には、本当に大変ご多忙な中、お時間の許す限り調整いただき、遠隔ゼミなど熱意あるご指導を賜りました。先生の研究に対する気骨ある探求心や学際的な鋭い考察など研究に対する姿勢に感銘を受けるとともに、先生のご指導と励ましなしには、本研究の遂行はあり得ませんでした。心より感謝申し上げます。副査である、兵庫教育大学大学院の小山英樹 教授には、技術教育の長年にわたる研究の見地から、多角的な視点での貴重なご助言、指導をいただきました。さらに、兵庫教育大学大学院名誉教授の松浦正史先生には、内地留学研究生から修士課程の折に本論文の基礎研究に対して貴重なご助言、ご指導、そして励ましをいただきました。心より御礼申し上げます。

本論文の研究におきましては、本当に多くの皆様方にご協力、ご支援をいただきました。特に、各章で実施しました調査にご協力いただきました調査対象校の生徒の皆さんはもちろんのこと、大阪市立工業高等学校の担任の先生方には調査の依頼・遂行のお力添えをいただき、本研究のご支援をいただきました。また、第3章、第9章で実施しました調査には、企業の人事担当者、職業現場で活躍する卒業生の方々にインタビューなどご協力をいただきました。

この他、職場である大阪市立泉尾工業高等学校進路指導課をはじめとする先生方や兵庫教育大学大学院の技術・情報教育研究室の皆様にも、懇切なる支援を頂きました。ご協力をいただきました皆様に、心より御礼申し上げます。このような多くの皆様のご協力とご支援があつて、本論文をまとめることができました。

これまで研究の遂行にあたり私を支えてくれた家族（愛犬の新三郎号らも）や友人を含めて、すべての皆様に心より感謝の意を表し、謝辞といたします。ありがとうございました。

2018年 6月12日

山 尾 英 一

## 本研究に関する論文など

### 第1章 緒論

山尾英一，森山潤：工業高校生における生徒の職業に対する自己効力感の形成に関する研究課題の展望，兵庫教育大学学校教育学研究，第30巻，pp.185~196，2017

### 第2章 工業高校生における職業に対する自己効力感の構造把握

山尾英一，森山潤：工業高校生の職業に対する自己効力感の実態分析，日本産業技術教育学会誌（日本産業技術教育学会），第52巻，第3号，pp.169~176，2010

### 第3章 企業が工業高校生に求める基礎的・汎用的能力，社会人基礎力と職業に対する自己効力感の形成期待との関連性

山尾英一，森山潤：工業高校生の職業に対する自己効力感形成への期待と基礎的・汎用的能力との関連性，日本産業技術教育学会近畿支部第33回研究発表会（大阪）講演要旨集，pp.41~42，2016

山尾英一，森山潤：工業高校生の職業に対する自己効力感形成への期待と社会人基礎力との関連性，日本産業技術教育学会第60回全国大会（弘前）講演要旨集，p.114，2017

### 第4章 工業高校生におけるキャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響

山尾英一，森山潤：工業高校生におけるキャリア成熟が職業に対する自己効力感に及ぼす影響，日本産業技術教育学会誌（日本産業技術教育学会），第54巻，第2号，pp.95~101，2012

### 第5章 工業高校生における自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響

山尾英一，森山潤：工業高校生における自己概念形成が職業に対する自己効力感に及ぼす影響，日本産業技術教育学会第57回全国大会（熊本）講演要旨集，p.79，2014

第6章 工業高校生における職業に対する自己効力感と時間的展望体験との関連性

山尾英一，森山潤：工業高校生における職業に対する自己効力感と時間的展望体験との関連性，日本産業技術教育学会誌(日本産業技術教育学会)，第55巻，第2号，pp.79~85，2013

第7章 工業高校3年時における生徒の職業に対する自己効力感が進路不決断に及ぼす影響

山尾英一，森山潤：工業高校3年時における生徒の職業に対する自己効力感が進路不決断に及ぼす影響，日本産業技術教育学会誌(日本産業技術教育学会)，第56巻，第3号，pp.206~214，2014

第8章 工業高校生の職業に対する自己効力感に託目した進路指導の実践

Hidekazu Yamao, Jun Moriyam, Kazunori Shimada, Yasushi Ichihara, Youichi Miyagawa, Hisashi Nakahara, Tetsuya Uenosono : Effects of Career Guidance on Promoting Students' Job Self-Efficacy in Technical High School :A Longitudinal Case Study in Japan, *Journal of Asian Vocational Education and Training*, Vol.7,pp.14-21

第9章 実践校における職業に対する自己効力感の就職後の変容に関する事例検討

山尾英一，森山潤：工業高校生の在籍時における職業に対する自己効力感の就職後に変容に関する事例検討，日本産業技術教育学会誌(日本産業技術教育学会)，第58巻，第4号，pp.223~232，2016

## 本研究に関する受賞など

2014年 8月 日本産業技術教育学会 学会賞（奨励賞）受賞

2017年 8月 日本産業技術教育学会 学会賞（論文賞）受賞

